
魔獣使い

ムク文鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔獣使い

【Nコード】

N8514V

【作者名】

ムク文鳥

【あらすじ】

カノルドス王国北東部の辺境。魔獣の森。

他では姿を見る事ができない、様々な魔獣の暮らす魔境。

その魔境で一人の少年と一人の少女が出会う時、物語は始まる。

この小説は、作者のもう一つの小説『辺境令嬢輿入物語』と同じ背景設定、同じ時代設定を使用しています。ちよっぴりクロスオーバーもする予定。

序章

その国は病んでいた。

それも末期の死病に。

大陸の最北端に存在するその国は、他国から見ればさほど魅力のない国だった。

雪の多い土地柄ゆえに水は豊富なものの冬が長く、作物を育てるには不向き。

平地よりも山地が多く、森林資源や鉱物資源はあるものの、莫大な軍事費を注ぎ込んでまで手に入れようとする程のものでもない。

それゆえに大陸に存在するどの国も、征服よりは交易でそれらの資源を求めることを選んだ。

逆にその国は、それらの資源を提供することで、長い冬のための食糧を買い込むことができた。

そんな持ちつ持たれつの関係が、その国を争いとは無縁の時間を永く過ごさせることになる。

永い永い平穏がその国をゆつくりと、だが確実に腐らせていったのだ。

王侯貴族は民を守ることよりも、自身の欲望を叶えることばかりを考えるようになり、当然その皺寄せは民たちへと向けられる。

ただでさえ少ない作物は、その殆どが支配者階級に占められて。

貧しい民たちは、作物の育たない長い冬の間、農作業以外の仕事をすることで何とか生き長らえている状態。

それを知ってなお、支配者たちは民に手を差し伸べることはせず、それどころか自分たちの懐を暖めるため、より厳しい税を課していくまさに悪循環。

贈収賄がまかり通り、国内の治安も荒れに荒れ、街や村の外側では野党や追い剥ぎが、そして内側では盗賊が好き勝手に暴れ回る。

そんな膿み爛れ、腐れ落ちる寸前の状態に、支配者たちは気付いていない。いや、気付いていたとしても気付かない振りを続けた。

そんな末期の死病に取り憑かれた国。その国の名はカノルドス王国といった。

カノルドス王国の屋台骨たる支配者たちは、自分の利益ばかりを追求し、民を救うどころか支配者同士で互いの足を引っ張り合う。より一層の財を求め、自分よりも財を持つ者を陥れようと。より高い地位を得ようと、自分よりも高い地位の者を亡き者にせんと。当然見向きもされぬ被支配者たちは、ますます貧困に喘ぐことになる。

だが、そんな朽ち果てるのを待つばかりのカノルドスに、一筋の光が射し込んだ。

腐り果てた支配者たちを打倒しようと、一人の少年が立ち上がる。その少年は幾つかの心ある辺境の小貴族の協力を得て、『カノルドス解放軍』を立ち上げた。

しかも、その少年は自身が遠く王の血を引くと主張し、自身こそが王位に相応しいと告げて。

その王の証こそが、その少年が身に宿す異能であった。

異能。

それはまさに通常では考えられぬような異常を引き起こす力。異能には様々な種類がある。手を触れずに物を動かす物、他者の心を読む者、動物や植物と心を通じ合わせる者など。

かつては、異能を持つことこそが王の証とされた時代があった。

これはカノルドスの建国王が異能者であったからだと言われ、事実カノルドス王家には多くの異能者が生まれた。

元々異能者は千人に一人、万人に一人とも言われるほど、異能を持つ者は極めて少ない。

そんな異能を持つことこそ、王として選ばれる条件とされていたのだ。

だが長い年月の中で、王の血筋に異能が現われることが徐々に減っていった。

事実ここ数代の王の中で、異能を宿した者は一人もいない。

だが少年は、そんな異能を実に二つも宿していた。

一つは如何なる敵をもなぎ倒す『雷』の異能。

もう一つは味方のどんな傷でも癒す『治癒』の異能。

とりわけ『雷』の異能は、長いカノルドス王国の歴史の中でも、王族にしか現れたことがないとされ、まさに王の証ともいうべき異能であった。

この『雷』の異能こそが自身が王たる証であるとして、少年は腐り果てた支配者たちへと戦いを挑んだ。

これが後の世に『解放戦争』と呼ばれる戦いの始まりであった。

『解放戦争』は一年に渡り続き、少年はその戦いに勝利する。

『カノルドス解放軍』は少数ながらも高い士気と練度を誇り、数の上では圧倒的に不利でありながら、王国軍に一步も劣らず戦い続けた。

これはもちろん少年が持つ異能のなせる業。そしてそれだけではなく、少年は人々を惹き付ける何かを持っていた。

数多くの優秀な人材が少年の元に集まり、寡兵ながら『カノルドス解放軍』は戦った。

もちろん時に敗走もしたが、『カノルドス解放軍』は最後まで戦い続けた。

更に加えて、類が友を呼んだのか、それとも天の采配か。少年の元には少年以外にも異能者が集ったのだ。

優秀な人材、複数の異能者、そしてなにより民衆の支持。

数では勝りながらも、腐れ爛れ切った王国軍が『カノルドス解放軍』に敵うはずがなく、一年という僅かな月日で少年は玉座へと辿り付いた。

共に戦った『カノルドス解放軍』の仲間たちを国の中枢に据え、少年は新生カノルドス王国の誕生を宣言した。

沸き返る民衆は口々に少年の名を口にし、新しい王国と新しい国王の誕生を祝った。

ユイシーク・アーザミルド・カノルドス1世。それが新しい国王の名前であった。

この時少年は僅か16歳。実に年若い国王の誕生であった。

新王国と新国王の誕生から2年。

王国北東部のとある辺境の村で、一人の少年と一人の少女が出会ったところから、この物語は始まる。

序章（後書き）

プロローグは『辺境令嬢輿入物語』と共有。最後の一文だけが違う仕様。

01 - 魔物の森の少年（前書き）

ここから新連載の本格始動となります。

今後とも、気長にお付き合いいただければ幸いです。

01 - 魔物の森の少年

「リヨウトお、リヨウトおっ!!」

ばたん、という乱暴な音と共に、小屋の入口のドアが開いて小柄な人影が室内に飛び込んで来た。

「どうしたんだ、オグス？ そんなに慌てて」

ベールル村の村外れ。魔獣の森と呼ばれる魔境と村の境にぼつんと建っている粗末な小屋の中で、少年は動かしていた手を止めて飛び込んで来た小柄な人影に向かって声をかけた。

小柄な人影　ベールル村に住む9歳になるオグスという名の少年　は、荒い息を整えながらも何とか青年の問いに答える。

「ま、また来たんだよ！　また魔獣狩りが村に来たんだ！」

「ふうん」

「え？　ふうんって、それだけ？　いいの？」

「だって魔獣狩りの連中だってそれが仕事なんだしさ」

「だってリヨウト、この前は……」

オグス少年の声に、リヨウトと呼ばれた少年は溜め息と共に、止まっていた手を再び動かし出した。

「この前の連中は例外だよ。だってあいつらは必要以上に森の生き物を狩っていたんだから」

「だけど、今度の奴らだって前の奴らみたいかもしれないだろ？」

「大丈夫だろ。森にはバロムがいるし。必要以上に森を荒らしたら、

あいつが黙ってないさ」

のんびりとそう答える青年に、オグスは苛立ったように更に詰め寄る。

「だからって、魔獣狩りの連中を放っておくなんてできないよ！」

声を荒げるオグスの頭に、リョウトは手を乗せて諭すように言葉を紡ぐ。

「皆が皆、僕やオグスみたいに考えられるわけじゃないんだ。僕やオグスの方が少数派なんだよ」

判っているだろう？　と言葉を続ける青年に、少年は不承不承ながらも頭を縦に振った。

そんな少年の様子に、青年は再び手を止めて立ち上がる。

「判ったよ。取り敢えず、こっそりと様子を見てみる」

「本当っ!?!」

リョウトの言葉に、オグスの顔に輝くような笑みが浮かぶ。

「魔獣狩りたちに気付かれないように遠くから様子を窺うよ。それでもし、連中が必要以上に森の生き物を狩るようなら、その時はバロムに動いてもらう」

「うん！　頼んだよ、リョウト！」

そう答えた少年は、家に帰るためにリョウトの小屋を後にしようとして　入口のところまで振り返った。

「なあ、リヨウト。本当に行くの？」

「ああ、行くよ」

「帰ってくるよ……な？」

下から伺うような表情で、オグスはじっとリヨウトを見つめる。

「もちろん。ここが僕の家だからね。いつかはここに帰ってくるよ」

リヨウトのその言葉に、陰っていた笑みが戻るオグス。

改めて家に帰っていったオグスを見送った後、リヨウトは整理していた小屋の中を一瞥する。

そんな彼の元に、小屋のベッドの上でうずくまっていた黒い物体が、むくりと頭を持ち上げて、ぱたぱたと空を飛びながらやって来た。

「ここで暮らしてもう12年かあ……早かったよなあ……」

感慨深げに己の元へとやって来た黒い物体にそう呟いたリヨウトは、数日前に他界した祖父であり師匠でもある老人の形見のやや小振りの二降りの剣を身につけながら、暮らし慣れた我が家である小屋を後にした。

魔獣狩りハンターと呼ばれる者たちがいる。

人の住む領域の外側に棲息する、魔獣と呼ばれる普通の動物よりも力強く、更に恐るべき異能を秘めた生き物たち。

その魔獣を狩ることを生業としている者たちのことだ。

魔獣を狩り、その肉や毛皮、牙や爪、骨などを売って糧を得る。

時には旅人の護衛や、人の住む領域を脅かす魔獣の駆除なども引き受ける。

腕の良い魔獣狩りになると、名指しで業者や商人などから素材集めの依頼をされたり、辺境の村や町からの魔獣の駆除要請を依頼される事もある。

自分の命と運を糧に、名誉と名声そして財産を得る。どここの組織にも属さず、自由に生きる者たち。それが魔獣狩りだ。

自由を標榜とする魔獣狩りたちだが、それでも暗黙の了解のようなものも存在する。

それは無駄な狩りはしないこと。

生きて行くために必要な狩り。誰かから依頼された狩り。または自分の身を守るため。

それ以外で無闇に魔獣を狩ることを、魔獣狩りたちは避ける。

だが中には己の欲望のまま、無駄に魔獣を狩り続ける無分別な魔獣狩りも存在する。

だがそんな連中は、正統派の魔獣狩りたちに見つかれば、それ相應の報復を受けることになるだろう。

狩りの依頼をされなくなったり、狩りに必要な情報を入手できなくなったり。それぐらいならまだましで、酷くなると人知れずこっそりと始末される、という噂まであるほどだった。

カノルドス王国の辺境に位置するベールル村に、一組の魔獣狩りたちが訪れたのは二ヶ月ほど前の事。

その魔獣狩りたちは五人組で、各々魔獣の毛皮でできた防具を身にまとい、様々な武器を携えて村に一つだけある酒場兼宿屋に現れた。

魔獣狩りたちの目的は、このベールル村の外に広がる、魔獣の森と呼ばれる魔境に棲息する珍しい魔獣であった。

その魔獣は雪狼せつろうと呼ばれ、雪深い地方にのみ生息する。その名の通り純白の毛皮は、防寒具の素材として極めて優れ高額で取引さされている。

大陸の最北に位置するカノルドス王国の、更に北端に存在する魔獣の森。この森にはその雪狼が数多く生息することで知られていた。また、この魔獣の森は雪狼以外にもここにしか存在しないか、他では滅多に見かけない動植物の宝庫でもあり、魔獣狩りから見ればまさに宝の山であろう。

しかし魔獣の森に棲む魔獣は、他の土地の魔獣よりも強力な種が数多く棲息することでも知られ、生半可な腕の魔獣狩りが狩りを行うのは自殺にも等しいといわれている。

そんな魔獣の森に挑む魔獣狩りたち。当然腕に自信のある者たちばかりなのだろう。

彼らは日が沈む前になると酒場兼宿屋で、前祝いとばかりに酒を飲んで騒いでいた。

機嫌よく酒杯を空ける彼らに、酒場の主人が窘めるように声をかけた。

「なあ、あんたら。魔獣の森で狩りをするのは結構だが、分をわきまえてくれよ」

その声に、魔獣狩りたちは訝しげな表情で主人を見やる。

「昔からこの村は、魔獣の森の魔獣とは上手く棲み分けをしてやってきた。必要以上に森の奥に立ち入ったり、無茶な数の森の動物たちを狩らない限り、森の魔獣たちは村人を決して襲わん。だが、その決まりを守らなかつた場合、魔物たち、いや、魔物の長は絶対に儂ら人間を許さんだろう」

だが、心配げにそう告げる主人を、魔獣狩りたちは笑い飛ばした。

「魔物の長だと？ おい親父、その話をもっと詳しく聞かせろ」

「この魔獣の森の長ともなれば、その毛皮や牙はそれはもう高く売

れるに違いねえぞ」

「はは、おもしれえ。その長とやら、俺たちが絶対に狩ってやらあ」宿屋の主人を始め、その場に居合わせた村人たちは魔獣狩りたちを諷めようとしたが、欲に目が眩んだ彼らがそんな言葉に耳を貸すわけもなく。

翌日の朝早く、魔獣狩りたちは魔獣の森へ分け入っていった。

それから二日後の深夜。

大きな咆哮が村中に響き、村人たちは皆家から飛び出した。そして飛び出した村人たちの目の前、そこに森の長がいた。

月明かりの照らす中、悠悠と夜空を舞っていた森の長が村の外周部にある家畜小屋に急降下すると、そのまま体当たりで小屋を破壊し、中にいた家畜をその鋭い牙が並んだ口に捉え、その場でゆっくりと咀嚼し嚥下した。

巨大な体躯。頭からしなやかな長い尻尾の先まで、およそ約10メートルほど。

太く強靱な二本の後脚に支えられた体高は、4メートルといったところか。

そして何より特徴的なのは前脚の代わりに大きく広げられた一對の皮膜の翼。その大きさは余裕で10メートル以上はあるだろう。

森の長。それは古くから魔獣の森に棲むと言われている、赤褐色の鱗を持つ飛竜だった。

赤褐色の飛竜はその後も数匹の家畜を平らげると、呆然と見つめるだけの村人に向かって再び吼えた。

その咆哮を聞いた村人は、なぜ長が村を襲ったのかを理解した。

これは報復である、と。人間が勝手に自分たちの領域を犯した報いであるのだ、と。

飛竜の咆哮はそう村人に告げていた。

二日前に魔獣の森に入った魔獣狩りたちが、村人の忠告を聞かずに長の逆鱗に触れるような行ないをしたのだと村人たちは瞬時に悟った。

数匹の家畜を平らげた飛竜は、村人が見つめる中、ゆっくりと夜空へと舞い上がると、数回村の上を旋回した後、魔獣の森へと去って行った。

翌日、明るくなってから村人たちが飛竜に破壊された家畜小屋を片付けようとした時、小屋残骸の中にずたずたに引き裂かれた五人分の死体が見つかった。

それを見た村人たちは、長たちの怒りが数匹の家畜で収まったことに安堵した。

長がその気なら、こんな小さな村などあつという間に灰燼に帰すことができるのだから。

今回村を訪れた魔獣狩りは男四人に女一人の合計五人。

前回来た魔獣狩りとは違い、金属製の武器を身につけていた。

魔獣狩りたちの間では、魔獣の毛皮製の武器を身につけることは、ある意味で勲章をつけている事と同義である。

それは自分たちはこの武器の元となった魔獣を狩ったのだ、という証以外の何ものでもないのだから。

だが今回訪れた魔獣狩りたちは金属製の武器。それは即ち、魔獣狩りとしては駆け出しであるという事を意味していた。

そんな彼らは森の奥まった所　村人たちが普段なら決して足を踏み入れない領域　で、目前に広がる宝の山に目を白黒させていた。

「すげえ……見てみるよ、これ！」

「ここらに群生しているのって、全部グレタン草だぞ？　これ全部売ったら幾らになるんだ？」

五人の魔獣狩りのうち、弓を背負った男と、槍を持った男がはしゃいだ声をあげる。

彼らの言うグレタン草とは極めて珍しい高級薬草の一種で、一株だけでも一般的な平民の三日分の生活費と同等の額で売れる。

そのグレタン草が辺り一面に群生している。彼らが喜ぶのも無理はないだろう。

「何浮かれているのっ！？ まさかここらのグレタン草を全部持って帰るつもりじゃないでしょうねっ！？」

魔獣狩り唯一の女性が上げた苛立ったような声に、二人の男は不満を露にして向き直る。

「馬鹿言ってるんなよ、アリシア。おまえはグレタン草の価値も知らねえのか？ これだけのグレタン草があれば、もう一度以前のような暮らしに戻るのも夢じゃねえんだぜ？」

「そうだ。おまえだって今の暮らしが不満だから、魔獣狩りなんてモンになったんじゃないかねえのか？」

「馬鹿はどっち？ グレタン草は足がとても早いよ？ いくらたくさんのグレタン草を採集しても、どうやってその鮮度を保つの？ それともあなたたち、正しいグレタン草の乾燥処理の方法を知っているとも言うの？」

「はあ？ そんなもん、森の外の村で売ればいいじゃないか。村までなら薬草の鮮度だって保つだろう」

「あんな辺境の村に、これだけのグレタン草を買い取るだけのお金があると思う？」

彼女の言い分に何も言えない二人の男。だが、彼女に対する反論は別のところから上がった。

「なら、村の連中に頼んで乾燥処理してもらえばいい。あんな辺鄙な村でも、薬草を扱える奴の一人や二人はいるだろう?」

振り返った三人の視線の先、そこには残る魔獣狩りの二人がいた。両手用の大剣を背にした男と長剣と弓を装備した男。今の発言は大剣を背にした男の方だ。

おそらく彼がこの集団のリーダーなのだろう。

彼の装備は基本的には金属製の武具だが、防具の一部に魔獣の甲殻と思しきものが使われている。

駆け出しの魔獣狩りたちの中で、このリーダー格の男だけはそれなりの経験があるようだった。

「へへへ、それよりもこいつを見ろよ!」

リーダー格の隣りにいた男が、担いでいたものをどさりと地面に降ろす。

それは黄金の毛並みを持つ、大きな一頭の鹿だった。

「向こうに黄金鹿の群れがいてな。リガルのお陰で上手い具合に三匹仕留めることができたんだ。向こうに転がしてあるから運ぶの手伝ってくれよ」

リーダー格であるリガルという名の男が指示をだし、それに従って三人の男が浮かれた様子で黄金鹿を運ぶため森の奥へと向かう。そして自分の指示に従わず、この場に不安そうな表情で残ったアリシアに、リガルは苦笑を浮かべて問いかける。

「何か言いたそうだな?」

「当然よ。村の人たちが言っていたでしょう? 森の奥には行くな

って。それなのに、私たちは結構森の置くに踏み込んでいるのよ？」

最初、アリシアたちは森の外周部で狩りを行う予定だった。だが、一頭の珍しい魔獣と遭遇してしまった。

その魔獣は癒蛾いよしがという、翼長50センチほどの大きさの昆虫型の魔獣で、その蛾から採れる鱗粉はどんな怪我也ちどころに癒す妙薬の原料として重宝されている。

もちろん個体数も少なく、一頭狩っただけでも大きな収入が期待できる魔獣であった。

そんな魔獣を目にしたリガルとアリシア以外の三人は、森の奥へと逃げた魔獣を追って走り出す。

アリシアとリガルの制止の声に耳を貸す事もなく、我先にと森の奥へと駆け出した三人を放っておくわけにもいかず、リガルとアリシアも森の奥へと足を向けた。

それが今、彼らがここにいる理由である。

「まあ、いいじゃねえか。結局、癒蛾には逃げられたが、こうして別のお宝を見つけたんだからよ」

言いながら、リガルは足元に転がる黄金鹿に視線を落とす。

この黄金鹿も高価な獲物であった。魔獣ではなく野生動物ではあるが、その美しい毛皮に美味な肉と合わせて、かなりの値段で売れるだろう。

この黄金鹿の群れをリガルともう一人の男は偶々見つけ、風下から奇襲をすることで上手く三頭仕留めることに成功した。

三頭の黄金鹿と合わせて足元に広がるグレタン草。これらを全て街まで持ち帰れば、一年近く遊んで暮らせる金になるだろう。

「でも、そんなことしたら森の長が……」

「長に気づかれなきゃ問題ない」

そう話す二人はまだ気づいていなかった。
自分たちの様子を一人の人物が伺っている事に。

01 - 魔物の森の少年（後書き）

新連載の開始です。

よろしく願います。

文章中に「メートル」などの単位が出てきますが、本来なら別の単位が使われています。ですが、一々単位などに註釈を入れるのは、書くのも読むのも煩わしくなると思われるので止めました。脳内で自動変換されていると考えて下さい。

02 - 魔獣狩り

リヨウトは、魔獣狩り^{ハンター}たちから少しばかり離れた繁みに身を隠し、彼らの様子を窺っていた。

隠密行動が得意とはいえないリヨウトは、魔獣狩りたちに気づかれぬように距離を保って彼らを監視していた。

彼が身につけているのは濃緑色に染められた布製のシャツとズボン。肘や膝の部分に動物の革で補強が施されている。

その上から革製のフード付きの暗灰色のコート。この出で立ちなら森の中に溶け込み、必要以上に近づかなければ、リヨウトの隠密技能でも悟られることはまずないだろう。

そんなリヨウトの視線の先。魔獣狩りたちは最初は森の外周部で薬草や動物たちを狩っていた。

今のところ、彼らの狩りは自然な行為の範囲であった。生きるために薬草や動物を狩る。それは自然な行為であり、弱肉強食がルールである自然界においても正当な行為といえる範囲である。

彼らが必要以上の欲を出さず、この後も僅かな獲物を狩って村に引き上げるようなら、リヨウトはそのまま何もしないつもりでいた。だが運が良かったのか悪かったのか。彼らのまえにふらふらと癒^{いや}蛾^しが現れた。

なぜ普段は森の奥にいるはずの癒蛾が、森の外周部にまで迷い出てきたのかは判らない。だが、癒蛾の価値を知り得ていたリヨウトは不安にかられた。

そしてその不安は的中する。高値で売れる魔獣を目にした魔獣狩りたちの三人が、逃げる癒蛾を追って森の奥へと駆け込んだのだ。もちろんリヨウトとて、癒蛾が魔獣狩りたちに狩られても文句はない。

先程も述べたが、自然界は弱肉強食がルール。魔獣狩りの前に迷

い出た癒蛾に運がなかったのだ。

だが、魔獣狩りたちも運が悪いといえた。それは癒蛾が逃げた先には、高価な薬草であるグレタン草の群生地だったのだ。

明らかに欲を浮かべる魔獣狩りたち。

グレタン草の数株を採集するぐらいなら、リヨウトだって何も言わない。リヨウト自身、必要な時にはグレタン草を採集する事だつてあるし、森に住む動物を狩ってその肉を食べることもあるのだから。

風に乗って聞こえてくる彼らの会話は、辺りに群生するグレタン草を全て刈り取るような勢いであった。

だがそこに波紋が投げかけられた。

「馬鹿はどっち？ グレタン草は足がとても早いのよ？ いくらたくさんのグレタン草を採集しても、どうやってその鮮度を保つの？ それともあなたたち、正しい薬草の乾燥処理の方法を知っているとも言うの？」

それは魔獣狩り唯一の女性の言葉だった。

思わず感心するリヨウト。グレタン草はその女性が言ったとおり、あつという間に鮮度が落ちる。そして薬効を損なうことなく、グレタン草を乾燥処理させることは熟練の薬師でもない限り簡単ではないのだ。

この時、始めてリヨウトはその女性に意識を向けた。

年齢はリヨウトと同じくらい。リヨウトが17歳なのだから、彼女の年齢を高めに見ても20歳は越えていないだろう。十分に美人と呼べる面立ちの女性である。

赤味の強い金髪は、一本の三つ編みに編み込まれて背中流されている。おそらくは森の中で、髪を木の枝などにひっかけないようという配慮だろう。

身につけている武器は金属製の片手用の長剣と木製の楯。腰のベ

ルトに数本差し込んであるナイフは投擲用だろう。

防具は細かい鎖を編み込んだものに、要所に補強の入ったもの。これは防御力よりも動き易さを重視したからか。

そしてその整った顔たちの中で何より印象的なのはその双眸。まるでエメラルドのように澄んだ碧の輝きを持った瞳には、今自分がいる場所に対しての若干の不安が浮かんでいる。

名前はアリシアというらしい。仲間の魔獣狩りたちが彼女をそう呼んでいた。

(どうやら、彼女だけは少しはまともな判断のできるみたいだな……)

そう考えていると、森の奥から二人の魔獣狩りが戻ってきた。その内の一人は、黄金鹿と思しき獲物を担いでいる。

更に聞こえてきた会話によると、全部で三頭の黄金鹿を仕留めたようだ。

(黄金鹿三頭と数株のグレタン草。それだけでもかなりの収入になる。それで満足して帰ってくればいいが……)

リョウトの見つめる中、二頭の黄金鹿を担いだ三人が戻って来た。そしてアリシアとその三人の間で、グレタン草を採集するしないで口論となる。

「だからグレタン草を全部採る必要はないって言っているの！ 黄金鹿を三頭も仕留めれば十分でしょっ!？」

「ふざけるなよ。これだけのお宝を前にして見過ごせって言うのか?」

「そうだぜ。グレタン草がこれだけあれば、以前の……貴族だった頃のような生活も夢じゃないんだ。こんな機会を逃してたまるか!

！」
「俺たちは元は貴族だったんだ！ それが今じゃただの平民……こんな屈辱許せるものか！ アリシアの家だって元は伯爵の地位にあったんだろっつ！？」

「それとこれは関係ない！ 平民に落とされたのも、全ては自分たちの責任でしようっ！？ するべき義務を怠った自分たちが悪いのよ！」

彼らの声はリヨウトの耳にも届いた。

（元貴族……？ そうか、三年前の『解放戦争』で、こいつらの家は旧王国側だったってわけか。それで『解放戦争』に負けた旧王国側だったこいつらは、戦後の国の体制変革の際、貴族の地位を奪われたんだな）

彼らの言う『解放戦争』。それは四年前から三年前にかけて起った、かつての旧王国側と今の新王国側が争った内戦のことである。

『解放戦争』以前、このカノルドス王国は朽ち果てる寸前だった。国の治世は乱れ、治安も荒れ果て、為政者たちは自分の事しか考えない。

荒廃し、腐乱しきったカノルドス王国。

その王国を、いや、そこに住む民を救おうと一人の少年が立ち上がった。

少年は『カノルドス解放軍』を率いて、旧王国を僅か一年で打倒した。

そして少年が王位を宣言した際、それまでの腐り切った国の体制を全て作り替えたのだ。

自分の事しか考えられなかったかつての為政者である王侯貴族たち。

彼らは敗戦後、中枢を成していた有力貴族の当主はことごとく処

刑され、その家族は奴隷として売られた。

処罰の対象とならなかつた貴族も、旧王国に組した者たちは財産を没収された後に、貴族の位を剥奪され平民に落とされた。

それまで働かなくても暮らして行けた者たちは、次の日から働かなくては生きて行けなくなってしまうた。

そしてそんな元貴族たちに、働くための技能などある筈もなく。

才能のある者は国の官吏として、あくまでも平民として雇われることができた。年若い元貴族の息子や娘たちは、兵士や王宮や後宮の下働きとして働き口を得ることができた。

中には苦勞して平民に溶け込み、周囲と上手くやっていけた者も少数ながら存在したとか。

だが、かつての敵である新王国に従うのは矜持が許さず、だからといって平民と同じように働く気にもなれない。

そんな矜持だけが肥え太った旧貴族たちは、新王国を倒すために今度は自分たちが反乱を起こす。

あの小僧が反乱を成功させたのだ。選ばれたる者である貴族たる我らにできぬわけがない。

そういう思いがかつての貴族たちの頭にはあつた。

だが、本来反乱が成功するのは簡単な事ではない。

今や国王となつた少年が反乱を成功させたのは、少年自身に力があつたことと、周囲に優秀な人材が集まつたこと、そして民衆の指示を得ていたこと。

それらを一つも持ち得ない旧貴族たちが、反乱を成功させられるわけもなく。

新国王の指示の元、片っ端から彼らの目論見は暴かれ、捕えられ、そして処刑台に消えていった。

数年前の出来事を思い返すリョウト。

彼やこのベールル村は辺境なため、『解放戦争』の影響をあまり

受けていない。

この辺りに及ぼした影響といえば、かつての領主だった貴族が旧王国派だったために領地を没収され、その後は王国の直轄地となっただくらいか。

リョウトの視線の先で今なお魔獣狩りたちは言い争いを続けていた。

三人の男たちが更に森の奥に入って獲物を探そうと騒ぎ、それをアリシアが制止しようとしている。そして残ったリーダー格らしき男は、そんなアリシアたちの話を黙って聞いているだけ。

「ここでこれだけの獲物があつたんだ。奥に行けばどんな大金に化ける魔獣がいるか判らないんだぞ！」

「でも、あまり奥に入ると森の長の怒りに触れるわ！」

「長がなんだつてんだ！ 現れたら返り討ちにしてやるよ！」

男の一人がそう口にした時、今まで黙っていたリーダー格がようやく口を開いた。

「この森の長を舐めるな。あいつは長きに渡ってこの森に君臨してきた本物の王者だ。俺たち程度が刃向っていい存在じゃない」

「だけだよ……」

尚も言い募ろうとした男を、リーダー格の男リガルは視線だけで黙らせる。

「舐めるなと言ったぞ？ あいつがどうしてこの森に君臨し続けられてきたか考えた事はあるか？」

リガルの一言に答える声はない。

「あいつは相当頭がきれる。これまでに何度もこの森の長である飛竜を狩ろうとした魔獣狩りはいた。もちろん、俺たちよりも遙かに腕のいい連中がな。だけど帰って来た者は一握りしかない。これがどういいう事が判るか？」

誰も答えない事を確認すると、リガルは一呼吸おいて続けた。

「その一握りの生還者の話によると、用意周到に仕掛けた罠には決して近寄らず、魔獣狩りが罠わなに近づいて奇襲をしようと企めば、何日も罠に帰ってこない。奴はこちらの手の内を知りつくしているんだ。しかも危ないものには近づかないという知恵まで備えている」

リガルの言葉に、誰かがごくりと喉を鳴らした。

確かにどんなに巧妙に罠を仕掛けても、近づかなければ意味を持たない。

罠に潜んで寝込みを襲おうと企もうとも、罠に戻ってこなければ問題にならない。

リガルは長の恐怖を改めて仲間たちに伝えた。

青ざめた様子で自分を見る仲間たち。アリシアだけがどこかほっとしたような表情を浮かべている。

そんな仲間たちを見回しながら、リガルはにやりと笑みを浮かべる。

「でもな。だからといって、これだけのお宝をはいそつですかと諦めるのも芸がねえ」

その一言に、三人の男たちの表情に明るいものが広がる。

「要は森の長に気づかれなきゃいいんだ。だから短時間で仕事をすろぞ。この周囲で金になりそうな薬草や高値になりそうな獲物を手

当たり前次第に集める！　そして長に気づかれる前にずらかるぞ！」
「私は反対よ！」

喜び勇んでグレタン草を引き抜き始める男たち。だがアリシアはそんな彼らを見下してリーダーであるリガルを睨むように見つめる。

「黄金鹿三頭と数株のグレタン草。それだけで村に引き返すべきだわ！　これだけの獲物でも、十分なお金になるはずよ！」

「安心しろアリシア。長の罫の場所は以前に聞いたことがある。幸いここからかなりの距離の場所だ。あの空飛ぶトカゲが気づくわけがない」

「どうしてそんな事が言えるの？　魔獣の知覚は人間より優れている。ひょっとしたらもう、長に気づかれていますかもしれないのに！」

あくまでもこれ以上の狩りに反対するアリシアに、リガルはとぼけたように肩を竦めて言う。

「じゃあこうしようじゃないか。おまえは一人で先に村に帰っている。俺たちは獲物を集め終わってから帰ることにする。その代わりに、今回のお前の取り分はお前自身が狩った獲物だけだ」

「そ………そんな………」

今日アリシアが自身の手で手に入れた獲物は、低価格な薬草を数株と価値のある木の実が十数個、そして小さな兎が一頭のみ。

彼女が本拠地としている王都からベールル村までの旅費や、今回の狩りのための準備に費やした金額に比べれば大赤字である。

がつくりと頂垂れるアリシア。今回の狩りの準備になけなしの蓄えの殆どを費やしている。正直このまま帰れば、あと十日生活できるかどうかの蓄えしか残されていない。

頂垂れた様子のアリシアに、リガルは再びにやりと笑う。

「どうやら話は決まったようだな。ならお前も薬草を集めるのを手伝いな」

勝ち誇ったようなりガルの言葉に、アリシアは渋々従い足元に群生しているグレタン草を引き抜き始めた。

(やれやれ……どうやらこのまま帰るつもりはないようだな)

リョウトはこの場を離れる事に決めた。

潜んだ繁みを揺らさないように注意しながら、静かにその場から離れたリョウト。

「これはまたバロムの力を借りないとな……。な、ロー？」

リョウトは移動しながら、自分の肩にちょこんと乗った黒い物体に話しかけた。

話しかけられたその物体は、小さな頭を彼の言葉を肯定するようにこくりと縦に振る。

小さな黒い物体。そのはとても小さな 頭の前から尻尾の先までの大きさが30cmほど 竜だった。

翼のあるトカゲといった、一般的なシルエットの小さな黒竜。

ローという名の小さな相棒は、やや不鮮明ながらもきちんとした言葉で少年に答える。

「バロムに頼んでもよいのか？ あ奴らなどバロムの力を借りるまでもない。他の者で十分だと思うが？」

「確かにね。僕もバロムにあの魔獣狩りたちを殺せと頼むつもりはないよ。脅して追っ払えばそれでいいんだ。だったら、この森の長であるバロムの方がいいだろう？」

小さな黒竜にそう答えたりヨウトは、近くにある森の開けた場所まで来ると、上着の左の袖を捲り上げた。

露になる左腕。そこには手の甲から二の腕にかけて、不可思議な模様が五つ、くっきりと刻み込まれていた。

02 - 魔獣狩り（後書き）

『辺境令嬢』に続いてこちらにも投稿。

なんか、この『魔獣使い』も初日からかなりのアクセスがあった模様。

『辺境令嬢』ほどではないものの、PVが400を超え、ユニークも130を超えました。たった一日、それも序章と第一話のみです。しかも、さっそくお気に入り登録してくれた方もいらっしゃいました。本当にありがとうございます。

今後もゆっくりとした更新になるとは思いますが、よろしく願います。

03 - 魔物の森の長

リョウトの前に、赤褐色の巨大な生物がうずくまっていた。

皮膜状の翼と、しなやかで長い尻尾、そして鋭い牙と爪を持つ赤褐色の鱗で覆われたその生物は、ぐるぐるると唸り声をあげ、硫黄の匂いを周囲に撒き散らしながらも、大人しくリョウトの話を楽しんでいる。

「と、いうわけなんだ、バロム。悪いけどまた力を貸してくれないか？」

リョウトの言葉に、バロム 魔獣の森の長の飛竜 は、まるで飼い犬のように嬉しそうに尻尾を振る。

その際、近くにあった樹が二、三本へし折れたのはご愛敬。

リョウトは飛竜のしぐさから、自分の提案が肯定されたことを悟る。

「だけど脅すだけだよ？ 少しぐらい怪我するのは仕方ないとしても、殺したらだめだ。判ったね？」

バロムはばふつと口から小さく炎を吐いて肯定を示すと、その巨大な翼を打ち振るわせて空へと舞い上がる。

そして上空で二、三度旋回すると、先程リョウトから聞いた魔獣狩り^{タイ}たちがいる方角へと飛び去って行く。

バロムが飛び去ったのを地上から見送ったリョウトは、自身も様子を探るために元いた方へと静かに歩き出した。

それは咆哮から始まった。

大気が震えた。それに呼応するかのように周囲の木々がざわざわとざわめく。

最初、それが何なのか魔獣狩りたちには判らなかった。

彼らは思い思いに薬草や木の実を集め、小型ながらも稀少な魔獣や動物を狩っている最中だった。

そして不意の大気の振動。

それが何を意味するのか、最初に悟ったのはやはりリーダー格のリガルだった。

「まさか……」

彼以外の魔獣狩りたちが、何事かと彼の周囲に集まる。丁度その時。

不意にそれまで木々に繁った葉に遮られていたものの、周囲を明るく照らしていた陽光が遮られた。

空を振り仰いだリガルの目に映ったのは、正に悪夢としか言いようがない光景。

それは。

赤褐色の鱗を持った、巨大な飛竜が咆哮を上げながら自分たちに向かつて急降下して来る光景だったのだから。

「お、長だつ!!」

そう叫んだのは誰だったか。

だがその警告は遅い。

魔獣狩りたちが反応するより早く、魔獣の森の長は彼らの頭上すれすれを周囲の木々をなぎ倒しながら通過した。

巻き起こる突風に魔獣狩りたちは各々吹き飛ばされる。その際、

運が悪い魔獣狩りの一人の肩口を飛竜の鋭い爪が掠め、その鋭い爪は彼が身につけていた金属製の防具を易々と切り裂き空中に真紅の花を咲せた。

ごろごろと転がる魔獣狩りたち。その中で上手く受け身を取る事ができたりガルは、素早く立ち上がると手にしていた数々の獲物を放り捨て、木々がより密集した方へと走り出す。

「くそっ！！ どうしてここが判ったっ！？ どうやって俺たちに感づいたっ！？」

長の罫ひんべはここから遠い。そんな遠くからでも、長は自分たちに気づいたというのか？

それとも、偶々近くに長がいたのか？

幾つも疑問が湧いてくるが、そんなものは二の次だ。今はこの森の長から逃げる事が第一。

リガルは脇目も振らず 仲間たちさえ見捨てて 脱兎の如く

この場から逃げ出した。

長が巻き起こした突風に吹き飛ばされつつ、アリシアは損得勘定を優先させてこの場に留まった事を後悔した。

あの時。リガルが自分だけでも帰れと言った時、いくら赤字になるうともやはり帰るべきだったのだ。

今回いくら赤字になるうとも、次回で挽回する事ができる。

しかし、ここで死んでしまっっては、赤字も黒字もない。

そんな事を考えつつ、突っ伏した大地から身体を引き剥がしたアリシア。そんな彼女の耳に、二度目の長の咆哮が響き渡った。

あまりの大音響。そしてそれが引き起こす恐怖心。思わずぎゅっと目を閉じ、両手で両耳を押さえてうずくまる。

やがて大気の影響が収まり、おそろおそろ目を開けたアリシアの

正面。そこに恐怖の具現がいた。

太くがっしりとした両脚で大地を踏みしめ、巨大な皮膚の翼を翻し。

ぞろりと生え揃った鋭い牙を陽光に晒す、恐怖がそのまま具現化したその姿。

赤褐色の鱗を日の光にきらりと反射させ、魔獣の森の長がその姿を誇示するかのように仁王立ちしていた。

「……………ああ……………」

再び心の中に沸き起こる恐怖心。あまりの恐怖に手放しそうになる意識を必死に掴み留めながら、アリシアの足は無意識のうちに後ずさる。

ちらりと周囲を確認すれば、リーダーのリガルの姿は既になく。残りの仲間たちはこの期に及んでも、少しでも周囲の金になりそうなものを掻き集めようと必死になっている。

アリシアはそんな三人の仲間たちの姿を意識して視界から外す。だがそれは目の前に迫る恐怖を直視するという事に他ならなくて。

アリシアの緑柱石の瞳と、飛竜の縦長の瞳孔を持った瞳。その双方の視線が絡み合う。

恐怖に捉えられたアリシアは、手にしていた剣と楯をかなぐり捨て、飛竜に背中を見せて走り出した。

その走り方は、爪先だけで駆ける走り方ではなく、足の裏全てを地面にべたりとつけた子供のような走り方。恐怖のあまり恐慌状態に陥ったゆえの行動。

魔獣に対して背中を晒す事が如何に愚かな行為であるかなど、恐怖に縛られたこの時のアリシアの頭にあるはずがなく、ただひたすら目の前の恐怖から逃れたい一心でアリシアは走る。

一方、リョウトに脅す程度にとわれているバロムに、アリシアを追うつもりはない。逃げ出した人間一人など、バロムにとっては細事に過ぎない。

バロムの注意は残る三人の人間に向けられる。

一人は先程裂けた肩を押さえながらいまだに立ち上がる事さえできずにいる。

残りの二人はおろおろと周囲に散らばったものを掻き集めている。そんな人間たちに、バロムは侮蔑を込めた咆哮を吐きかける。

恐怖心を煽られ、青ざめた表情で逃げ出す事もできずに自分の方を振り向く三人の人間。

バロムはそんな人間たちの姿に面白くもなさそうな鼻息を吐くと、猛然といまだに座り込んだ人間たちに向かって突進する。

リョウトも少しぐらい怪我させてもいいと言っていた。尤も、飛竜と人間の「少し」の感覚は大きく隔てられているのだが。

仮にここでこの人間たちが死んだとしても、自分としては何の痛痒も感じない。ひよっとするとリョウトに怒られるかもしれないが、まあ、その時はその時だ。

バロムは凶悪なその牙を剥き出しにして、人間たちに向かって駆ける。

青を通り越してもはや顔色が白くなっている人間たちがどんどん近づく。

彼らの近くを通り過ぎる際、何かバロムの足に引っかかったような感じがしたが、バロムはあまり気にしない事にした。

「あーあ……やり過ぎだよバロム……」

「だから言っただろう。バロムに頼んでよいのか、と」

「そうだけどさ……まあ仕方ない。運が悪かったと思って諦めてもらおう」

森の長と魔獣狩りたちがぶつかり合っている　いや、森の長が一方的に魔獣狩りたちをいたぶっている場所から離れる事少し。先程同様繁みに隠れながら、何やら物騒な事を言い合っリヨウトとロー。

ちなみに、魔獣狩りは気絶したものの、誰一人死んでいない。

運の悪い一人が、バロムの脚の爪でひっかかれて脇腹を裂かれただけだ。とはいえ、あのままではすぐに失血で死んでしまうだろうが。

「あそこで倒れている三人は、ガドンに頼んで村の近くまで運んで貰うとして……」

「その前に、脇腹を裂かれた者と肩を怪我した者にはファレナに治療をさせておけ」

「あ、そうか。で、後は逃げた二人だけ……」

「男の方は問題あるまい。恐怖による恐慌を起こすこともなく素早く逃げた。なかなかの手練れだな、あれは。問題は女の方だ」

「そうだね。あのアリシアって人、バロムの姿にすっかり怯えてたからね。自分でもよく判らずに逃げ出したみたいだし」

隠れていた繁みから這い出し、倒れている三人の魔獣狩りたちの方へと歩きながら会話する一人と一頭。

近づく途中、アリシアが逃げる際に捨てた剣と楯に気づいたとき、それを拾い上げる。

「大事な武器や防具を捨ててまで逃げるなんて……よほど怖かったんだなあ……」

「なに暢気な事を言っている。闇雲に走って崖から転げ落ちでもしたら事だぞ？」

「確かにその可能性はあるな……よし、マーベクに探させよう」

リョウトは再び左の袖を捲り上げ、その腕に刻まれた不可思議な模様のアザのようなものをさらす。

「マーベク！」

リョウトがその名を口にした途端、そのアザの一つが赤く輝き出した。

アリシアが気づいた時、その視界に入ったのは見慣れない天井だった。

「……………え？」

上半身を起こして周囲を見回す。

そこはどうかやら小屋の中のように、周囲には生活感が溢れていた。小屋の床には動物や魔獣の革が敷物のように敷かれている。

壁際の小さな机。その上にはやはり動物や魔獣の牙や爪らしきものが、無造作に置かれている。

同じく壁際の収納用の棚。そこには乾燥処理された各種薬草や木の実が、整理されて収められている。

中央部には食事用だと思われるテーブル。ここから死角になっている場所には調理用の竈らしきものが見え隠れしている。

壁には衣服や武器が無造作に掛けられているし。

そして、先程まで自分が寝ていた、獣皮を何枚も重ねた以外に寝心地の良いベッド。

ここは明らかに誰かが生活している小屋だ。

どうして自分がここにいいのか。そう考えた時、先程までの記憶が甦る。

魔獣の森の長である飛竜と対峙し、何もできずに恐怖にかられて

逃げ出した。

そのままわけも判らず闇雲に走り、ふと足元から大地の感触が消えた。

気づいた時にはやや傾斜のきつい崖の斜面を転がり落ちて、そのままその下を流れていた川に突っ込み……

そこで彼女の記憶は途絶えていた。川に落ちた事で気を失ったのだろう。

長の姿を思い出て恐怖がぶり返し、振るえる身体を自分で抱きしめる。その時になってようやくアリシアは気づいた。

「え……どうして……？」

彼女は全裸だった。一切の衣服を身につける事なく、裸でベッドに寝かされていたのだ。

驚いたアリシアはベッドから思わず立ち上がった。普通ならそのままベッドの中に身を沈めるのだろうが、流石に彼女も混乱していた。

そして丁度その時だった。

小屋の出入り口と思しきドアは開いたのは。

現れたのは一人の少年。

年齢は18歳であるアリシアとおそらく同じくらい。

身長もアリシアよりは頭一つは高いだろう。

黒い髪を短く刈り込み、身に付けているものは布製の衣服に所々獣皮で補強を施したもの。

どこかあどけなさを残した顔だちは、美形ではないものの整っていない訳でもなく。まあ、中の上といったところか。

だが、何よりアリシアの目を引いたものがある。

それは彼の瞳。右の瞳は髪と同じ漆黒だが、左は紅玉ルビーのような真

紅。

その少年の瞳は、左右でその色彩が違いつていたのだ。

少年は驚愕した表情を浮かべ、その左右で色彩が違う瞳で自分をじっと見つめている。

何をそんなに驚いているのだろうか？ そう思った時、アリシアは自分の格好を思い出した。

そう。彼女は今、裸だった。全裸のまま小屋の中で突っ立っているのだ。

アリシアは一瞬で身体中を朱に染めると。

「きゃあああああああああああああああああああつ！！」

叫びました。そりゃあもう思いつきり。

その叫び声に驚いて、小屋の周囲にいた鳥や獣たちが驚いて逃げ出すほど。

その音量は森の長の咆哮に匹敵するとかしないとか。

目の前で両手で耳を押さえる少年をよそに、アリシアは慌ててベツドの上にあった毛皮の一枚を身体に巻き付けた。

「だ、誰っ！？ どうしてここにいるのっ！？」

「どうしても何も、ここは僕の家だし？ 川で気絶していた君を見つけてここまで運んだんだよ。あ、君の服はずぶ濡れだったから、改めて洗ってから外に干しておいたよ」

「そ、そうだったの……ありがとう……」

助けてもらったお礼を言おうとした時、青年の言葉がアリシアのどこかに引っかかった。

今、この青年は何と言った？

自分の服を洗って、そして干したと言っていた筈。それは即ち

「わ、私を裸にしたのはあなたなの？」

「うん。まあ、その……ね？ 悪いとは思ってたんだけど……濡れたままベッドに寝かせるわけにもいかなかったし？ あ、確かに裸にはしたけど、必要以上に身体には触れないように注意したから」

「い……」

「い？」

「いやああああああああああああああああああっ！
」

再びの絶叫に、先程の絶叫で逃げ出し、落ちついて戻って来ていた鳥や獣たちが再び逃げ出した。

鳥や獣にしたら実にいい迷惑である。

03 - 魔物の森の長（後書き）

『魔獣使い』の更新です。

こちらもたくさんの方が来てくださってうれしい限りです。

しかし、どこまでこの執筆ペースが保つかなあ……。。

ともかく、今後もよろしく願います。

04 - 少女の提案

窓の外で、ぱたぱたと洗濯物が風に揺れるのが見えた。

その揺れる洗濯物を眺めて、アリシアは何とも言えない気分になる。

なぜなら。

目の前の少年のものと思われる洗濯物に混じって、自分が着ていたものが存在していたのだから。

しかも、少年のものと思いき男物の下着の横で、自分であろう女物の下着がぱたぱたしているのが見えた途端、アリシアは三度叫び声を上げそうになるのをぐっと我慢した。

一方少年　リョウトは、目の前の少女がじっと洗濯物を見詰めている事に気づき、ぽんと両手を打ち合わせた。

「洗濯物ならもう乾いていると思うよ？　すぐに取り込んで来るからね」

そう言って再び小屋を出ようとする青年を、アリシアは慌てて引き止める。

「ちょっと待って！　自分で取り込むわ！」

アリシアとしては、得体の知れない青年にこれ以上、自分の衣服に触れられるのは正直遠慮したかった。特に下着には。

だから干してある洗濯物を取り込もうとする青年を止めたのだが、その青年は不思議そうな顔でアリシアに振り返った。

「自分で取り込むって……その格好のまま外に出るつもり？　いく

「この辺りには僕以外には誰もいないからって、ちょっと不用心じゃないかな？」

言われてアリシアは思い至る。今の自分の格好に。自分は今、素肌の上にベッドの上に敷かれていた毛皮を巻き付けただけの状態。

しかも、今巻き付けている毛皮は微妙に短くて、手で押さえていなければずり落ちてしまうぐらいの長さしかない。

つまりアリシアが自分で洗濯物を取り込むには、このまま陽光溢れる昼間に洗濯物の元に赴き、自分の手で洗濯物を手にしなければならぬ。

その際、おそらく両手が必要になるだろう。そうすると、当然身体に巻いている毛皮はその場に落ちるわけで。

即ち、アリシアは明るい真っ昼間に、野外で全裸を晒す事になる。その事実には思い至り、アリシアは再び真っ赤になってうずくまった。悲鳴を上げなかった彼女を誉めていいぐらいだ。

だから、アリシアは不本意ながら最初の少年の提案に縋るほかなかったのだ。

「僕の名はリョウト。この小屋ですつと祖父と暮らしていた。もっとも、その祖父は数日前に他界したけどね」

少年　リョウトの説明によると、この小屋はベールル村の村外れの魔獣の森のすぐ近くにあり、森の中の川で気を失っていたアリシアを、彼が見つつけてここまで運んだのだという。

リョウトから洗濯物を受け取り、彼に外に出てもらっている間に手早く着替え、何とか人心地ついたアリシアは、どうして自分がここにいいのか説明を受けていた。

「お爺さんが亡くなった……？　もしかして、お爺さんは森の魔獣に？」

「いや、単なる老衰。こう言っちゃなんだけど、森の魔獣に負けるような柔な爺さんじゃなかったよ」

「そ、そうなの……？」

魔獣の森に棲息する魔獣といえば、魔獣狩り^{ハンター}たちの間でも凶暴で強力な個体が多いと噂されている。

そんな魔獣の森の魔獣に負けない老人とは一体何者なのか？

その事をリョウトに問い質そうとした時、小さな黒い生物がぱたと窓から飛び込んで来た。

「え？」

その小さな黒い生き物は、ぱたぱたとアリシアの周囲を数回飛び回ると、そのままリョウトの肩にすんと着地した。

そしていくいとその小さな首を数度リョウトの頬に押しつける。

「ああ、ごめんよロー。今紹介するって」

リョウトは彼の肩にちょこんと乗った生物の頭をぐりぐりと掌で撫でながら、アリシアにその黒い生物を紹介する。

「こいつはロー。僕がこの小屋に来る前よりここにいて、まあ、僕の相棒だね」

と、紹介された黒い小さな生物は、ちょこんとアリシアに向かって頭を下げた。

「へえ。よく懐いているのね……って、ちょっと待ってー！」

「え？ どうしたの？」

「どうしたも、こうしたもないわよっ！！ この生き物って竜よねっ！？ 小さいけど、間違いなく竜よねっ！？」

「そうだよ？ ローは竜だけど？」

「どうして竜がこんなところにいるのっ！？」

竜。それは最強の生物。

その爪は大地を引き裂き、その牙はどんな強固な鎧も貫く。そして尻尾の一振りには巨岩を砕き、口から吐き出される火焰は全てを灰にする。

その巨体は大きなものなら余裕で15メートルを超え、まさに生物の頂点ともいべき存在。

だが、個体数そのものが極めて少なく、現在ではその姿を見る事はまずない。

比較的頻繁に目撃される魔獣の森の長のような飛竜や、主に水中に生息する手足のない巨大な蛇といった外観の水竜は、厳密には亜竜と呼ばれて本物の竜の亜種とされている。

本物の竜が最後に目撃されたのは、今から約40年前。

全長20メートル以上の巨大な黒竜が、突然当時のカノルドス王国を襲撃した。

なぜ、その竜がカノルドスを突然襲撃したのか。それは現在でも判っていない。

後に『暗黒竜バロステロス』と呼ばれるその黒竜は、ある日突然カノルドスの西の国境付近にある山岳地帯に出現し、真っ直ぐに王都目指して突き進んだ。

途中、進路上にあった村や街は、竜が巻き起こす突風や、口から吐く炎によって瞬く間に灰燼に帰した。

当然王国はバロステロスを打倒すべく、騎士団三大隊を出陣させる。これは王国の全軍の3分の2に相当する大軍であり、例えばバロ

ステロスがどんなに強力であろうとも、打ち倒す事ができると思われた。

しかし、結果は騎士団の壊滅という最悪の結末を迎える。

これで竜の進行を妨げるものはなく、王都はその火焰で焼き尽くされる、と皆が絶望した。

だがバロステロスは、結局は王都に辿り着く事なくその直前で三人の英雄に倒される。

それが竜が最後に目撃された事件であり、それ以後、竜の姿を見た者はいないとされている。

しかし、アリシアの目の前には、小さいとはいえ立派な竜がいる。驚くなとう方が無理だろう。

「どうしてここにいる、って言われても……なあ？」

ここにいるんだから仕方がない、と言いたげなりヨウトは、肩の黒竜を困ったように見る。

実を言えば、リヨウトはこの黒竜がなぜここにいるのか知っていない。だが、それをアリシアに話す必要はないと判断し、余計な事は言わない事にした。

「それよりもさ、君はこれからどうする？」

「え？ どうするって？」

「調べたところ、怪我らしい怪我はないようだし。いつまでここにいるのかな、と思ってね」

「も、もしかして、私がいると迷惑……なの？」

考えてみれば、それも当然だとアリシアは思う。

リヨウトは森で気を失っていた自分を助けて、この小屋に連れて来てくれたのだ。

彼にしてみれば、自分は招かれざる客。出て行ってもらいたいと

思っけていても不思議ではない。

そう思っけて尋ねたのだが、彼の答えはまるで違っけてものだった。

「別に迷惑というわけじゃないよ。実はね、僕は近日中に旅に出よっけて思っけているんだ」

「え？」

「今まで僕を育ててくれた爺さんが、数日前に他界したっけて言っけてよっけてね？」

「ええ。それは聞いたわ」

「僕とベールル村の連中とはちよっけていざこざがあっけてね。今までは爺さんがいたから良かったけど、その爺さんがいなくなっけてた以上、僕がここにいる理由はないんだ。だから旅に出よっけてと思う」

ベールル村の村人は、リョウトの事を快く思っけていない。その理由はリョウトにも判っけてている。そんな彼に普通に接してくれる村人は、オグスという名の少年ぐらいただ。

それでもリョウトがこの村にいられたのは、彼の祖父がいたからに他ならない。

旅に出て世界を見てみたい。それはリョウトがずっけて考えていた事だった。

聞けば祖父も、若い頃は傭兵などをしながら世界中を旅したといよっけて。

だが両親の死後、育ててくれた祖父を置いたまま、彼だけ旅に出るわけにもいかなかった。

ここ数年の祖父は、老衰のためかなり足腰が弱くなり、リョウトがいなければ日常生活もままならなかったのだから。

だが、その祖父はもう永遠の眠りについたら。これ以上、リョウトがこの地に留まる理由はないのだ。

アリシアはリョウトからその話を聞き、どこかほっとしている自分に気づいた。

リョウトが自分を迷惑がって追い出そうとしていると思った時、心のどこかに重りのようなものを感じた。だが、今はその重りを感じない。

どうして自分がそんな気持ちになるのか理解できないアリシア。そんな心の中のもやもやしたものを振り切り、アリシアは努めて平静的声でリョウトに尋ねる。

「ところで旅に出るのはいいとして、どこを目指すつもり？」

「そうだね。取り敢えずは王都に向かおうかと思っている。その後の事は王都に着いて情報を集めてからになるけど、当面は王都方面にある大きめの街を目指す事になるかな？」

「ここから王都方面の大きな街。それなら とアリシアが考えていると、急にある事を思い出して思わず声を上げた。

「あつ！！ すっかり忘れてたわっ！！」

彼女が忘れていたもの。それは仲間たちの事。

魔獣の森で長にいきなり襲われ、仲間たちは散り散りになった。ひよっとすると、命を落とした者もいるかも知れない。

今回のような状況に陥った場合、ベールル村の西に位置するゼルガーという町で合流する事が前もって決められている。そのゼルガーでの待機日数は狩りを行った日の翌日より五日。それまでに集まらない者は死んだものとして扱う、とリーダーのリガルが言っていた。

「ねえ、リョウトっ！？ 私、どれぐらいこの小屋で眠っていたっ！？」

アリシアはリヨウトに掴みかかると、自分がどれだけ気を失っていたのかを尋ねた。

「え、えつと……僕が君を見つけたのが一昨日の夕方。で、君が目覚めたのが今日の昼過ぎってところだから、丸一日とちよつとつてところかな」

アリシアは、リヨウトが自分を見つけたのが長に襲われた日の夕方だと推測する。

という事は、約束の期日まであと三日。ここからゼルガーまで徒歩で一日といったところだから、明日中にこの村を出なければなんとか間に合う。

アリシアはリヨウトの以上の事を説明すると、明日の早朝には彼女もゼルガーに向けて旅発つと告げた。

「ふうん。で、もし期日までに間に合わなかったらどうなるの？

単に君を置いて仲間たちはどこかに行くだけじゃない？」

「それだけじゃないの！ 私、ゼルガーのとある酒場に全財産預けてあるのよ！」

アリシアの説明のよると、今回の狩りに出発する際、同行する全員がゼルガーのとある酒場に全財産を預けたのだという。

普通、彼女たちのような魔獣狩りや旅人などは、財産を全て持ち歩くものだ。

この世界にも財産を預ってくれる商売はあるが、それは商売である以上もちろん有料である。

預ける期日を予め契約し、その預けた金額の一割を手数料として取られるのが一般的だが、契約した期間を過ぎても財産を受け取りに来なかったり、もしくは契約を延長しなかった場合、預け主に何

かあったと判断されて預けた財産は、預けられた者のものとなるのが通例なのだ。

だから一ヶ所に定住しない者は、その財産を常に身に付けて持ち運ぶ事が多い。

銀貨などの貨幣では、金額にもよるが嵩張って仕方ない。だからある程度纏まった金額になれば宝石や装飾品に換えて持ち運ぶ。

ただし、宝石や装飾品は傷付いたりして価値が下がる畏れがあるし、宝石などから貨幣に換える場合、ある程度の目減りも覚悟しなければならぬ。

しかも商人側も貨幣の代わりに宝石などで支払いをされた場合、お釣りを返さないのが普通であるなど、宝石などに換える事はある程度のリスクを覚悟しなければならぬ。

それでも魔獣狩りや傭兵などは、嵩張る事を避けて宝石などに換えて持ち運ぶ事を選ぶ。

もちろん、決まった場所に定住している者はこの限りではないが、今回、狩りに出かける際、リーダーとなったリガルが全員の所持金を集め、彼らがその時集まった酒場に預けようと言い出した。

彼はメンバーの誰かが命を落とした場合、生き残った者が死んだメンバーの財産を山分けしないか、と提案したのだ。

万が一誰かが命を落としたら、通例ならその財産は今回預けた酒場の主のものになる。

全くの第三者である酒場の主人に死んだ者の財産をくれてやるよ、仲間内で分け合った方がマシだろうというリガルの言い分を、アリシアたちは納得して承知したのだ。

そしてその期日が、狩りを行った日の翌日より五日後、というものであった。

「つまり、その日までにゼルガーに行かないと、君は一文なしになるって事？」

「そうなの！ 私は明日の朝、早くにここを発つわ」

だから、と続けてアリシアは改めてリョウトへと視線を向ける。

「あなたもゼルガーまで私と一緒に行かない？」

04 - 少女の提案（後書き）

『魔獣使い』の更新。

ここまでとりあえず毎日更新してきましたが、いよいよ更新が遅くなりそうです。いや、単に先行して書き溜めていた分がなくなっただけなんだけど。

そんな訳でゆっくりとした更新になりそうですが、今後ともよろしく願います。

05 - 旅立ち

その日の夕方。アリシアはベールル村にある小さな宿の一室で、出発の準備を整えていた。

今日のアリシアの提案を、リヨウトはすぐに了承した。

アリシアの目的地であるゼルガーの町は、ベールル村からは王都方面にあり、リヨウトの目的とも一致していたからだ。

そして彼と一緒に行くという約束を取り付けたアリシアは、一人村の宿へと戻った。

リヨウトはそのまま小屋に泊まってもいいと言ったのだが、彼と一つ屋根のしたで寝る事を想像した瞬間、なぜか急に恥ずかしくなつて飛び出すように村に戻ったのだ。

そして宿の人間に仲間について尋ねたところ、リガル他三名は昨日の昼前ぐらいに村を出たそうだ。

詳しく聞けば、リガルは狩りを行った日の夕方頃一人で村に戻つたらしい。そして翌日、村外れで倒れていた他の三人を、農作業に出かけようとした村人が発見した。

その三人は軽い怪我はしていたものの、動くのに影響がある程でもなく、そのままリガルと合流して村を出たとの事だった。

三人は森の長に襲われた事は覚えていたが、どうして村外れで倒れていたのかは記憶になかったそうだ。

ともかく、仲間たちの無事を確認したアリシアは、自分も早く仲間たちと合流するため、予定通り早朝にベールル村を発つ準備を整える。

剣と楯はリヨウトが拾ってくれていた。

防具に関しては川に落ちた際にずぶ濡れだったのを、リヨウトが手入れをしておいてくれた。お陰で錆などの心配をしなくて済むと、

アリシアはリョウトの気遣いに感謝した。

ただし、ベルトに差しておいた投擲用のナイフだけは全て失われていた。

どうやら川に落ちた際に落としたらしく、リョウトもそれだけは見つけれなかったらしい。

その事でしきりに謝っていたリョウトの姿を思い出し、可愛かったなあ、と一人悦に入るアリシア。

自分よりも長身の彼が、しきりにその身体を縮めて謝っていた姿が、なんとも可愛く思えてしまった。

そして、そんな事に喜んでいる自分に思い至り、自分の事ながら驚いてしまう。

「どうしちゃったのかしら、私？」

自分で自分がよく判らず、急に羞恥心が湧いてくる。そして羞恥に押されるようにベッドにダイブし、そのままごろごろとベッドの上で悶えまくる。

結局その後もリョウトの姿が頭から消える事はなく、アリシアは明け方近くまで悶々としたまま過ごしてしまった。

結局その日は寝るのを諦め、薄明るくなり始めた空を眺めつつ、出立の準備に取りかかるのだった。

リョウトとの待ち合わせは早朝の村外れの街道。

村人たちと問題のあるリョウトは、村を迂回して直接街道へ向かうと言っていた。

だからアリシアも村を出ると、そのまま街道をゼルガー方面へと足を進める。

やがて前方に人影らしきものが見えた。

その人物はフード付きの濃緑色の外套を羽織り、腰に二降りのや

や小振りな剣を帯びている。

その背には旅に必要なものが詰め込まれていると思しき背囊。もちろん肩に止まっている黒い物体はローである。

「おはよう、リョウト。随分早いね。もしかして待たせちゃった？」

「おはよう、アリシア。僕もさっき来たところだよ」

軽く挨拶し、笑顔で小走りにリョウトに駆け寄るアリシア。

そのアリシアの顔が、急に熟れた果実のように真っ赤に染まった。

「どうしたの？ 何か顔が赤いけど？」

「な、ななななんでもないのっ！！ きききき気にしないでっ！！」

不思議そうに首を傾げるリョウトを置き去りにして、アリシアは早足で街道を進む。

（な、ななな、なによ、さっきの会話はっ！！ あ、あれじゃまるでデートの待ち合わせみたいじゃないっ！！）

アリシアが急に顔面を朱に染めた理由はそれだった。

何気なく交わした会話。単に朝の挨拶に過ぎない会話。

だけど、いや、そんななんでもない遣り取りがアリシアには気恥ずかしかった。

リョウトは確かに恩人だが、それでも昨日初めて出会った人物である。

それなのに、まるで旧知の友人であるかのように感じている自分。

（本当……私、昨日からどうしちゃったんだろう）

昨日からの自分を顧みながら歩くアリシアの足は、徐々に速度が落ちていき、背後から歩いていたリョウトが彼女の横に並ぶ。

「本当に大丈夫？ どこか調子が悪いとか？」

自分を気遣うリョウト。そんな彼の態度が、アリシアの心の中に温かいなにかを生み出す。

「大丈夫よ。駆け出しとはいえ、こつみえても私は魔獣狩りよ？」

体調管理だつて仕事のうちなんだから」

「そう？ ならいいんだけどね」

その後は他愛もない会話を交わしながら、二人は街道を進む。

途中、何度か横を歩くリョウトを、ちらちらと伺うように見るアリシア。

そんな事を何度か繰り返しているうち、やがてアリシアはある事に気づいた。

それはリョウトの腰に差してある二振りの剣。同じ拵えのそれらは、アリシアの眼から見てもかなりの業物のようだ。

旅人が護身用に武器を携帯するのは珍しくない。だが、今リョウトが装備している剣は、護身用ではなく、明らかに積極的に戦う事を意識して鍛えられたもの。

と、いう事は、リョウトには剣の心得があるのだろうか？ そう思ったアリシアは、素直に彼に尋ねてみる事にした。

「ねえ、リョウト。あなたって剣が扱えるの？」

アリシアが自分の剣に視線を向けながら尋ねている事に気づき、

リョウトは彼女の質問の意味を悟った。

「まあ、多少ね。この剣は亡くなった爺さんの形見なんだけど、その爺さんから一通りは仕込まれた。もつとも爺さん曰く、僕に剣の才能はあまりないらしいけどね」

自嘲気味に、だけどどこか嬉しそうにそう語るリョウト。

きつと亡くなった祖父と共に暮した頃を思い出しているんだろうな、とアリシアは推測する。

それと同時に、彼の祖父が愛用していたという剣に興味が湧いた。彼女だつて魔獣狩りなのだ。武具にはそれなりに興味がある。

「良かったらその剣、見せて貰えないかしら？」

リョウトは二つ返事で了承すると、二振りの剣を鞘から引き抜いてアリシアに渡す。

その剣は柄こそ無造作に布が巻き付けられた平凡なものだったが、鞘から姿を見せた刃の部分は柄とは正反対に、透き通った紫色のとても美しい剣だった。

その剣を目にした途端、アリシアの碧の目が驚きに見開かれた。

「こ、これってもしかして、アメジストソード紫水竜剣っ！？　そ、それが二振りもっ！？」

紫水竜とは、湖などの淡水に生息する四肢のない水竜の一種で、その大きさは余裕で10メートルを越し、輝くような美しい紫の鱗を持つ。

その巨体から生み出される破壊力は、大きめの帆船でさえ沈めると言われ、例え地上に上陸してもその恐るべき力は衰える事はない。しかも強力な毒を持ち、その毒を霧状に吐き出す事も可能。その

毒の強さは、もし人間がそれを浴びれば、数時間以内に苦しみながら息絶えるほどだという。

アメジストソード
紫水竜剣とは、そんな紫水竜の鱗を素材に鍛え上げた剣で、刀身がその名の如く紫水晶のように透き通っているのが特徴の剣である。アリシアが今装備しているような鋼の剣よりも遥かに頑強で切れ味も鋭い、まさに名剣と呼ぶに相応しい剣なのだ。

そんな名剣が二振りも目の前にある。アリシアでなくても驚くというものだろう。

「……もしかして、リョウトってどこかの貴族の隠し子か何か？」

「まさか。僕は真正正銘の庶民だよ。先祖代々、ね」

もし、紫水竜剣が市場に出れば、そんな事は滅多にないが、その値段は王都で家を買うほどになる。アリシアがリョウトが貴族の隠し子かと疑うのも無理はない。

そうこうしながらも二人は街道を進む。やがて太陽が天頂にさしかかり、小休止する事になった。

携帯食で軽い食事を済ませた後、アリシアはリョウトに手合わせを申し出た。

「どうして僕と？ 言ったと思うけど、僕は剣の扱いが上手いわけじゃないよ？」

「それでも紫水竜剣を持っていたお爺さんに仕込まれたんでしょう？ ちょっとだけでいいから。ね？」

両手を合わせ、片目を瞑りながら申し出るアリシアに、まあいいか、とリョウトはその申し出を引き受けた。

その辺に落ちていた太めの枝を木剣に見立て、二人は5メートル

ほど空けて対峙する。

アリシアは右手で木剣を身体の正面に、そして左手の楯で身体を守るように構えたオーソドックスな構え。

対してリヨウトは、右手の木剣を順手に、左の木剣を逆手に持ち、身体を半身にした独特なもの。

最初に動いたのはアリシア。素早くリヨウトに駆け寄ると、構えた木剣を上段から振り下ろす。その際、三つ編みにされた彼女の赤味の強い金髪がふわりと揺れる。

振り下ろされるアリシアの木剣を、リヨウトは逆手に持った左の木剣で受け止める。いや、受け止めた瞬間、巧みに左腕を動かしてアリシアの木剣を受け流した。

そして受け流した動作から続くように、右の木剣がアリシアの脇へと叩き込まれる。

リヨウトの剣が滑るように自分の脇へと迫るのに気づいたアリシアは、慌てて左の楯を脇を守るように構える。

木剣が楯とぶつかり、かつんと軽い音を立てる。

思ったより軽い衝撃にアリシアは内心で首を傾げながらも、流された勢いをそのままに、右の手首を返して木剣を右から左へと薙ぐ。かんと音を立ててぶつかる木剣と木剣。アリシアの木剣はまたもリヨウトの左の木剣に阻まれた。

しかし、今度は流される事なく受け止められる。受け止められた事で一瞬動きの止まったアリシアの、鳩尾の辺り目がけてリヨウトの右の木剣が真っ直ぐに走る。

アリシアは踏み込んだ足をに更に力を加え、後ろへと飛び下がる。しかし、踏み込んだ勢いがまだ足に残っており、下がった距離はほんの僅か。リヨウトの木剣はそのほんの僅かな距離を一瞬で飲み込み、真っ直ぐにアリシアの身体に突き刺さる。

ぱきん、という乾いた音と共に、リヨウトが突き出した木剣が真ん中辺りでへし折れた。

その理由は彼の木剣とアリシアの身体の間を滑り込んだ彼女の楯。

何とか防御に間に合った楯と木剣がぶつかり、元々強度なんてなきに等しい木剣があっさりと折れたのだ。

その後、折れた木剣を別のものに取り替え、同じように数度打ち合ってから、二人はどちらからともなく動きを止め、そして構えも解く。

「な？ 言った通りだっただろ？ 僕に剣の才能はないんだよ」

「それでも私よりは上よ。才能がないって人の台詞じゃないわ」

ほんの数回打ち合ったただけだが、それでも互いの実力は大体把握できた。

リョウトの実力は彼の言葉通り並か、それよりちょっと上といったところ。アリシアが知る人物の中では、おそらくリガルの方が強いだろう。

対して今のアリシアといえは、その実力は並のちよっと下ぐらいか。まだまだ駆け出しの魔獣狩りだという割には、よく動いているとリョウトは感じた。今後もしかりと修練を積めば、彼女の剣の実力は伸びるだろう。

「僕の場合、爺さんが異常だったからね」

「本当、どんなお爺さんだったの？ ね、できればこれからもちよくちよく相手してもらえる？」

「これからって……今日中にはゼルガーに着くよ？」

「あら、言っただけでなかったかしら？ 私の本来の拠点は王都なの。あなたも王都には行くつもりでしょ？ なら、そこまで付き合っわ」

ゼルガーから王都まで徒歩で約二週間ほど。途中の小休止や野営の時になど、リョウトはアリシアと手合わせを行う約束をした。

まあ、王都までの道案内の代金代わりと思えば安いものだ、とりョウトは納得する。

アリシアも、少なくともあとしばらくはリョウトと一緒にいらね
ると判り、心が浮き立つのを感じていた。

そんな二人の様子を見てローは、指定席であるリョウトの肩の上
で、ぱふっと呆れたような息を吐き出した。

05・旅立ち（後書き）

ようやくリョウトたちが動き出した。

とはいえ、目的地まではまだまだ遠そう。いつたいつ時になつたら王都に辿り着くのか。

この『魔獣使い』も『辺境令嬢』ほどではないにしろ、アクセス数がかなり伸びています。これもここに来てくださる皆様のおかげです。ありがとうございます。

今後ともよろしく願います。

誤字指摘していただいたので、修正しました。

ゼルガーから王都までの日程を少々修正。今までの日程だと距離的に短いような気がしたので。

06 - 吟遊詩人

ゼルガーの町。人口は約八千人でこの王国東北部最大の町である。かつてはこの地方を治める領主がこの町に住んでいたが、『解放戦争』以後に王国の直轄地になってからは、王の代理たる代官などの役人がこの町で暮らしている。

西の王都へと向かう街道と、南の商業都市バルゼックへと向かう街道が交わる町であり、更に町の中央を流れるコラー川を用いて、南のオーネス王国へ向かう船便も出ている。

いわゆる旅人の中継点ともいうべき町であるゼルガーは、日暮れ近くという時間帯であるにも関わらず、多くの人で溢れていた。

辺境の小さな村しか知らないリョウトにとって、ゼルガーは大都市ともいえる町である。

もちろん、カノルドス王国内にはもっと大きな街が幾らでも存在するのだが。

そんなゼルガーの街の目抜き通りを、リョウトとアリシアは並んで歩く。

ちなみに、小さいとはいえ竜であるローは、下手に目立つとまずいのでリョウトの外套のフードの中で丸くなっている。

「ここがゼルガーかあ……大きな町だなあ……」

「そう？ でも、王都はもっと大きいし、人も大勢住んでいるのよ？」

「へえ……僕には想像もつかないよ」

その後、二人は一旦別行動を取る事にした。

アリシアは仲間の魔獣狩りたちと落ち合い、酒場に預けてある財産を受け取るために。

そしてリヨウトは、アリシアに紹介してもらった安くて食事の美味い宿で部屋を確保するために。

アリシアに教えてもらった宿へと真っ直ぐに向かったリヨウトは、容易く目的の宿を発見した。

「雲雀ウツクの止まり木」亭と刻まれた木製の看板で、ここが間違いなくアリシアに聞いた宿だと確信したリヨウトは、そのまま三階建ての宿の中へと足を踏み入れる。

宿はこの世界でよく見受けられる、一階が酒場兼食堂と主人家族の生活スペース、二階より上が宿泊客用の客室といったオーソドックスな造り。

ざっと店内を見回したりリヨウトは、カウンターにいる主人らしき中年の男性へと歩み寄った。

「部屋は空いている？」

主人はリヨウトに視線を向けると、にこりと人懐っこい笑みを浮かべた。

「一部屋でいいかい？」

「いや、もう一人連れがいる。だから二部屋空いていると助かるけど」

「二部屋ね。大丈夫、空いてるぜ」

主人のにこりとした笑顔が、にたりとしたものに変化する。

どうやら二部屋借りたいと言ったリヨウトの言葉から、彼の連れが女性であると想像したらしい。

それ以上詳しく聞かれる事はなく、リヨウトは借りた二部屋の内の一部屋に案内された。

その室内にはベッドが一つとテーブルと椅子が一つといった簡素なものだったが、確かに料金は良心的だった。ベールル村にある宿

よりは高かったが。

リヨウトはテーブルの上に背嚢を置くと椅子に座り、腰に括りつけていた小袋の中身を確認する。

その中には幾らかの銀貨と宝石が数個。これらは亡くなった祖父が遺してくれた遺産であり、今のリヨウトの全財産でもあった。

宿の料金を二部屋分支払った　アリシアの部屋の分は後で彼女が支払うと言っていた　ため、ただでさえ少ない所持金が更に少なくなった。

残った金額でも王都まで行けるだろうが、やはり所持金は多いにこしたことはない。

「ここでちょっとばかり稼がせて貰おうかな」

フードの中から這い出て来たローにそう呟くと、リヨウトは左の袖を捲り上げ痣を露出させる。

「マーベク」

そうリヨウトが呟いた時、室内のランプに照らされた彼の影がゆらりと揺らめいた。

風で水面が揺れたかのように、黒い影の表面に波紋が生じる。その波紋の中にリヨウトは無造作に右手を置いた。

するとそのまま右手はずぶりと影の中に沈み込む。そしてそのまましばらく影の中をかき回すように右手を動かし、そのまま腕を引き抜く。

引き抜かれた右腕。そこにはあるものが握られていた。

それは80センチほどの弦楽器。いわゆるリユートと呼ばれる楽器であった。

リヨウトはベッドの上でうずくまっているローに行ってくるねと一言声をかけると、楽器を手にして一階の酒場に降りる。酒場は夕

食時という事もありかなり賑わっていた。

酒場に現れた彼の姿を見かけた宿の主人が、おや、と不思議そうな顔をした。

「なんだ、おまえ吟遊詩人だったのか？ でも、さつきは楽器なんか持ってなかっただろ？」

「大事な商売道具だからね。隠してあったんだ」

尚も不思議そうな顔の主人に唄の許可を得ると、リョウトはカウンター椅子の一つに腰を落ち着け、リュートを数度鳴らして調子を確かめる。

リュートの調子に狂いがない事を確認したリョウトは、改めてリュートを爪弾いた。

心地よく響くリュートの音色。それは酒場に居合わせた者全員の耳に届いた。

それで吟遊詩人の存在に気づいた客たちが、一斉にリョウトへと注目する。

次に彼らの耳に届いたのは大気を震わせる低い声。

その低い声が唄い上げるのは有名な英雄譚。この国の人間なら誰でも知っている、竜を倒した三人の英雄の唄。

一人は双剣を使い。一人は大剣を用いて。残る一人は知謀と弓を武器に竜と戦う。

ありふれた物語。誰もが知っている内容。

だが客たちは酒場の片隅で唄う青年の唄から、注意を逸らす事ができなかった。

時に低く。時に高く。時に勇壮に。時に物悲しく。

リョウトの声は、幾つもの音程を巧みに使い分けて英雄の唄を唄い上げる。

普段は賑やかで喧騒の途絶える事のない「雲雀の止まり木」亭の酒場。だが今だけはリョウトの声のみが静かに響き渡る。

やがて英雄譚は終焉を迎え、リョウトの声がふつりと途絶えた。
一瞬の静寂。そして次の瞬間、「雲雀の止まり木」亭の酒場はいつもの数倍の歓声に包まれた。

沸き起こる拍手。打ち鳴らされるジヨッキ。踏みしめられる床。居合わせた客たちは、突如現れた見知らぬ吟遊詩人の卓越した唄を誉め称える。

ある者は酒を勧め。ある者は更なる唄を求めて。

客たちはまるで旧来の友人のように親しみを込めてリョウトの肩を抱く。

リョウトを称える喧騒は、それからもしばらく続けられた。

「大したモンだな」

ようやく興奮と喧騒が静まった後、宿の主人がリョウトに声をかけた。

リョウトは彼の唄に投げ込まれた銀貨の中から、数枚を場所代として主人へと差し出した。

主人はその銀貨を受け取ると、リョウトの前にジヨッキを置く。

「果実の汁を絞ったものに蜂蜜を加えたモンだ。吟遊詩人なら喉を大切にしなきゃな」

「ありがとうございます。遠慮なくいただきますよ」

美味そうにジヨッキを空けたリョウトに、主人はできの良い息子を見るような眼を向ける。

「いつまでこの町にいるんだ？ できればあと数日はここに滞在して唄ってくれると助かるんだけどな。その間の宿代はただにしてやるぞ？」

「別に急ぐ旅でもないし、僕ももう少し稼ぎたいところだけど……」

連れが何と言うかだなあ」

「そっぴや、おまえの連れはいつ来るんだ？」

「知り合いと会ってからこっちに来る予定なんだけど……確かに遅いね」

魔獣狩りの仲間と一旦合流し、その後はすぐにその仲間たちと別れてこの宿屋に来るとアリシアは言っていた。

だが、もう時間も随分遅い。あれだけ賑わっていた酒場も数人の客が残っているだけ。

いくら何でも遅過ぎる。こちらから迎えに行こうかと考えて、リョウトは初めてアリシアがどこへ向かったのか知らない事に気づいた。

確かに酒場で仲間たちと合流するとは言っていたが、その酒場の名前を聞いていない。このゼルガーに何軒の酒場があるのか知らないが、その全てを風潰しに当たる事は不可能だろう。

「まあ、おまえの連れも子供じゃないし、今日は知り合いと一緒にいる事にしたんじゃないかねえのか？」

「それならいいけどね」

「今日はお前の唄のお陰で稼がせて貰ったからな。連れ分の部屋代はなかった事にしてやるよ」

主人の親切な申し出に改めて礼を述べると、リョウトは一旦部屋へと戻った。

部屋に戻ったリョウトを、相変わらずベッドにうずくまっていたローが、首だけを彼の方に向けて出迎えた。

ローの態度に別に文句を言う事もなく、リョウトはアリシアがまだ戻らない事をローに伝える。

「ひよっとして急に魔獣狩りとしての仕事が入ったのかな？」

「いや、それは有り得まい。あの娘がおまえに黙ってどこかへ行くはずないからな。……これは何かあったのかもしれんな」

「どうして？ 確かにアリシアとは王都まで一緒に行く約束しているけど、彼女だって急な仕事が入る事だってあるだろ？」

「……まったく、この朴念仁は」

アリシアがリョウトに向ける視線に含まれているものに、ローはとつくに気づいていた。

いや、ローにだって気づく事ができた、と言ったほうが正確だろう。

だというのに、当の本人はまるで気づいた様子がない。しかも、アリシア自身も自分の心境をよく理解していない節もある。

相変わらず人間というのは面倒くさいものだ、とローは内心で愚痴を零す。

「ともかく、あの娘が黙っておまえの前から消える事はない。例え何か急な事情ができたとしても、誰かに伝言を頼むぐらいはするだろう。あの娘はおまえがこの宿にいる事を知っているのだからな。だが現実としてあの娘はまだこの宿に戻らない。つまり……」
「彼女の身に何かあった。若しくは何かに巻き込まれた……か」

これはすぐにでも探した方が良さそうだとリョウトとローは判断した。

だが、リョウトとローはこの町の土地勘がない。そんな所を無闇に捜し回っても、結局徒労に終わるだけだろう。

ならば。

リョウトとローが出した結論は一つ。

幸い今は夜。全てが闇に包まれている。あいつの活動に最も効率的な時間帯なのだ。

「マーベク」

リョウトは再び左腕の痣を露出させ、その言葉を紡いだ。その言葉が紡がれた瞬間、五つある痣の一つが淡く光る。そして同時に先ほど同様、リョウトの影がゆらりと揺れた。

「アリシアが戻らない。探してくれないか？」

揺れる影に向かってそう告げると、影は了承したとばかりにざわりとさざなみ、すぐに静まりかえる。

しばらくじっと影を見つめていたリョウトは、窓の外へと視線を向けた。

そこには夜の帳が降りた、ゼルガーの町並みが静かに広がっていた。

マーベクは夜のゼルガーの町を静かに駆け抜ける。

一切の音を立てる事なく。誰にもその存在を気づかれる事もなく。リョウトに頼まれたのは一人の少女の探索。以前も、魔獣の森でその少女を探すようにリョウトに頼まれた事があったので、少女の事はマーベクもよく覚えていた。

人が集まりそうな場所。逆に人があまり集まらなそうな場所。様々な場所をマーベクは影から影へと渡って行く。

やがてマーベクは、数人の人間が集まっている場所に辿り着いた。そこにいる人間たちは、一つの部屋に数人が押し込まれ、窮屈そうに床に寝具もなしに寝ていた。

そんな部屋が幾つもある場所。その中に、マーベクは探すべき少女の姿を見つけ出す。

見つけた。

影の中からその事を確認したマーベクは、再び音もなくリヨウトの元へと駆け戻った。

明けて翌朝。

朝食も摂らずにリヨウトは「雲雀の止まり木」亭を飛び出した。彼を導くのは彼の影。今、彼の影は太陽を無視して一定の方向へと伸びている。

そんな己の影に導かれ、土地勘のないゼルガーの町中を迷いのない足取りでリヨウトは進んでいく。

時に右、時に左と影が示す方へと黙って進むリヨウト。

影は町の表通りから外れ、裏通りのあまり雰囲気がよくない辺りにある、とある建物へとリヨウトを導いた。

リヨウトはその建物の前まで来ると、一切迷う事なく建物へと入っていく。

建物の中に入ったリヨウトに、受付と思しき場所にいた中年の男性が気づいてにこやかに挨拶を寄越して来た。

「いらしゃいませ、お客様。朝早くより、当店へお越しいただきありがとうございます。そして、本日はどのような商品がご入用で？」

リヨウトが足を踏み入れた建物。その建物の入口に掲げられている看板には、「ロズロイ奴隷商」という名が刻まれていた。

06 - 吟遊詩人（後書き）

『辺境令嬢』に続き、こちらも投稿。

前回ようやく動き出したリョウトたちですが、いきなり躓きました（笑）。

いや、ほんと、いつになったら王都に着くんだらうか？ 誰か教えてください。

07 - 奴隷商人の館

「昨日、元貴族の娘という奴隷が売られてきたと思うんだけど」

リヨウトはにこやかに受付の男性に告げた。
対して受付の男性は、慇懃にリヨウトに対応する。

「これは驚きましたな。確かに昨日、元貴族の令嬢だという娘を買い取りましたが……一体どこからその話をお聞きに？」

まだ、どこにもそのような案内は出していないのですが、と続ける男性に、リヨウトはその娘を見せて貰えないかと切り出した。

男性は一瞬だけリヨウトに値踏みするよな視線を向けるが、すぐにそれを引っ込めてではこちらに、とリヨウトを館の奥へと案内する。

その途中、男性がふと思い出したかのようにリヨウトに振り返ると頭を下げた。

「申し遅れました、お客様。わたくし、当店の主人を務めております、ローム・ロスロイと申します。どうぞ、以後ご贔屓に」

どうやら男性はただの受付係ではなく、ここの主人だったようだ。そしてリヨウトは、主人であるロームに案内されて館の廊下を進む。

ロームはリヨウトを一つの扉の前まで案内すると、懐から鍵を取り出して開錠し、その扉を押し開く。

扉の中には格子で区切られた小部屋がいくつもあり、その中にたくさん人間が押し込まれていた。

ざっと見たところ、下は10歳にも満たない子供から上は40代ぐらいまで。小部屋ごとに年齢と男女で区別されて入れられているようだ。

部屋に入ってきたリョウトとロームに、格子の中から視線が向けられる。

媚を含んだような視線から、直接的な敵意の視線、そして何の感情も含まれていない無機質な視線まで。様々な視線が自分たちへと向けられる中、リョウトはゆっくりと歩きながら小部屋の中を見て回る。

途中、20代の男性が入れられている小部屋の中に、リョウトは見知った顔を見つけた。

それはアリシアと一緒に魔獣の森に来た、三人の魔獣狩り^{ハンター}たちだった。

「おい、おまえ！　すぐに俺をここから解放しろ！」

「そうだ！　俺は貴族なんだ！　奴隷として扱われていいはずがない！」

「今すぐ俺を解放すれば、おまえを騎士として取り立ててやるう」

リョウトを見るなり口々に勝手な事を抜かす三人を一切合財無視して、リョウトは歩みを進める。

そしてとうとう彼女を見つけた。

「リョウト……」

リョウトに気づいたアリシアの目が驚きに見開かれる。その目元には明らかに涙の跡と思しきものも見て取れた。

彼女は胸と腰回りだけを覆い隠すといった、必要最低限の衣服し

か与えられていなかった。

いや、それは彼女だけではなく、全ての奴隷が最低限の布きれで身体を覆い隠していた。

別れた時には綺麗に三つ編みに編み込まれていたアリシアの赤味の強い金髪は、今は解かれて緩やかなウェーブを描いて腰の辺りまで流されている。

リョウトは驚いたままじっと自分を見つめるアリシアに、小さく頷くと背後に控えていたロームに向き直った。

「彼女はいくら？」

リョウトがアリシアを指差しながら尋ねると、ロームはにこりと奴隷商人とは思えない品のある笑みを浮かべた。

「お目が高いですな、お客様。こちらの娘は元貴族の娘で、しかも乙女というとても稀少な奴隷です。ですから競りにかけようかと思っていたのですが……お耳の早いお客様に敬意を表して銀貨30万枚でいかがでしょうか？」

一般庶民の一家が一日生活するのに銀貨が約五枚必要だと言われる。これは最低限の生活レベルではなく、十分に豊かといえるレベルでの話だ。

そしてリョウトは知らない事だが、アリシアと同じ年齢の少女の奴隷の相場が大体銀貨5万枚から10万枚。これは容姿や身に付けている技能など、そして処女か否かによって値段が上下する。

それでもどんなに高くて銀貨10万枚ほど。アリシアにつけた銀貨30万枚という値段は途方もなく高値であった。

実はロームには、リョウトにアリシアを売るつもりがない。

いや、正確に言えば、リョウトにはアリシアを買えるだけの金がないと判断した。

アリシアは元貴族というだけあり教養もあり、見た目も悪くはない。十分美しいと呼べる器量の持ち主である。

競りにかければ安くても銀貨10万枚。高ければ20万枚まで行くかも知れない。

ロームにとつて、アリシアは久し振りの高値で売れる商品であり、ここでリョウトに売るわけにはいかないのだ。

どうやらアリシアとリョウトは知り合いらしい。ひよっとすると恋人同士なのかも知れない。

何らかの理由で奴隷として売られた少女を、その恋人が助けに現れた。

いかにもよくありそうな事情。そして、ロームはそのような事情に、実際に何度も出くわしていた。

だから敢えて相場よりも遥かに高い値段をリョウトに告げた。どう足掻いても払えないような大金を提示すれば、大抵の場合は諦めてしまうものだからだ。

そしてもちろん、リョウトは銀貨30万枚などという大金を持ち合わせていない。

しかし、リョウトはロームが予想もしていなかった条件を提示した。

「残念だけど、銀貨30万枚なんて大金、持ち合わせていなくてね。代わりにこれでどうかな？」

リョウトは腰の後ろに差していた、二振りの紫水竜の剣アメジストソードの一振りをロームに突き付けた。

ロームは差し出された剣を確かめる。そしてそれが紫水竜の剣であり、同じ拵えの剣がもう一振りリョウトの腰にあるのを見て、今までずっと慇懃だった態度が初めて崩れ、明らかな驚きを浮かべた。

「……二振りの同じ拵えの紫水竜の剣……ま、まさかこれは……か

ドラゴンスレイヤー
の竜斬の英雄、ガラン・グラランが愛用していた剣では……」

掠れるように呟かれたロームの言葉に、それまでざわめいていた
奴隷たちが一瞬で静まり返る。

竜斬の英雄、ガラン・グララン。

それは暗黒竜バロステロスからカノルドス王国を守った、三人の
英雄の一人。

その名はこの場にいる誰もが知っており、そしてその英雄が愛用
したという剣に皆の視線が集まる。伝説の英雄が竜と対峙した際に
使用した、正真正銘伝説の名剣に。

「あなたこそ目が高いね。これは間違いなく、ガラン・グラランが
愛用していた剣だよ」

よく判ったね、というリョウトの声を、ロームは興奮冷めやらぬ
といったまま尋ねた。

「そ、そんなもの、見る者が見れば容易に判ります。紫水竜の剣は
只でさえ珍しい。しかし、全く存在しないわけでもありません。で
すが、全く同じ拵えの紫水竜の剣など、普通は存在致しません。そ
れが存在するとなれば、それはかつてガラン・グラランが愛用して
いたとされるもののみ。して、お客様。どこでこの剣を手に入れら
れたので？」

「爺さんから譲り受けたのさ」

「そ……それでは……あなたは……」

「僕の名はリョウト・グララン。ガラン・グラランは僕の祖父だ」

リョウトの口からでたその言葉に、アリシアは信じられない思い
でいた。

彼女もガラン・グラランの名は知っている。いや、この国に住む者で、ガラン・グラランの名を知らない者などいないと言っているだろう。

魔獣の森の魔獣などに負けるような柔な爺さんじゃない、とリョウトは言っていた。

確かにかの英雄なら、いくら魔獣の森の魔獣が強くても負けるようなことはないだろう。

アリシアが驚きながら見つめる先で、リョウトとこの館の主であるロームは会話を続けている。

「竜斬の英雄、ガラン・グラランの孫

ドラゴンバスター

「本人は自分は竜斬の英雄ではなく、竜倒の英雄だと言い張っていたけどね。それでどう？ あの子を買ったのにその剣で足りる？」

「も、もちろんですとも！ 足りないどころかお釣りが必要なくらいです！」

この世界で一般的に流通しているのは銀貨だ。人々は銀貨で何枚といった具合に物の売り買いをする。

一部の大商人や王侯貴族の間では、銀貨100枚分の価値のある金貨が使用される時もあるが、一般市民には金貨など縁がない。金貨を一度も目にする事なく死んでいく者が殆どである。

町や村の露店や商店での少額の買物なら直接銀貨で支払うが、時に高額な取引をする場合、銀貨では嵩張って重いので宝石や装飾品を銀貨の代わりに支払う事がある。

その際、お釣りが出ても支払わないのが通例となっている。

リョウトも銀貨30万枚の代わりに紫水竜の剣を指し出したが、もちろんお釣りが返ってくる事など期待していない。

しかしこのロームという人物は、本当に奴隷商人なのかとリョウトが疑いたくなるような人物であった。なぜなら、ロームはリョウトにこんな提案を出してきたのだから。

「お釣りは出せませんが、代わりにもう一人、奴隷をお連れください。どのような奴隷をお望みですか？」

「え？」

これに驚いたのはリョウトだ。

彼はアリシアを助けるためにここに来た。別に奴隷が欲しくて来たわけではないのだ。

それなのに、まさかもう一人奴隷を連れていけと言われるとは思ってもいなかった。

「い、いや、僕は奴隷が欲しかったわけではなくて……えっと……」

困惑するリョウト。彼は思わずアリシアへと視線を向けるが、当の彼女も戸惑っているようだった。

そんなリョウトに、ある人物が声をかけた。

「なあ、少年。だったら俺を買ってくれないか？」

その口調はまるで熟練した傭兵か魔獣狩りのよう。ハンター積み重ねられた経験が、思わず滲み出すような深みのある口調。

リョウトもその声の主が、苦みばしった渋い中年の男性であるかのように感じただろう。

その声が高く澄んだものでなければ。

思わず振り返ったりリョウトの視線の先。そこには一人の女性がいた。

年齢は自分やアリシアよりは少し上。おそらく20代前半といったところだろう。

細くしなやかな身体は鍛えられており、この女性がただの庶民でないことは一目で判った。

そして胸元を押し上げる二つの大きな隆起と、細くくびれた腰。そこから描き出された豊かなカーブは、臀部を頂点にして滑らかさを失うことなく二本の形の良い足へと続いている。

アリシア同様胸と腰のみを布で隠したその肢体は、どこか少女の趣を残すアリシアとは違い、完全に熟した女性のそれ。

青みの強い艶のある黒髪を真っ直ぐに腰まで伸ばし、蒼玉サファイアのような輝く瞳は、まさに妖艶という表現がぴったりと嵌まる女性だった。

ちなみに、アリシアの胸だって決して小さくはないが、この女性の胸は明らかにアリシアを上回っている。

「えっと……」

戸惑うリョウトに、ロームがその女性についての説明をする。

「この者は、見た目はこのように美しいのですが……なにせ口調が少々その、乱雑でして。見た目で気に入ったお客様も何名かいらしたのですが、彼女が口を開いた途端購入意欲をなくされまして……」

恐縮しながら説明するロームに、リョウトは溜め息混じりに尋ねる。

「どうしても、もう一人連れていかないとだめかい？」

「いえ、どうしても、というわけではありませんが……紫水竜の剣は一本でも銀貨50万枚の価値があります。しかもこの剣はかつての英雄が使用したものだ。その価値はおそらく銀貨100万枚を超えるでしょう。そのような物を代金として差し出される以上、銀貨3

0万枚の奴隷一人では割が合いませんよ?」

「あなた、本当に奴隷商人? 奴隷商人っていえば、もつとがめつくて意地汚い人たちだと思っただけだ?」

「ははは。奴隷商人といえども商人は商人。商人としての矜持がございますゆえ」

「低い元手で高く儲ける。それが商人の矜持じゃないのかな?」

「もちろん、基本はそうでございます。ですが、ここはかの英雄の血縁者と縁えんじを結ぶ事を重視しようかと愚考します」

「英雄は爺さんであつて、僕じゃないけよ?」

「それでもです。商人にとって縁は時に商品以上に価値のあるものとなります」

リヨウトにアリシアを売るつもりはなかったロームだが、彼が英雄の孫だと知った今ではもうそんな考えはない。

逆に、ここはどうしても彼と何らかの形で縁を結びたかつた。

それは単なるロームの直感に過ぎない。しかし、彼はその直感を信じた事を後に神に感謝する事になる。

そして、どうしてもロームが引かないつもりだと悟ったりリヨウトは、先ほどからじつとこちらを見つめている黒髪の女性へと向き直る。

「君、名前は?」

「俺の名はルベッタ。かつては姓があつたが、奴隷となつた時に捨てた。だから今はただのルベッタだよ」

どうしても彼女と会話していると、熟練の傭兵や魔獣狩りと会話しているような気分になつてくる。

「どうして僕に買って欲しいんだ?」

「少年はいい人のようだからな。いくら知り合いとはいえ、奴隷一

人のために大切な祖父の形見をぽんと差し出すくらいだ。しかも、相当な値打ち物にも関わらず、な。だからかな？俺は不意に君のものになりたくなつたんだよ。それに少年のその左右で色が違う瞳も気に入った。実にミステリアスだ。それにな？俺はそっちの小娘のように乙女ではないが、逆にベッドの上での技に自信があるぞ？きつと少年をそっちでも満足させてやれると思うが？」

とルベッタは、乙女だと言われて真っ赤になっているアリシアをちらりと横目で眺め、ふふふと妖艶な笑みを浮かべた。

07 - 奴隷商人の館（後書き）

『魔獣狩り』更新。

同時に更新した『辺境令嬢』の方は第1部が終了したのに、こちらはその素振りもありません。

一体いつになったらおまえたちは動き出すんだ、と私はリョウトたちに言いたいです。

こんな按配ですが、気楽に気長にお付き合い願います。
今後よろしく願います。

08 - 奴隷に落ちたアリシア

アリシアが魔獣狩りの仲間と待ち合わせている酒場に入ると、そこにはリーダーのリガルの姿あるだけで、他の三人の姿は見えなかった。

「ア……アリシア……おまえ……無事だったのか……」

アリシアの姿を見たりガルは、驚愕を隠すこともなく呆然と呟いた。

確かに、魔獣の森の長に急襲されたあの状況で、その後ベール村の宿屋で合流できなかったのだから、命を落としていると思われるても不思議ではない。

だからこそ、アリシアは急いでこの酒場に來たのだが。

「ええ、この通り無事よ。森で気を失っているところを、ベール村の村外れに住んでいた人に助けられたの。私が目を醒ますまで時間がかったから、ベール村の宿屋で合流することはできなかったけど。」

まさか、もう私の財産を山分けしたりしていないでしょうね？と続けるアリシアに、リガルはにやりとした笑みを浮かべた。

「もちろん、そんな事はしていないさ。する必要もないしな」

リガルは懐から折り畳まれた羊皮紙を取り出しながら続ける。

「こいつを覚えているな？」

「ええ。私たちの財産を一旦この酒場に預けて、誰かが命を落とした場合、残りの者がそれを山分けするって約束の念書ね」

「そうとも。そいつが判っているなら話は早え。着いて来な」

リガルはそう言つてアリシアに背中を向けると、彼女を伴つて酒場を出た。そしてそのままゼルガーの町中を歩き、辻を幾つか曲つてやがて裏通りのあまり雰囲気の良くない辺りに差しかかった。

元々この町の地理に明るくないアリシアは、もう既に表通りに戻る道もよく判らなくなり、不安ながらもリガルの後を付いていくしかなくなつていた。

やがてリガルはとある館の前まで来ると、その館の中に入つて行く。仕方なく、アリシアも彼の後に続いて館に足を踏み入れる。

アリシアが館に入ると、入つてすぐの受付らしき場所で、リガルが中年の男性に先程の羊皮紙を見せながら何やら話をしていた。

しばらく話し合つていた二人だが、やがて受付の男がリガルに袋を幾つか手渡した。

その際に袋からじゃらり、とした音が聞こえ、アリシアはその袋の中身が銀貨であろうと察する。しかし、なぜ受付の男はリガルにあんな大金を渡すのか？ そもそもここはどこなのだろう？ という疑問が今さらながらアリシアの脳裏を掠める。

彼女は気づかなかつたのだ。この館の入口に、「ロズロイ奴隷商」と刻まれた看板が掲げられていた事に。ここが奴隷商人の館だという事に。

袋を受け取つたりリガルは、にやにやとした笑みを浮かべながらアリシアの元へとやつて来る。

「ありがとよ、アリシア。おまえらのお陰で狩りには失敗してもいい稼ぎになつたぜ。ま、おまえはてつきり死んだとばかり思つていたからな。生きていたのは運がいいのか悪いのか。おっと、おまえにしてみれば悪いに決まつてるか」

「どついつ意味っ！？ 私にも判るように説明しなさいよっ！！」

意味を成さない言葉を並べるリガルに、段々といらいらが募ってきたアリシア。だがリガルはそんなアリシアの心境を理解しているのかわからないのか、相変わらずにやにやにやした笑みを浮かべながら、先程の羊皮紙を彼女の前にかざし、とある部分を指差した。

「こつという意味さ」

リガルが指差した場所の文章を読み進めていくアリシア。やがてアリシアの身体ががくがくと細かく震え出した。

「そ……そんな……」

両手で口元を押さえ、驚愕に目を見開きながら食い入るように羊皮紙を見詰め、やがてその場でぺたりと座り込んだアリシアに、リガルが上から死刑の宣告にも等しい言葉を投げ下ろした。

「おまえはたった今、奴隷として売られたんだよ。この念書にある通りにな」

先ほどリガルが提示した念書。そこには次のように書かれていた。

『今回の狩りに際し、一旦所持している全ての財産を「燃え盛る暖炉」亭に預けることに賛同する。

同時に、万が一今回の狩りで命を落とした場合、その時は「燃え盛る暖炉」亭に預けた財産は生き残った者で分配することに合意する。

そして万が一、今回の狩りが失敗に終わった場合、その時は自身

を奴隷とし、その代金でもって損失の補填を行うものとする』

そしてその下には、アリシアを始めとした三人の仲間たちの署名。確かにこの羊皮紙に署名した覚えはある。財産を預ける事も、死んだ場合の分配の件も承知した。

だが、奴隷になる事まで承知した覚えはない。

そもそも、この念書にサインした時、そのような約束事は念書には書かれていなかったはずなのだ。

「何よこれっ！？　こんな条件、念書にサインした時にはなかったわっ！！」

「ん？　そりゃ、おまえが見落としたんだろ？　どっちにしろ、奴隷になることを承知する文書におまえのサインがあるんだ。こいつはもう言い逃れできねえよ」

精々、いいご主人様に買って貰えるよう祈ってやるよ、と言い残してリガルは最後までにやにやと笑いながら館を後にした。

後に残されたアリシアは、館の受付の男　後にここの主人だと判った　に、館の奥に連れ込まれ、そこで着ていたものを全て剥ぎ取られた。

全裸にさせられたアリシアは、そこで様々な仕打ちを受ける事になった。

身体全身各所を隅無く調べられ、生い立ちや身に付けている技能や実技を尋ねられ、男性経験の有無まで聞かれる始末だった。

しかも、それらを行った館の人間は全員が男性だった。

異性の前で無理矢理全裸にさせられ、身体中の至るところを触られ、幾つもの屈辱的な質問に答えさせられて、アリシアの精神はあつという間に擦り切れて行く。

いつしか頭の中に霞がかかったような状態に陥りながら、アリシアは全裸のまま男たちに連れられて館の廊下を歩く。

やがて一つの扉に行き着き、その扉を潜った先で、アリシアは幾つもある格子で区切られた小部屋の一つに入れられた。

小部屋に入れられる前、男から胸と腰を隠す程度の布を与えられたが、頭がよく働いていないアリシアはそれを呆然としたまま受け取ると、それを身に纏うこともせず裸のまま小部屋に入った。

幾らか時間が経ち、ぼんやりしていた頭が次第にはっきりして来ると、アリシアはいまだに自分が裸でいる事に気づき、慌てて手にしていた布で胸と腰だけを覆う。

そして改めて周囲を見回せば、そこには自分と同じような幾人もの奴隷たちの姿があった。

様々な年齢の男女が、数人ずつ小部屋にお仕込まれている。

そしてアリシアは、その中に一緒に狩りに行った三人の仲間の姿を見つけた。どうやら彼らも自分同様奴隷として売られたようだ。

彼らはしきりにアリシアに罵詈雑言を浴びせかけて来たが、アリシアはそれらを全て無視した。

その後、更に時は進み、アリシアは睡魔に襲われた。

周囲を見回せば、既に床でそのまま寝ている奴隷たちが何人かいる。

不意に自分を襲った余りにも酷い出来事。それらに心身共に疲労しきっていたアリシアは、いつの間にか睡魔に我が身を委ねていた。今日あった出来事が夢であればいい。そう思いながら。

しかし、翌朝目覚めたアリシアは昨日の出来事が夢でなかった事を悟り、改めて泣いた。

確かに自分は奴隷に落ちた。これは紛れもない事実。

しかし翌朝、救いの手はあっさりと彼女の前に現われた。その救いの手は、彼女が自分では気づかずとも、淡い想いを寄せている少

年の姿で現われたのだ。

手の込んだ細工の入ったテーブルと椅子。そして高価な美術品が並ぶ応接室。

ここは貴族の館か王宮かといった趣の部屋に、現在リヨウトと正式に彼の奴隷となった二人の少女はいる。

結局、リヨウトはルベッタを奴隷として連れて行く事にした。

あそこまで正面からリヨウトのものになりたいと言った彼女を、リヨウトは置いて行く気になれなかったのだ。

そして先ほど彼らをここまで案内したロームは、奴隷購入諸々の手続きのために一時この場を離れている。

そしてその部屋でロームが手ずから入れてくれたお茶を飲みつつ、リヨウトはアリシアにどうして奴隷として売られたのかその経緯を聞いていた。

「おまえは騙されたようだな。あのリガルという男に」

その言葉を発したのはリヨウトではない。もちろん、アリシアでもルベッタでもなかった。

驚いたアリシアとルベッタが周りをきよろきよろと見回していると、リヨウトの外套のフードの中からローが姿を現わした。

「りゅ、竜……っ!?!?」

「え？　もしかして、今、喋ったのって……ロー……なの……?」

ローの姿を見て、ルベッタの身体が凍りついたように固まる。アリシアはと言えば、ローを指差したままぽかんとしている。

「ああ。おまえには我が喋れることを伝えてなかったな。だがリョウトの奴隷となった以上、教えても差し支えあるまい」

「只でさえ、ローは小さいけど本物の竜って事で目立つしね。それなのに更に言葉まで喋れるのが判ると大騒ぎになりかねないから。アリシアには悪いと思ったけど黙ってたんだ」

「ごめんね、とアリシアに謝りながら、改めてルベッタにローを紹介するリョウト。

ローを紹介され、まだ若干呆然としていたルベッタだったが、改めてリョウトとローを何度も見比べてにやりと口角を曲げながら呟いた。

「いやはや、まさか小さいとはいえ本物の竜を従えているとは……どうやら俺のご主人様は中々に底が知れない人物のようだな」

「別に従えているわけじゃない。僕たちは友達なんだよ」

「そうとも。我とリョウトは友だ。リョウトの祖父であるガランとも友であった」

ローによると、リガルの使用した詐欺の手段は実に初歩的な詐欺の手口だという。

念書を作る際、余分は空白をわざと空けておき、後からそこにリガルにとって都合のいい事を欠き加えたのだろう。

今回の場合、財産を預ける事ともしもの場合の分配の件だけを念書に書いておいて、アリシアたちがサインした後から奴隷の件を書き加えたのだ。

ローの説明を聞き、ルベッタもそれで間違いないだろうと頷く。聞けば何とも単純な手口だが、その手口にまんまと引っかかったのだ。引っかかった自分が間抜けだったとしか言い様がない。

「念書を交わす場合、人数分の念書を作るのが基本さ。そして一枚

ずつ念書を所持する。そうすれば誰かが後から何か書き加えても、その他の念書と比較すればすぐに判る」

渋く、深みのある言葉が澄んだ音色で語られる。

どうもルベツタの外見と口調に違和感があるなあ、とリョウトは場違いな事を考えていた。

そんな時、不意にローがぴくりと首を動かすと、もそもそとリョウトのフードの中に潜って行く。どうやら誰かが近づいているようだ。

「お待ちせ致しました、リョウト様」

ノックをして入室の許可を得、扉を開けたロームは相変わらず慇懃に頭を下げる。

彼の後ろには使用人らしき男が一人。その男は何やら手に荷物を抱えていた。

「そちらの娘がこの館で売られた際、身に付けていた物でございます。もつとも、武具に関しては、その娘を売った男が持ち帰ってしまいました」

後ろに控えていた男が進み出、リョウトにアリシアのものらしき衣服を指し出した。

「後、これは無料で提供致します。できましたら、今後とも当店をご利用いただきますよう」

「もう、僕は奴隷を買ったつもりも、資金もないよ？」

「いえいえ、当ロスロイ商会は奴隷だけでなく、様々な商品を扱っております。何かご入用な際は是非、お声をおかけください」

そう言いながらロームが差し出したものは、女物らしき簡素なワンピースが一着と、二つの革製の首輪だった。

アリシアにはここに来る時に着ていた服があるだろうから、このワンピースはルベッタのためのものだろう。まさか今の胸と腰だけを申し訳程度にしか覆っていない姿　下着さえ着けていないのだで、町中を連れて歩くわけにもいかない。

では、この首輪は？　そう思いリョウトがロームへと視線を向ける。

「奴隷の身には、主の名前　所持印を刻みます。そうして初めて奴隷の所有を主張できるのです。一般的には、このように首輪に主の名前を刻みますが、中には直接奴隷の身体に入れ墨する者もいます。その場合は奴隷を転売できなくなりますので余りお勧めは致しません」

そう言われてリョウトは革の首輪を一つ手に取る。

よく見れば、既に首輪にはリョウトの名前が刻まれていた。

「首輪の件は了解したよ。それで一つ質問があるのだけど　」

リョウトは首輪を弄びながら、ロームに向かって改めて尋ねた。

「奴隷を解放するには、どうしたらいい？」

08 - 奴隷に落ちたアリシア（後書き）

『魔獣使い』更新しました。

ようやくメインメンバーが揃いました。

今後はこの三人をメインにして話を展開させていきたいと思います。

王都に向かって出発するまで、あと2、3話かなあ。

今後もよろしく願います。

「奴隷の解放　ですか。手段はさほど難しくはありません。ですが、それが認められるかどうか……」

ロームには珍しく、苦虫を噛み締めるような表情で呟く。

「奴隷を解放するには、その旨を自分が住んでいる地域の統治者に伝え、それを認められれば良いのです」

「その口振りだと、奴隷の解放を認めてもらうのが難しいって事？」

「確かに、過去に犯罪を犯して奴隷に落とされたような者が、奴隷から解放されるのは難しいですが、問題はその統治者が奴隷解放の手続きを行ってくれるかどうかなのです」

住んでいる地域の統治者とは、貴族の治める領地ならばその貴族、王国の直轄地なら国王その人が代官が統治者となる。

当然、そのような人物は何かと忙しい　はず　ので、奴隷の解放という些細な事務手続きはどうしても後回しにされる傾向がある。

そして奴隷の中には犯罪を犯して奴隷に落とされた者もいて、そのような者の場合解放の許可が出ない事も多々ある。

当然その奴隷の前歴を確認するのも統治者の仕事となるし、それに奴隷は解放してもしなくても統治者から見れば然したる問題ではない。

よって尚更後回しにされる場合が多いのだ。

奴隷解放の申請を出しても、統治者のやる気にもよるが数年かかるのが普通とされている。

「これが、貴族や有力な商人などの申請の場合、すぐに取り扱って貰える場合がありますが……リヨウト様がいくら英雄の血縁とはいえ、おそらくは後回しにされるでしょうな」

ロームの話聞き、腕組みをして考え込むリヨウト。

彼としてはすぐにでもアリシアたちを解放してやりたいのだが、そう簡単にはいかないらしい。

やや落胆の表情を見せるリヨウトに、ロームが別の方法を示す。

「もし、リヨウト様が彼女たちの早期解放を望むのであれば……方法がないわけではありません」

「……それはどんな？」

「リヨウト様ご自身が、統治者となるのです」

リヨウトたちはロズロイ奴隷商を後にした。

アリシアとルベッタの二人も、胸と腰回りだけを覆う奴隷の衣服から普通の衣服に着替え、リヨウトと共に館を出てリヨウトの後ろを歩いている。

途中、町の住人の何人がアリシアとルベッタというタイプの違う二人の美女を振り返り、その彼女たちの首に奴隷の首輪がある事に気づくと、羨ましそうな視線を彼女たちの数歩前を歩くリヨウトへと向ける。

そして彼らは「雲雀の止まり木」亭へと辿り着いた。

ドアを開けて入口を潜ると、「雲雀の止まり木」亭の主人が相変わらずにやりとした笑みを浮かべて出迎えた。

「よう、お帰り。朝メシも食わずに飛び出していったと思ったら、奴隷を二人も買ってきたのか？ まあ、おまえさんも若いからな。判らないでもねえ。しかしまあ、よく二人も奴隷を買うだけの金が

あつたな　ん？」

主人は親しげな挨拶を寄越すと、ふと気づいたようにアリシアに視線を向けた。

「お、おまえ、アリシアじゃねえか！　い、一体いつ、奴隷になんかなつちまつたんだよ！？」

アリシアとこの主人とは以前から顔見知りである。そのアリシアがいきなり奴隷になって現われたのだから驚くのも無理はない。そんな主人の質問に色々あつてね、と曖昧な答えを返し、アリシアはリヨウトたちと共に部屋へと引き揚げようとした。

「まあ、待ちなよ。一人用の部屋を三つ借りるより、四人用の部屋を一つ借りた方が安上がりだぜ？　それにそっちの方がおまえさんたちにも都合がいいんじゃないかねえのか？」

上へ上がるうとしたリヨウトたちを呼び止め、「雲雀の止まり木」亭の主人は相変わらずにやりとした笑みのまま彼らにそう告げた。

彼は昨日リヨウトの唄を聞き、彼の吟遊詩人としての実力を高く評価していた。

それにリヨウトの唄は既にこの界限で評判になっており、先程から何件も今夜もあの吟遊詩人は唄うのか、という問い合わせがきている程だ。

だから主人としてはリヨウトに気を配り、彼がしばらくこの宿に滞在して唄う事を望んでいるのだ。

明日の明け方近くになったら、湯を張った盥たらいを部屋の前に置いておいてやるう、とリヨウトにしたらありがた迷惑な事をこっそり心の中で考えながら。

今度の部屋にはベッドが四つと大きめのテーブル。そしてそのテーブルには椅子が四脚。

テーブルの上に水差しと木製のカップが四つという、昨日リョウトが泊まった一人部屋よりも上質な部屋のように感じられた。

その新しい部屋へと入り、取り敢えず思い思いに休息を取るリョウトたち。

リョウトはテーブルに腰から外したアメジストソード紫水竜の剣を置くと、そのまま椅子を引いて腰を下ろす。

ルベッタは何も言わずにベッドの一つに座り、悠然と足など組んでいる。

そしてアリシアは。

彼女は奴隷商の館から「雲雀の止まり木」亭に着くまでの間、ずと考えていた事があった。

そしてアリシアはベッドの一つ傍らに立ちながら、いかにそれを切り出そうかとちらちらとリョウトの様子を窺う。

リョウトに一言謝ろう。彼女はずっとその事を考えていた。

自分が奴隷として売られたのは、自分の落ち度だ。いくらリガルに騙されていたからといっても、それは自分自身の問題であってリョウトは無関係の筈。

だが実際は、その無関係なりョウトに助けられた。しかも、彼にとつて大事な祖父の形見の一つを手放してまで。

だからアリシアは、例え許してもらえなくてもリョウトに謝ろうと思ひ、決心を固めて一歩彼に歩み寄ろうと踏み出す。

だが彼女が何かを言うより早く、リョウトはアリシアに唐突に頭を下げると謝罪の言葉を発した。

「済まないアリシア。君が奴隷になってしまったのは元を正せば僕に責任がある」

「え……？ ちょっと待つて！ い、一体何の事？ どうして私が奴隷になったのがリヨウトの責任になるの？ それより、謝るのは私の方じゃ……」

突然のリヨウトからの謝罪にアリシアは戸惑う。ルベツタも黙ってベッドに腰を下ろしたまま、リヨウトの話を聞く体制に入っている。

そしてリヨウトは語る。魔獣の森で、彼がアリシアたちをずっと見ていた事を。

「……そう……だったの……」

「うん……だから、君を助けたのは偶然じゃない。バロムの姿に怯えた君が、足でも滑らせて怪我をしていないか心配になってね。マ―ベクに探してもらったんだ」

リヨウトの説明を聞き、彼に助けられたのが偶然ではなく必然だったとアリシアは理解した。だが、彼の言葉の中にどうしても理解できないものも何点が含まれていた。

「えっと……ね？ 今の話に出てきたバロムとかマ―ベクって誰？ あなたの知り合いの村の人？」

だが、リヨウトはベ―リル村の住人とは折り合いが悪いと言っていた筈。では一体誰だろう、とアリシアが考えていると、リヨウトはとんでもない事を平然と口にしてのける。

「バロムは魔獣の森の長の飛竜の名前だよ。あいつに君たちを脅してくれって頼んだのは僕なんだ。だから君が狩りに失敗したのは僕のせいであり、その結果、君が奴隷になってしまったのも僕のせいなんだ」

「ま……魔獣の森の長っ!？」

アリシアの脳裏に、あの時の恐怖が甦る。

ルベッタも魔獣の森の長の事は知っていたらしく、驚いた表情でリョウトを見ていた。

そんな彼女たちを順に見やり、リョウトは改めて口を開く。

「まず、最初に結論を言おう。僕は異能持ちだ。それもかなり特殊な異能を持っている」

昨夜と同様、「雲雀の止まり木」亭の酒場にリョウトの音が響く。彼の噂を聞き付けた多くの人々が、「雲雀の止まり木」亭を訪れて彼の唄に耳を傾けている。

もちろん酒場の片隅で、アリシアとルベッタもリョウトの唄を聞いていた。

「……正直驚いたな。少年の唄がこれ程のものとは……俺もこれまで各地を渡り歩いたが、これ程の技量を持った吟遊詩人は見たことがない」

「ええ……本当に……」

ルベッタが感嘆の溜め息を零し、アリシアはリョウトの唄に聞き惚れる。

今夜、リョウトが吟じているのは昨夜同様竜倒の三英雄の唄。

だが今夜のそれは竜を倒した英雄譚ではなく、三英雄の日常生活をコミカルに唄い上げたもの。

リョウトの音がわざと調子を外した戯けたものになる度、酒場の中に大笑いが巻き起こる。

腹を抱えて笑い、酒杯を空け、料理を平らげ、聞こえてくるリョ

ウトの声に再び笑い声を上げる客たち。

そんな客たちの様子を眺めながら、アリシアとルベッタは昼間にリヨウトから聞かされた話を思い出す。

「異能……か。少年は自分の異能の事を『魔獣使い』の異能と呼んでいたな……」

ルベッタの呟きがアリシアの耳に届く。

『魔獣使い』の異能。確かにリヨウトは自分の異能をそう呼んでいた。

彼の話によると、この異能は文字通り魔獣を使役する異能らしい。使役といっても魔獣を思い通りに支配するのではなく、魔獣と親しくなり願いを聞いて貰う程度の拘束力しかないそうだが。

特定の魔獣と縁えんじを結び、その縁を結んだ魔獣を呼び出すことができる、とリヨウトは言う。

彼の左腕にある五つの痣は、魔獣と縁を結んだ証であり彼はこれを「縁紋えんじもん」と呼んでいた。

もつとも、どんな魔獣とでも強制的に縁を結べるものではなく、あくまでも魔獣の側に縁を受け入れるつもりがなければならぬ。

「魔獣を使役するのではなく、魔獣と友達になる異能だと思って貰えればいい」

とはリヨウトの言である。

そしてそんな縁を結んだ魔獣の一端が魔獣の森の長であり、彼がつけた名前がバロムである。

リヨウトによると、バロムと縁を結んだ切っ掛けは、彼が幼い頃に彼の祖父とバロムが戦った事であった。

激闘の末、その戦いに勝利したのは彼の祖父。戦いに敗れた飛竜は深い傷を負いながらも辛うじて生きていた。

そんな飛竜をリヨウトは気の毒に感じ、ぐったりと横たわった飛竜の傷を何とかして癒してあげたいと思った時。この時初めてリヨウトの異能が開花した。

不意に両者の間に結ばれた感応。互いの気持ちが無いか理解でき、リヨウトとバロムの間には確かに何か繋がった。

そしてリヨウトの左腕に浮び上がる一つの痣。この瞬間、リヨウトとバロムは確かに縁が結ばれたのだ。

その後、リヨウトは何頭かの魔獣と縁を結び、現在は五頭の魔獣と縁を結んでいると彼は語った。

リヨウトの左腕にある五つの縁紋。それぞれ形の異なる五つの痣が、自分と魔獣とを結ぶ絆なのだ。

そしてそんな異能こそが、彼と彼の育ったベールル村の村人たちの間の争いの原因。

村人たちは魔獣と友達のように接するリヨウトを気味悪がった。

人々にとって魔獣は脅威以外の何者でもない。そんな魔獣と親しげにするリヨウトは、他者から見れば気味の悪い存在であると同時に畏怖すべき存在でもあった。

だから村人たちはリヨウトを避けた。リヨウトも避けられる原因を理解していたから無理に村人に関らなかった。

唯一オグスという名の少年だけが、リヨウトと普通に接してくれた。

オグスは魔獣の森とある魔獣に襲われている時、偶然居合わせたりリヨウトに助けられたのだ。

今まさに自分に鋭い牙を突き立てんとしている魔獣。その魔獣をリヨウトは魔獣の森の長を呼び出して助けてくれた。

だからオグスだけはリヨウトを避けない。畏れない。

そんなオグスは、リヨウトにとってかけがえのない存在だったと彼はにっこりと笑いながら言った。

「少年が怖いか？」

思いに耽っていたアリシアの耳に、隣のルベッタの声が響いた。アリシアが彼女の方に振り向けば、彼女は唄うリヨウトをじっと見つめている。

「……ええ。確かに少し怖い。私は魔獣の怖さをよく知っているから……」

魔獣狩りであるアリシアは、魔獣の恐ろしさをよく知っている。

それが例え彼女が駆け出しで、相対したことのある魔獣が低級のものでしかなくても。

そしてリヨウトが自分の異能を語った時、もしかしたらアリシアたちにも畏れられるのではないかと心の中で密かに怯えていた事にも彼女は敏感に気づいていた。

「でも……私はリヨウトを……いえ、リヨウト様を拒否したりしない。私はリヨウト様の奴隷だから。主人であるリヨウト様に着いて行くと決心したから」

奴隷に売られた自分を助けるため、祖父の形見を惜し気もなく手放したリヨウト。そんなリヨウトの思いに応えるため、アリシアは彼の奴隷となつて彼に尽くそうと決意した。

だから揺るぎのない決意を視線に込め、アリシアは主であるリヨウトを見つめながらルベッタに断言した。

その迷いのないアリシアの言葉に、ルベッタは軽く笑みを浮かべると彼女もまた断言する。

「俺も決心したよ。俺も少年……リヨウト様に着いて行こう。そして身も心もリヨウト様に捧げよう、とな」

「み、みみみ身も心も……っ!？　そ、そそそそれってつまり

……っ！！」

ルベッタの言わんとしている事を理解し、アリシアは真っ赤になりながら狼狽える。

「その通りだ。リョウト様とて若い男。女奴隷を二人も手に入れれば、当然そういう行為を求めてくるさ」

ルベッタの挑発するような言葉は、主ではなく同僚ともいうべき少女をじっと見つめながら。

「そ、そりゃあ私だって……そ、その……リョウトが……いえ、リョウト様が求めてくるなら……その……それに応じるのは奴隷としての勤めだもの……ええ、そうよね」

真っ赤になりながらも、そっちの覚悟も決めるアリシア。

「ほう、アリシアも覚悟完了したか。ならば今夜は二人してご主人様に可愛がってもらおうじゃないか」

ルベッタが挑戦的な笑みを浮かべた時、酒場の中で再び大笑いが木霊した。

アリシアにはその笑い声が、先程の覚悟を励ましているような、それでいてどこか生暖かく見守られているような気がして、再びその顔を朱に染めた。

09 - 異能持ち（後書き）

『魔獣使い』更新。

まだ、王都に向かって旅立ちもしません。

早く動けと切に願う。本当に。

でも、あと2話はこの町にいるんだろうなあ。

今日は『辺境令嬢』の方も更新します。

10・認めて認められて

「驚いたぞ、リヨウト様」

「本当に。リヨウト様があんなに唄が上手いなんて思いませんでした」

唄を語り終わり、アリシアたちを連れて部屋へと戻ったところで、彼の二人の奴隷たちが主人の唄の技量を誉め称えた。

「え？ リヨウト……様？」

今までルベッタはリヨウトを少年、アリシアはリヨウトと呼んでいた筈なのに、急に二人から様を付けて呼ばれたリヨウトは戸惑いを露にする。

「俺たちはリヨウト様の奴隷だからな。いつまでも名前と呼んだり少年呼ばわりしているわけにはいかないだろう」

「僕は別にそれでもいいんだけどね。まあ、君たちがそれでいいなら構わないよ」

何だかちよつと気恥ずかしいけどね、とリヨウトは含羞^{はにか}む。

そしてリヨウトはベッドの一角に座る。その対面のベッドにアリシアとルベッタもまた腰を下ろした。

「でも、本当にあの唄の技量には驚きました」

「うん。どうやら僕は爺さんの才能は受け継がなかったけど、父さんからは受け継いだみたいだね」

「お父さんの？」

「うん。僕の父親は吟遊詩人だったんだ」

リョウトのその言葉に、ルベッタが興味を示す。

「ほう。だが、ガラン・グラランの息子が吟遊詩人だったとは知らなかったな」

「いや、父さんは爺さんの息子じゃないよ？」

ん？ と理解できない顔のルベッタに、リョウトは簡単な事さと前置いて説明する。

「爺さんの実子は母さんの方だからさ。つまり、父さんは爺さんの義息子ってわけだね。で、母さんは各地で傭兵をしていたそうだよ。爺さん譲りの双剣使いで腕もたち、傭兵仲間の間では結構有名だったらしい。で、とある場所で吟遊詩人だった父さんと出会い、結婚して僕が生まれた」

その説明を聞き、ルベッタはなるほどと相槌を打つ。

「リョウト様の母上殿は傭兵だったのか。母上殿の名前を聞いてもいいかな？」

「母さんの名前はセレナ・グララン。結婚してからはセレナ・ウィードだけだ」

「な……に……？　せ、セレナ・ウィードだと……？」

あまり取り乱す事のないルベッタが、珍しく驚きを露にする。と言っても、ルベッタとリョウトの付き合いはまだ一日も経っていないのだが。

「傭兵のセレナ・ウィードといえば、あの『狂乱剣舞』だろうっ！

？ リヨウト様が『狂乱剣舞』の息子？ 信じられんっ！！ そもそもセレナ・ウィードがガラン・グラランの娘だというのも初耳だな

「母さんを知っているのか？ もしかしてルベッタも……」

「ああ。俺も元傭兵だ」

ルベッタは着ているワンピースの胸元を開き、その白い胸元とくつきりとした胸の谷間を露にした。

彼女の左の乳房の隆起が始まってすぐの辺りに、弓矢と狼の頭を象った入れ墨があるのがリヨウトとアリシアの目に入る。

その入れ墨が意味するものを、リヨウトとアリシアは知っていた。それは傭兵の証。

傭兵は己の身体に得意とする得物と、所属する傭兵団の象徴を入れ墨として刻む。どこの傭兵団にも所属しないフリーランスの傭兵は、得物だけを刻んでいるが。

リヨウトも、彼女の鍛えられた身体つきから単なる村娘ではないと思っていたが、元傭兵だというのならそれも納得がいく。

「俺は元『銀狼牙』^{ぎんろうが}という傭兵団に所属していた傭兵でな。得意な得物はこの入れ墨の通り弓だ」

「それで、リヨウト様のお母さんの『狂乱剣舞』ってどういう意味なの？」

アリシアが中々に痛いその異名の意味を尋ねる。

リヨウトも母親が傭兵だったという過去は知っているが、そんな恥ずかしい異名を持っている事までは知らなかった。

「つむ……息子であるリヨウト様の前で言っているのか判断に困るところだが……」

ルベッタがリョウトへと視線を流すと、リョウトは無言で頷いた。

「『狂乱剣舞』のセレナ・ウィード。対峙した敵は必ず切り刻む惨殺者。例え女であろうが子供であろうが老人であろうが、自分に武器を向ける者には絶対に容赦しない。双剣を用いて狂ったように、舞うように敵を切り刻む姿からいつしか『狂乱剣舞』と呼ばれるようになった女傭兵。俺がセレナ・ウィードについて知っているのはこれぐらいだな」

アリシアはその説明を聞き呆気に取られる。リョウトも自分の知らない母親の姿を知り驚きを隠せないようだった。

「どちらかというと穏やかな気性で人のいいリョウト様が、『狂乱剣舞』の息子とは正直言つて信じられないのだがね」

ルベッタもまた、肩を竦めて苦笑を浮かべる。

「どうやら彼は、性格と才能を父親の血筋から色濃く受け継いだのだろつ。」

「……………うーん……………。確かに気性の激しい人だったけどね、母さんは……………。まさか、そこまで言われているとは予想もしていなかったよ」
「リョウト様？ ちょっと気になったのだが、今の言い方だと……………」

リョウトの過去形の物言いにルベッタは気づいたようだった。

「うん。両親はもう故人だ。十年以上前にね」

旅先で知り合い結婚した彼の両親。リョウトが生まれるまでは各地を放浪していたようだが、リョウトが生まれて数年は何処かの街に定住していたらしい。らしい、というのは彼もよく覚えていなか

らだ。

リヨウトが五歳ぐらいになると、両親は彼を祖父であるガランに預け、再び各地を放浪し始める。そしてある時、大規模な野盗の襲撃に遭遇した。

「父さんはその時に殺され、母さんは野盗たちに捕えられて散々辱されたらしい。それでも何とか野盗たちから逃げ出して、ボロボロになりながらも爺さんのところまで辿り着いた。けど、結局はその時の傷が原因ですぐに亡くなったよ」

リヨウトが語る両親の話に、アリシアは声を出す事すらできずにいる。

だが、元傭兵であるルベツタはアリシアよりも冷静だった。

どんな達人だろうと剣豪だろうと、数という力の前には敵わない。例えリヨウトの母親が祖父譲りの腕の立つ双剣使いだったとしても、相手が五人、十人といればどうしても遅れを取る。

そして女だてらに傭兵などをする以上、そうなった時に彼の母親のような境遇に遭うのもまた、覚悟の上だ。

リヨウトに告げるつもりは今のところないが、彼女自身、以前に敵対する陣営の傭兵に捕われ、犯された経験がある。

その時は相手が小人数だったので隙を見て反撃し、全員の息の根を止めてそれを復讐とした。

暗く沈み込みそうな雰囲気には部屋が支配されそうになるが、ルベツタが努めてそれを吹き飛ばすように明るい声を出す。

「そう言えばな、リヨウト様」

「なに？」

「俺は今後リヨウト様がどうするつもりなのか聞いてないぞ。リヨウト様はしばらくこの街に滞在するのか？ それともいつその事、定住でも考えているのかな？」

「いや、僕とアリシアの当面の目的は王都に行く事なんだけど……」

リョウトは一旦言葉を区切り、視線をアリシアとルベッタへと向ける。正確には、彼女たちの首もとへと。

「その前に少しやりたい事ができた。だからもう少しこの街に滞在して、金を稼ごうと思っている」

「ほう。金を稼ぐか……」

ルベッタは顎に手を当ててなにやら考え込む。しばらくそうしていた彼女が、何かを思いついたようにアリシアへと視線を向ける。

その視線には明らかに意地の悪いものが含まれていたが。

「ならこういう手段はどうだろうか？ リョウト様の唄だけでも十分稼げると思うが、これならもっと稼ぐ事ができると思うぞ？」

ルベッタの視線は相変わらずアリシアへ。当然そんな視線を向けられたアリシアはいい予感はない。

「リョウト様の唄を聞いている観客の前で、アリシアが一枚ずつ服を脱いで……」

「ど、どうして私が公衆の面前で裸にならなきゃいけないのよっ！
？ 裸になりたければあなたがなりなさいっ！！」

真っ赤になって吼えるアリシアに、ルベッタは至極真面目な顔で答える。

「そうはいかん。俺はリョウト様の奴隷だからな。リョウト様の許可もなしに容易く肌を晒すわけにはいかんのだよ」

「わ、私だってリョウト様の奴隷よっ！？ それなら同じ条件じゃ

ないっ!！」

「だから、そこはリヨウト様が命じるのだよ。『アリシア、僕のためには脱いでくれ』と」

「え？ リヨウト様のため……?」

その一言に、アリシアは怒りとは別の意味で赤くなり、リヨウトへと視線を向ける。

その視線を受けて、リヨウトは苦笑するとルベッタに諫めるように言う。

「アリシアをそんなに揶揄うんじゃない。アリシアもそんなに簡単に乗せられてどうする?」

「どうやら、思った以上にアリシアは素直な性格のようだ。これなら簡単に騙されてしまったのも頷けるなあ、とリヨウトはこっそりと思った。

「それにね？ 僕はこう見えても結構独占欲は強い方なんだ」

リヨウトの言葉にアリシアとルベッタが軽い驚きを浮かべる。

そして言葉を発したリヨウトはというと、若干赤くなった顔を彼女たちから背けて更に続けた。

「まあ、形としては不本意というか、流されたというか、成り行きというか、そういう事も否めないけど、結果として君たちは僕の奴隷となった。この事実だけは動かしようがない。だから」

ここでリヨウトは背けていた顔を戻し、真っ赤になりながらも正面から二人を見据える。

「君たち二人は、もう僕のものだ。手放すつもりはないから覚悟してくれ」

その言葉にアリシアは口元を両手で押さえながら、その瞳に涙を浮かべる。もちろん、その涙は冷たいものではなく暖かなもの。

ルベッタも感心したような顔を一瞬だけ表にしたものの、次には明らかな喜びを浮かべた。

「だから、人前で軽々しく肌を晒すような事は口にするのも認めない。いいね？」

そう言ったりリョウトの口調は軽いもの。だが、若干の険しさが混じっているのをルベッタは感じ取った。

だからルベッタ素直に両手を軽く挙げて了解の意を現わす。だが、それでもなお、悪戯をしかける子供のようなにやりとした笑みだけは消さなかった。

「それはご主人様？ 人前でなければ肌を晒しても構わない、という事でしょうか？」

ルベッタは敢えて丁寧な物言いでそう言つと、座っていたベッドから立ち上がり、対面のリョウトの隣に腰を下ろすと、彼の腕を巻き込んで胸元へと抱え込んだ。

彼女の胸元は先程から開けられたままであり、リョウトの腕を抱え込んだ事でその豊かな胸の双丘の谷間が更にはっきりと強調される。

思わずどきまぎしつつも、その谷間から目が離せないリョウト。そしてルベッタとは反対側に、とさりと誰かが腰を下ろす気配がした。

もちろんそれはアリシアだ。彼女へと振り向いたリョウトとアリ

シアの視線がぶつかり合う。

アリシアの視線には明らかかなりヨウトへの期待が、そしてこの後の行為に対する覚悟が浮かんでいた。

「あ、アリシア……」

「……もう、私はリヨウト様のものなのでしょうっ？」

アリシアもルベッタ同様、空いている彼の腕を巻き込んでリヨウトへとしなだれかかった。

「さあ、リヨウト様？」

アリシアへと向けられた視線を取り戻すかのように、艶のあるルベッタの音がリヨウトの耳に響く。

「……俺たちをリヨウト様のものにしてくれ……」

ルベッタは片手でリヨウトの腕を抱いたまま、残った手で器用にワンピースのボタンを外していく。

やがて完全に開いたワンピースの前から、予想以上に豊かで美しい彼女の乳房が零れ出た。

「……さあ……」

「……リヨウト様……」

こちらもいつの間にか半裸になっていたアリシアと、完全にワンピースを床に落としたルベッタは、リヨウトの腕を片方ずつ取りながらゆっくりとベッドへと倒れ込んで行った。

10・認めて認められて（後書き）

『魔獣使い』更新しました。

今回にて三人の立場がはっきりと固まりました。

できればあと一話で第1部終了まで行きたいところです。

今後もよろしく願います。

11・王都へ（前書き）

今回にて、『魔獣使い』の第1部は終了となります。

そして、今回で第1部を終了させるため、いつもより長めになっ
てしまいました。

ご了承ください。

アリシアとルベッタ、そしてリヨウト。三人の初めての熱い夜は明けた。

夕べはどちらが先にリヨウトに抱かれるかで、アリシアとルベッタの意見が対立した。

どちらも自分が先だと譲らなかったが、リヨウトが自分は女性を抱いた経験がないと告白したため、ルベッタが先に抱かれる事に決まった。

リヨウトとアリシアという互いに初めて同士では、何かと問題が起こるかもしれない。ひよっとすると上手く行かないかもと、ルベッタが最もらしい事を主張して先行権を手に入れたのだ。

その時、彼女が心の中で自分がリヨウトの初めて女性となり、また、リヨウトの初めてを奪うのも自分だ、とこっそり優越感に浸ったのは言うまでもなく。

だが、そんな優越感は実際にリヨウトに抱かれるとあっという間に吹き飛ばされる事になる。

リヨウトは荒々しかった。

初めての体験でがむしゃらだったという事ももちろんあるが、それを差し引いたとしても彼は暴風のようなだった。

ルベッタとて男性の経験はあるものの、百戦錬磨というわけではない。あくまでもそれなりの経験がある、という程度に過ぎない。

そのルベッタをリヨウトは蹂躪した。

まさに蹂躪。

幼い頃より、英雄であった祖父に鍛え上げられたリヨウトの身体。例え彼に剣を扱う才能が今一つ欠けていても、その確かに鍛え上げられた身体とは別問題である。

そしてその身体の下で、ルベッタは悶え狂った。

ルベッタの身体には、傭兵時代に負っただらう傷痕が無数にあっ

た。しかし、それが彼女の美しさを損なうような事はない。

リヨウトがルベッタのその柔らかくしなやかな身体の奥に、男の欲望を解き放った時には既にルベッタは息絶え絶えの状態だった。

だが、リヨウトはそれで終わらない。

彼の次の標的はもちろんアリシア。

リヨウトとルベッタの行為を全て間近で見ていたアリシア。今まで男性の経験がないアリシアの眼には、その激しさは一段と激しいものに映った。

あまりの激しさに怖じ気づくアリシアだったが、暴走寸前のリヨウトがそれで彼女を見逃す筈がなく。

アリシアもまた、リヨウトという名前の竜巻をその身体でまともに受け止める事になった。

その後、二人は何度も何度もリヨウトに抱かれた。

激しく腰を打ち付け、容赦なく乳房を揉みただかれ、時に甘く唇と唇を合わせて快感へと誘^{いそ}う。

上になり下になり、前から後ろから、何度も何度も高みに押し上げられた。

アリシアとルベッタの体力が限界を超えて気を失うように眠りに落ちた時、既に空の一部が白み始めていた。

アリシアとルベッタの二人は、すっかり陽が高くなってもベッドから起き上がる事ができずにいた。

対してリヨウトはといえば、実にすっきりとした表情で町に用事があると二人に告げると、朝早くから部屋を後にした。

そんなリヨウトを見送る二人は、いまだにベッドにぐったりと沈み込んだまま。

「野獣だ……リョウト様は野獣……いや、あそこまで行くと野獣では生ぬるい……魔獣だな、あれは……」

「……男の人つて……皆……ああなの……？」

「そんな事はない……リョウト様が規格外なだけだ。安心していいぞ？」

「あ、安心して何よ……わ、私、リョウト様以外に抱かれるつもりはないわ」

二人は一つのベッドで並んで突っ伏している。その身には何も纏っていない。いや、唯一奴隷の首輪だけが彼女たちの身体を飾っていた。

「それで、リョウトはどこへ行ったのだ？ 何か聞いていないか？」

テーブルの上でうずくまっていたローが呆れた顔 竜なのになぜかそれだけは理解できた で、ベッドに伏せる二人に尋ねる。

だが、二人にできるのは黙って首を振る事だけ。身体を起こす事さえ億劫そうだ。

「やれやれ。人間とは何かと面倒なものだな……」

どこか人間くさい仕草でそう呟いたローは、再びテーブルの上でうずくまる。

「そう言えばガラムも言っていたな。いつかこのような時がリョウトにも来ると」

ガラムがローに語ったのは、人間の男女の交わりについて。いつかりョウトにもそういう相手が現われるだろう、とガラムが生前ローに語っていた。

「だが、ガラムは人間の男と女は一对一で情を交わすと言っていた筈……はて、これはガラムの話が間違っているのか？ それともリヨウトたちが逸脱しているのか？」

まあ、どちらでも本人たちが満足しているのなら別に構うまい。そう心中で結論付けると、ローは再びテーブルの上でゆっくりと目を閉じた。

一方その頃。宿を出たりヨウトはゼルガーの町を歩いていた。既に町は完全に起きていて、商店の軒先には商品が並び、通りにはかなりの人が歩いている。

そんな中をリヨウトは目的地に向かって真っ直ぐに歩く。そしてリヨウトが訪れた先。それは先日アリスアとルベッタを買い取ったロズロイ奴隷商だった。

館に入ったりリヨウトは迷う事なく受付へと向かう。本日受付にいたのはロームではなく、別の年若い剣呑そうな男性だった。

「店主はいるかい？」

受付へと向かったリヨウトがその男性に声をかける。

かけられた男性は、相手が少年と喋っている年のリヨウトを見て、あからさまに眉を寄せた。

「ああ？ おい、坊主。ここがどこだか判ってんのか？」

「もちろん。ここは奴隷商人の館だろう」

「ほう？ するつてえと、坊主が奴隷を買いに来てえのか？ それとも誰かの使い走りか？」

明らかにリヨウトを見下しているその男性は、彼を客だとは認め
ていないようだった。

確かに今のリヨウトの格好は富裕層の人間には見えず、とても高
価な奴隷を買い求めてきたとは思えない。だから男はリヨウトを単
なる冷やかしだと判断したのだ。

「奴隷なら昨日ここで二人も買ったから、もう必要ないよ。それよ
り、店主にリヨウトが来たって伝えてくれないかな？」

リヨウトのその答えに、受付の男の顔が見る見る青ざめる。

彼は聞いていたのだ。昨日、竜倒の三英雄の関係者が、この館で
奴隷を二人買ったという噂を。

そしてその噂は事実であり、店主であるローム直々に、もしリヨ
ウトと名乗る客が来店したら丁寧に接客しろ、と厳しく言い渡され
ていた。

「し、失礼致しました！　すぐに店主を呼んで参りますので、しば
らくお待ちいただけますでしょうか？」

態度を一転させた男は、リヨウトが頷いたのを確認すると慌てて
店の奥へと駆け込んで行った。

「お待たせ致しました、リヨウト様」

現われたロームは、昨日同様慇懃にリヨウトに腰を折る。

そして店主自らリヨウトを先導し、昨日とは別の応接室へと案内
された。

「して、本日は如何様なご用件で？　もし、奴隷がまだ必要とあら
ば幾らでも用意致しますが。昨日リヨウト様が買い求められた、ア

リシアという娘より少し前に入荷した奴隷なのですが、元貴族の男奴隷が三人おります。彼らなら格安でお譲りいたしますよ？」

「冗談じゃない。もう奴隷はいらないよ。それよりその三人、余程手を焼かせているみたいだね？」

ロームが言う三人とは、アリシアたちと魔獣の森に来ていた三人組の異だろ。昨日の彼らの態度を思い出し、ロームでもあの三人には手子摺っているとリョウトは判断した。

「ええ、まあ。ですが、あまり言う事を聞かない奴隷は商品になりませんからな。そろそろ、それなりの調教を施そうかと考えております」

相変わらず慇懃な態度のまま、何やら物騒な事を言うローム。そんなロームにリョウトは肩を竦めて、今日この店に来た用件を改めて告げた。

「 どう？ 何か問題はあるかい？」

「 いえ、別段問題はありませんが……本当にそれをなさるのですか？ 」

ロームの確認に、リョウトは無言で頷く。

「承知致しました。急いで準備致しましょう。ですが、リョウト様のお求めの品ですと、それなりの料金となりますが？」

「具体的には幾らぐらい？」

「そうですね……一つ銀貨1000枚といったところですか」

「では、二つで銀貨2000枚か」

「そうなりますな。ですが、ここはリョウト様の顔を立てて少々勉強させていただきましょう。二つで銀貨1600枚で如何ですか？」

「そんなに負けて大丈夫？」

「ははは、今後も当店をご贖戻にしていただければ、何の問題もありません。しかし、銀貨1600枚は大金ですぞ？ 僭越ながらご用意できますかな？」

裕福な一家族の一日の生活費が約銀貨10枚。それから考えても銀貨1600枚は大金である。

だが、リヨウトには何とかかなりそうな算段があった。

「何とかなるだろう。毎日稼げば二週間ほどで準備できると思う」

「ほほう。さすがは今評判の吟遊詩人のリヨウト様ですな」

「へえ。もうあなたの耳にも入っていたんだ」

「もちろんです。時に情報は重要な商品となりますからな」

すっかり評判になったリヨウトの唄は、一晩で実に銀貨100枚以上の収入となっている。

当然三人分の生活費なども必要になるが、今後も彼の唄が更に評判になれば、おそらく二週間で銀貨1600枚を稼ぐのは不可能ではないだろう。

「では、次にリヨウト様がご来店くださるまでに、ご希望の商品の方を準備致しましょう。ところで話は変わりますが、先日わたくしがお伝えした件、考えて頂けましたかな？」

「僕が統治者になるって話かい？」

「ええ、そうです」

「幾ら何でもそれは無理だろう。実際、どやったら僕のような平民が統治者になれるっていうんだ？」

「今の国王陛下は、有能な者は出自にこだわらず登用する御方だそうですね」

その話ならリヨウトも耳にした事があった。

数年前に即位した新しい国王は、それまでの伝統とか慣例といったものを全て無視し、自分の眼にかなった者は誰でも要職に就けているという。

そのため、今の王宮に務める者は有能な者ばかりという噂だ。

「リヨウト様が何らかの活躍をなさり、国王陛下のお目に留まれば登用されるのも夢ではないと思います」

「それで、仮に僕が登用されたとして、あなたにどんな利点があるんです？」

「ははは、リヨウト様が出世なさり、以後も我が商会をご臍臍にしてくださいれば、それなりの利点が生まれますとも」

「なるほどね。先行投資つてわけか。あなたはなかなか抜け目のない商人のようだ」

「お誉めに預かり恐悦至極です」

と、ロームは相変わらず慇懃に頭を下げた。

それから約二週間、リヨウトは毎晩「雲雀の止まり木」亭で唄った。

彼の唄は噂が噂を呼び、大勢の人が毎晩「雲雀の止まり木」亭に詰めかけた。

もちろん、唄い終わったりリヨウトに投げ込まれる銀貨は日を追うごとに増え、彼が目標としていた銀貨1600枚はあっという間に貯まった。

それでもリヨウトは更に数日「雲雀の止まり木」亭で唄い続けた。これは「雲雀の止まり木」亭の主人からの依頼である。リヨウトが近日中に旅立つ事をした主人から、せめてあと数日残ってくれと頼まれたのだ。

リヨウトも何かと世話になった主人の頼みを断り切れず、また、

目的の銀貨1600枚以外にも王都までの道中の護身用の武具の調達や、旅費も必要だった事もある。

そして遂に、リョウトは王都へ向かう決意をした。

「そうか。ようやく王都へ向かうのだな」

「予定より随分と長くこの町に滞在しちゃったわね」

一つのベッドの上で、リョウトから旅立ちを聞かされた彼の美しい奴隷たちは、主であるリョウトに裸で寄り添いながら思い思いに呟いた。

「ところでリョウト様は、どうしてこんなに長くこの町に？」

「何やら金が必要だと以前に言っていたが……そろそろ教えてくれないのではないか？」

初めて三人が肌を合わせた夜から、ほぼ毎日三人はこうしてベッドを共にしている。

最近ではリョウトも慣れてきたようで、最初の日ほどの激しさはなく、余裕をもって奴隷たちの相手をする事ができるようになっていた。

「うん、実はね」

リョウトはベッドから降りると、テーブルの上に置かれていた小さな布製の小袋を二つ手にして、再びベッドへと戻って来た。

そしてその小袋の中から取り出した物を、それぞれ二人に差し出した。

「これは……」

「やれやれ……。まさか、こんな物を用意するためだったとはな……」

…」

リヨウトが二人に差し出した物。

それは親指の爪ほどの大きさの丸く磨かれた玉石を幾つも繋げた首飾りのようなものだった。

よく見れば、その玉石の中の幾つかには何やら文字が一字ずつ彫り込まれている。

「これは君たちの新しい奴隷の首輪だ」

確かに彫り込まれた文字を繋げれば、それはリヨウトの名前となっている。

リヨウトはそれまで二人が嵌めていた革製の首輪を外すと、新しい首輪をそれぞれに嵌めてやった。

アリシアにはその眼の色に合わせた翡翠の玉を繋げた首輪を。
ルベッタには、やはり瞳の色に合わせた蒼水晶アクアオーラの首輪を。

二週間前、リヨウトがロームに特注してのが、この玉石の首輪だったのだ。

「本当はそれぞれ緑柱石エメラルドや蒼玉サファイアで作りたかったんだけど、さすがに高価過ぎて無理だった。だからこれで我慢してくれないか？」

「が、我慢どころか……」

「ああ。奴隷の首輪で、これ以上望むものはないよ」

二人の奴隷は、嬉しそうに首に嵌められた玉石の首輪に指を添える。

「これならばっと見には奴隷の首輪と判らないだろう」

リヨウトの言う通り、これを初見で奴隷の首輪だと見る者はまず

いないだろう。

これまでリョウトが二人を連れて町を歩いた時、二人の首に奴隷の首輪があるのが判ると、途端に見下したような態度を取ったり、あからさまに嫌そうな表情をする者が何人かいた。

それが気になったリョウトは、このような物をわざわざ特注して作らせたのだ。

それに彼の二人の美しい奴隷に、革製の首輪は無骨過ぎて似合わない気もしていたし。

「とっても嬉しいわ、リョウト様」

「ああ。今晚はいつも以上にご奉仕しなくてはな」

アリシアはとても嬉しそうに。ルベツタは何やら含みのある笑みを浮かべて。

二人の奴隷はゆっくりと主人の身体に自分の身体を重ねて行った。

翌日。リョウトたちは「雲雀の止まり木」亭の主人に旅立ちを告げた。

「そうか。行っちまうのか」

「今日まで色々お世話になりました」

リョウトたちが頭を下げると、主人は照れたように頭を掻く。

「おまえたちが居なくなるのはちっと寂しいというか、稼ぎが減って残念というか……まあ、なんだ。次にこの町に来ることがあれば、絶対にうちに泊まってくれよな。もちろん、宿代は負けてやるぜ」

「ええ。是非またこの宿に泊まりますよ」

そしてリヨウトは主人と握手を交わすと、「雲雀の止まり木」亭を後にした。

この数週間、何度も歩いたゼルガーの町の目抜き通りを、町の門目指して三人は歩く。

やがて門に辿り着くと、そこに詰めていた兵士の何人かが気軽にリヨウトに話しかけてきた。

彼らは何度も「雲雀の止まり木」亭にリヨウトの唄を聞きに来ており、すっかり顔見知りになっていたのだ。

そんな彼らも、リヨウトたちが旅立つ事を知るととても残念がった。

「またこのゼルガーに会いよ。そして、またおまえの唄を聞かせてくれ」

兵士たちに別れを告げ、街道を王都目指してリヨウトたちは歩く。そしてしばらく歩き、ゼルガーの町が見えなくなったところで、急にリヨウトは街道を外れた。

アリシアとルベツタは、互いに顔を見合わせて訝しむも、主であるリヨウトの後に黙って続く。

街道からも外れ、小高い丘を超えたところでようやくリヨウトは足を止めた。この場所は街道からは完全に死角になっている。

「こんなところで何をするの？」

アリシアがこれまでずっと疑問だった事を尋ねると、リヨウトは黙って左腕の袖を捲り上げた。

「王都へ向かうのがかなり遅くなったからね。だから、ちょっと時間を短縮しようと思って」

そしてリョウトは告げた。彼の故郷ともいえる魔獣の森。そこに長い間君臨し続けたの長の名前を。

ぴしり、という音と共にリョウトの脇の何も無い空間に黒い亀裂が走った。

驚くアリシアとルベッタをよそに、その亀裂はどんどんと広がり、その奥から低く腹に響く咆哮が聞こえてくる。

アリシアはその咆哮に聞き覚えがあった。

あの日、魔獣の森で対峙した恐怖の象徴ともいうべき存在。その存在が上げる咆哮が、今聞こえてくるものと同じなのだ。

そしてそれは現われた。

空間の黒い亀裂を押し広げるように、赤褐色の巨大な生物が悠然と亀裂の向こうから現われる。

「バロム。来てくれてありがとう」

リョウトが嬉しそうに告げると、赤褐色の巨大な生物も嬉しそうにその鼻面をリョウトに擦り付けた。

「ま……魔獣の森の長……」

「こ、これが魔獣の森の長……そしてリョウト様の異能か……」

呆然と呟くアリシアとルベッタ。その声が聞こえたのか、バロムがぎよろりとその巨大な眼を二人へと向けた。

途端、硬直する二人。

全長10メートル程の巨大な飛竜に至近距離から睨まれば、二人のように思わず硬直したとて無理はない。

「大丈夫だよ、バロム。この二人は僕の家族のようなものだから。僕にも君にも危害を加えたりしない」

リョウトの言葉に、バロムはゆっくりとその巨大な鼻面を二人へと近づけ、匂いでも嗅ぐようにふんふんと鼻を鳴らす。

その際、鼻孔の奥にちらちらと炎のような輝きが揺らめくのが目に入り、二人はまるで生きた心地がしない。

やがて納得したのか、バロムはちろりとその巨大な口腔から細長い舌を伸ばし、ペロりと二人の頬を優しく舐め上げた。

どうやら自分たちの事を受け入れてくれたようだ、ほうと胸をなで下ろす二人。

「しかし、リョウト様はこの飛竜と言葉が交わせるのか？」

先程のリョウトとバロムの遣り取りを見て、ルベッタが尋ねた。

「別に言葉が通じるわけじゃない。ただ何となく互いの感情が理解できるんだ。な、バロム」

リョウトがバロムの鼻孔の脇を撫でると、バロムは嬉しそうにその太く強靱な尻尾をぶんぶんと揺らす。

その様を見た二人の奴隷は、まるで巨大な犬のようだと感じた。

「王都の近くまで僕たちを運んでくれるかい？」

バロムはリョウトの要請にはふうと小さく炎を吐いて肯を現わし、その太く頑強な足を折って地面に腹をつける。

そしてリョウトは二人の奴隷を伴い、そのバロムの背に跨がり、背中に生えた刺に三人の荷物をしっかりと括りつけた。

そしてアリシアとルベッタにしっかりと掴まるように告げると、バロムの背中をぺちぺちと数回叩く。

合図を受けたバロムはゆっくりと立ち上がり、その巨大な翼を拡げて羽ばたき始める。

やがて浮き上がる赤褐色の巨体。

更に上昇を続けると、やがてバロムの巨大な身体がゆっくりと前方へと滑り出す。

魔獣の森の長は、その背にリヨウトたちを乗せて大空を舞う。

その場で数回旋回したバロムは、リヨウトが指し示す方向へと進み始める。

悠然と空を舞うバロムの背中から、リヨウトは遙か下方を見下ろした。

遠くまで広がる緑の大地。緑といっても全て同じ色ではなく、所々色相の違った緑が広がっている。

それは草原だったり、畑だったり、森だったりするためだろう。

そんな緑の大地の中を、何本もの赤茶色の線が走っている。そしてその線の上を蠢く小さな何か。

赤茶色の線は街道であり、蠢くものは街道を行く旅人たち。

そんな旅人たちの中で、なにやら一塊ひとかたまりの集団が北の方角から南へと進むのがリヨウトの眼に映った。

それはきつと馬車で移動する旅人なのだろう。馬車で移動するという事は、どこかの貴族が旅をしているのかも知れない。

(あの一団も王都を目指しているのかな?)

その一団の進行方向からそう推測したりリヨウト。彼はバロムの背中をぽんと叩いて速度を上げるように指示する。

この速度なら、彼らが目指す王都に着くのにそんなに時間はかからないだろう。

11 - 王都へ（後書き）

『魔獣使い』更新しました。

前書きにも書きましたが、これにて第1部は終了となります。

次回からは第2部の王都編です。早ければ来週中に一度ぐらいは更新できるのではないかと考えています。

それから、もうお気づきの方もいると思いますが、今回『辺境令嬢』とほんのちよっぴりクロスオーバーしました。今後もこんな感じでクロスオーバーを取り入れて行こうと考えています。

今後ともよろしく願います。

01 - 愚鈍牛狩猟

静かな山間の渓谷を流れる清流。その清流を中心に広がる森林地帯は、数多くの魔獣が住み着き人間が容易に立ち入る事を許さない。ここらの森林地帯にわざわざ訪れるのは、棲息している魔獣そのものが目的の魔獣狩りぐらいのものだろう。

ここはカノルドス王国の王都ユイシークから北西へ五日程離れた山岳地帯。

山の麓にはいくつかの村落が存在する。これらの村落の主産業は木材の伐採や木の実の収集、狩猟などだが、この辺りには温泉が湧き出す場所が幾つかあり、温泉目的で訪れる観光客相手に様々な商売も行われていた。

カノルドス王国は北方の国という事もあり、昔から貴族平民問わず温泉が好まれている。

それでも遠隔地の温泉を訪ねるのは平民には難しく、やはり主立った客層は裕福な商人か貴族たちという事になる。

もしくは、この辺りで魔獣を狩るために訪れる魔獣狩りたちだろうか。

そんな清流の河原では、今一頭の魔獣が食事の真つ最中であつた。体高は3メートルを優に超え、分厚い皮膚と脂肪は生半な剣や鏃を容易に無力化するだろう。

頭頂には牛のように横に張り出した二本の角と、鈍い動作から愚鈍牛と呼ばれる魔獣狩りたちの間での通称は単純にグドン

魔獣である。顔付きも何となく牛に似ていなくもない。

だが、手足の先には蹄ではなく鋭い鉤爪を有し、二足歩行をする。牛と呼ばれてはいるものの、識者による類別としては飛竜や水竜と同じ亜竜に分類される魔獣である。

そして今、この魔獣が食べているのは辺りに生い茂っている草ではなく、この魔獣が主食としている二尾蛇にびえひと呼ばれる別の魔獣。

二尾蛇は陸上に住む蛇に似た魔獣で、体長は1メートルちょっと。だが体長よりも長い尻尾を二本有し、それがこの魔獣の主な武器となっている。

二尾蛇は頭を下にした逆立ちの体勢で尻尾を持ち上げ、その尻尾を鞭のように自在に振り回すのだ。その威力は凄まじく、まともに人間が食らえば骨折程度では済まないほど。

だが愚鈍牛はその分厚い皮膚と脂肪にものをいわせて、尻尾を食らいながらも平然と二尾蛇に近付き、その鋭い鉤爪で押え込むようにして捕え、獲物とするのだ。

二尾蛇にとつて、愚鈍牛はまさに天敵と呼ぶべき存在であろう。

二尾蛇の肉を食い千切り、ががつと咀嚼中だった愚鈍牛が、ふと何かに気づいて頭を上げ周囲をきよろきよろと見回す。

そして愚鈍牛の眼は捕えた。溪流の浅瀬に立つ、小さな人間の姿を。

表面を赤褐色の鱗で覆った鎧。胸部と腹部、そして背中を覆う鎧はバックアンドブレストと呼ばれる種類の胸甲だ。肩当てから伸びる細くしなやかな腕を守る防具もまた、赤褐色の鱗で覆われた手甲。腰回りを固める装甲もやはり赤褐色の鱗で表面を覆い、複数のパーツからなる腰甲は見ようによってはミニスカートのようにも見える。

そしてそこからすらりと伸びる健康的な足。

なぜか太股部分に装甲はなく、白い肌が剥き出しになっているが、

膝上から爪先までを一体化した赤褐色の魔獣素材を用いた長靴ちようかで守りを固めている。

そしてその首元。そこには親指の爪ほどの大きさの緑の玉石を連ねた首飾りのようなものが、燦々と降り注ぐ陽光に眩しく煌めいていた。

邪魔にならないように三つ編みにされた赤味の強い金髪が、峡谷を吹き抜ける涼風にゆらりと揺れる。

そしてその両の手には剣と楯。左手の楯の表面にも鎧同様赤褐色の鱗が連なる。逆の右手には金属とは明らかに別種の光沢を持つ白い緩やかな反りを持つ片刃の剣。

この剣は飛竜の爪から切り出して鍛え上げた代物で、魔獣狩りたちの間では『飛竜刀』ワイヴァンブレドと呼ばれている剣である。

その切れ味は鋼の剣よりも遙かに鋭く、それでいてかなりの軽量。今この剣を持つている女性　愚鈍牛に人間の雌雄など判別できないだろうが　が用いても支障がないほどに軽い。

その女性は飛竜刀と楯を構えると、その緑柱石エメラルドのような碧の瞳をすうと細める。

と、同時に女性の両足が清流の川底を力強く蹴った。撃ち出された矢の如く、女性は愚鈍牛目がけて一気に駆け寄る。

あつという間に彼我の距離を殺した女性は、駆け寄る勢いを一切殺すことなく刺突を繰り返す。

飛竜刀の鋭い切先は、女性の腕力と勢いに後押しされて、やすやすと愚鈍牛の太短い脚の皮膚と脂肪を貫いた。

脚を襲った鋭い痛みにも愚鈍牛が咆哮する。

周囲の木々をざわめかせる程の咆哮。慣れない人間がその咆哮を耳にすれば、恐怖のあまりその場で凍りつきかねない。

だが、女性は大音量に僅かに顔を顰めるだけで、愚鈍牛が咆哮を上げている間に離れて十分な間合いを稼ぐ。

この時になって、ようやく愚鈍牛は目の前の人間が自分を傷付ける外敵だと判断した。

そして外敵を排除するため、愚鈍牛は人間を目がけて牛のように突進する。

だが、第一歩目が地面に触れる直前、その脚を先程以上の痛みが突如襲った。

痛みの正体は小さな矢。どこからともなく飛来した矢が、愚鈍牛の脚の甲を絶妙のタイミングで貫いたのだ。

脚が地面を踏みしめる直前に襲いかかった痛みには、愚鈍牛は足元を狂わせその巨体を清流の中に横倒しに倒れさせた。

周囲に大量の水しぶきが飛び散る。

その水しぶきを貫くように、何本もの矢が続げざまに愚鈍牛に降り注いだ。

矢はその殆どが重厚な皮膚と脂肪に阻まれたが、それでも運のいい数本が皮膚と脂肪を貫く。全身を襲う痛みには愚鈍牛が再び咆哮を上げる。

「さすがね。あれだけの矢の早撃ちはちょっと真似できないわ」

倒れた愚鈍牛に矢が降り注ぐ光景を見て、飛竜刀を構えた女性が誰ともなく呟いた。

そしていまだに清流の浅瀬でもがいている愚鈍牛に、女性は再び一気に駆け寄る。

まるでそのタイミングを見計らったかのように 実際、見計らったのだが 矢の雨が止む。

清流の水面を蹴り碎いて愚鈍牛に接近した女性は、振り上げた飛竜刀を愚鈍牛の首筋目がけて勢い良く振り下ろす。

女性の手に皮膚と脂肪、そしてその内側の筋肉までもを切り裂く感触が伝わってくる。

そして勢いよく噴き出す愚鈍牛の血。女性の剣が愚鈍牛の首筋を走る太い血管を切り裂いたのだ。

それをやや離れた樹上から見ていたもう一人の女性は、横構えに

していた弓を下ろしながら呆れたように呟く。

「相変わらず無駄に勢いだけはいいな。しかも愚鈍牛の皮膚と脂肪を切り裂くとは……」

艶やかな黒髪を頭上で結い上げた女性の出で立ちは、飛竜刀を持った女性と同じく赤褐色の魔獣素材を用いたもの。

だが防御力を重視した作りの飛竜刀の女性の鎧とは違って、この女性の鎧は防御力よりも機動性を重視した作りになっていた。

見た目的にも、明らかにこの女性の鎧は重厚さが無い。

だが、それでいいのだ。彼女の役目はこうした後方からの牽制と援護攻撃なのだから。相手の矢面に立つのは、飛竜刀の女性の役目なのだ。

「さて、そろそろ頃合いか。最後の仕上げは我らがご主人様に任せるとするか」

そう零した女性の首元で、連ねられた蒼水晶アクアオーラがきらりと陽の光を跳ね返した。

愚鈍牛の首筋から噴き出した返り血を浴びないように距離を取った女性は、愚鈍牛から注意を逸らす事なく、ちらりと清流から周囲の森林部へと繋がる獣道に眼をやり、ゆっくりとそちらへ移動する。この時になってようやく起き上がった愚鈍牛は、人間がそろそろと横這いするように移動している事に気づいた。

それを見た愚鈍牛は、この人間が逃げようとしていると思いついた。

おおおん、と怒りの咆哮を上げた愚鈍牛は、首から血を溢れさせながら逃げる人間を追う。

対して女性の方も、愚鈍牛が自分目がけて走り出した事を確認すると、くるりと反転して本格的な逃走に切り換え、緩やかな上り坂となっている獣道を全力で駆け登る。

本来、愚鈍牛の脚は遅い。その巨体の歩幅を考慮しても、人間の脚力でも余裕で逃げ切れる程に遅い。そこから愚鈍牛という名が付けられた程なのだ。

だが、逃げる女性と追う愚鈍牛の距離は一行に変化しなかった。これは明らかに女性が故意に速度を調整しているからなのだが、人間を追う事に夢中の愚鈍牛がそれに気づく事はない。

そして斜面を駆け登った女性は森の中に飛び込む。当然それを追う愚鈍牛も、周囲の木々をなぎ倒しながら突き進む。

やがて逃げる女性の前方に、開けた空間が出現した。

そして空間の真ん中に、一人の黒髪の男性の姿があった。

その姿を視認した時、女性の顔には深い深い笑みが浮かぶ。その笑みに含まれているものは絶対の信頼。そして不変の情愛。

男性の姿を確認し、女性の走る速度が心持ち上がる。だが、彼女は十分役目を果たした。愚鈍牛をこの場に連れて来るといふ囿の役目を。

二人の女性同様、この男性も赤褐色の魔獣素材の鎧を纏っていた。ただし、飛竜刀の女性ほど防御重視でもなく、弓の女性ほど機動性重視でもなく。

敢えて言えば二人の中間ほどの防御力と機動性を合わせ持った鎧だ。

そしてその腰には二振りの剣。

アムジストソード

一本は紫水竜の鱗から鍛えられた紫水剣。そしてもう一本はありきたりな鋼製の剣だが、鍔の部分が大きく張り出し、握る拳を覆うような護拳がついている。いわゆるパライングソードとかパライングダガーと呼ばれる受け払い用の防護剣である。

だが、男性はそれらの剣を構える事はしなかった。

やがてべきべきと木々をなぎ倒して、愚鈍牛が広場に姿を見せた。

それを確認した男性は、右は黒いが左は紅いその眼をやや細めながら、装甲に覆われていない左腕を前方に翳した。

その左腕に刻まれた五つの痣　縁紋えにしもんと男性は呼んでいる　の
一つが淡く光を放つ。

「ガドン！」

男性の唇から言葉が零れ出ると同時に、彼の横の何も無い空間に黒い亀裂が走った。

そしてその亀裂を押し広げ、のそりと巨大な生物が姿を現わす。
ずんぐりとした身体に丸っこい頭。手足は太短く、全身が柔らかな
そうな毛皮に覆われている。

その毛皮の色は白。だが耳と四肢、そして両目の周りだけが黒い。
早い話が大熊猫パンダなのだが、カノルドスでは斑熊と呼ばれるれっき
とした魔獣である。

何より大熊猫との違いはその大きさ。3メートルを超える愚鈍牛
よりも遥かに巨大なその身体は優に5メートルを超える。

そして愚鈍牛同様、動きは早くないもののその巨体から生まれる
怪力は、飛竜であるバロムの鱗を易々と引き裂く程だ。

突如現われた斑熊に驚いて脚を止めた愚鈍牛に、斑熊ガドンは猛然と襲
いかかった。

四肢を駆使して走り寄り、近付きざまにその鋭い鉤爪を横風よこかぜに振
るつ。

それだけで愚鈍牛の首の骨は、何ともあっさりとはし折れたのだ
った。

今回の標的である愚鈍牛を無事に仕留めたりヨウトたちは、清流
の傍にある天然の露天風呂に三人一緒に浸かりながら、狩りでかい
た汗を流していた。

「しかし凄いな。ガドンの力の強さは」

そこらに生えていた樹を引き抜き、座り込んでばきばきと齧っている斑熊のガドンを眺めながら湯に浸かっていたルベツタは、先程からしきりにガドンの怪力を感じていた。

そして今回の狩りの主役であったガドンは、リヨウトたちから少し離れたところで食事中。

なぜガドンがリヨウトたちから離れたところにいるのかといえば、どういうわけかガドンは水の傍に近寄ろうとしないのだ。これはリヨウトとガドンが出会った頃からであり、詳しい理由はリヨウトも知らない。

だから先程の狩りでも、アリシアが囿となって川から離れた森の中に愚鈍牛を誘き寄せる作戦を取ったのだ。

「まあ、力の強さだけなら、ガドンはバロムより上だからね」

ルベツタと同じように湯に浸かったリヨウトは、気持ち良さそうに眼を閉じたまま答えた。

「本来、愚鈍牛というのは実に厄介で、狩るのが難しい魔獣なんだがな。確かに動きは鈍いからこちらの攻撃が外れることはあまりない。しかし、奴らには重厚な皮膚と脂肪がある。これらがこちらの攻撃の殆どを無効化してしまう。それに何より、あいつらは極めてタフなんだ」

ルベツタの言葉通り、愚鈍牛に攻撃を当てるのは難しくない。だが止めを刺すのは極めて難しい。

愚鈍牛の分厚い皮膚と脂肪は、こちらの攻撃の殆どを阻んでしま

それは即ち、致命傷を与えるのは容易ではないという事だ。そして愚鈍牛の生命力は極めて強靱で、倒れる直前まで全力で暴れ回る。普通愚鈍牛を狩る時は、少しずつ少しずつダメージを与えていて、長い時間かけて弱らせたところで止めを刺す。

だがガドンの一撃は、そのタフな愚鈍牛の首の骨を一撃でへし折ったのだ。ルベッタがしきりに感心するのも無理はないだろう。

先程アリシアの飛竜刀が愚鈍牛の首を切り裂き、盛大に血を噴き出させたが、あれはまさに会心の一撃であり、あのような攻撃はそうそう入りはしないものだ。

そしてそのアリシアだが。

彼女は現在、すっかりガドンに夢中になっていた。

確かにガドンのあどけなく転げ回ったり、引き抜いた樹を齧る姿は愛らしくはある。それが例え5メートルを超える巨体でも。

アリシアは湯の中にぼけっと立ち尽くし、先程からずっとガドンの姿を眺めている。

「……ああ……なんて愛らしいのかしら……」

その瞳は完璧に愛らしいものを愛でる少女のそれだ。

だが、湯の中にいる以上、彼女も今、全裸である。その形のよい乳房や下腹の翳りを惜しげもなく陽の光とリョウトの眼に晒しているのだが、今の彼女はそれも全く気にもならないぐらいガドンの仕草にめるめるのようだった。

もともと、今更リョウトに裸を見られたからといって、それがどうしたとルベッタなら答えそうだが。

しばらくそうしてガドンの姿を眺めていたアリシアが、不意にリョウトへと振り返るとざばざばと湯を掻き分けて彼の傍まで来る。

「リョウト様！ あの魔獣、私にくださいー！」

「い、いや、ね？ くださいと言われても、別に僕のものというわ

けではないし……」

「やれやれ。そこまであのもこもこが気に入ったのか……」

困惑するリョウトと呆れ返るルベッタ。そんな二人の間の湯の上を、黒くて小さな物体がぶかーと流れて行く。

「そもそも貰ってどうするのだ？」

湯の上をぶかぶかと漂っていた黒い物体が、むくりと細長い首をもたげてアリシアに問う。

「決っているわ！ あのもこもこのふわふわに包まれてまったりほっこりするのよ！」

「わけが判らん。人間というものは時々理解不能な思考をするな」

ふるふると数回首を振ると、黒い物体　ローは再びぶかぶかと湯の上を漂う。

「ふむ……。なあ、ロー？　後学のために一つ尋ねるが、竜というのはそうやって湯に浸かる習性があるのか？」

ローは現在、湯の上を漂っている。しかも腹を上にした仰向けの状態で、だ。その姿はロー独自の仕草なのか、それとも竜全体の習性なのか。ルベッタが聞きたいのはその辺りだろう。

「ん？　これは以前、リョウトの祖父であるガランから聞いたのだ。湯に入ったら腹を上にしてぶかぶかと浮かんでいるのが流儀だと、ガランが言っていたぞ？　実際、その時はガランもこうして浮かんでいたしな」

「……爺さん……竜に変な事教えるなよ……」

しよっぱい顔で頭を抱えるリョウト。だが、そのリョウトが急にガドンへと振り返った。

「どうした、ガドン……？ ああ、そうか。もう帰りたいなんだな」

リョウトの言葉に、ガドンは頷いて肯定を現わす。

リョウトが左手を前に出す。彼の左手にある縁紋の一つが淡い輝きを帯びると同時に、空間に黒い亀裂が走る。

ガドンは座っていた巨大をもっこりと起こし、のしとした足取りでその亀裂へと向かい、身体をねじ込むようにその亀裂の中に姿を消した。

「……ああ……もこもこが……もこもこが行っちゃた……」

「しかし、いつ見ても不思議な光景だな。この黒い亀裂はどこに繋がっているんだ？」

がつくりと湯の中で跪くアリシアを放っておいて、ルベッタは以前から疑問だった事をリョウトに確認する。

「きつと、魔獣の森にあるガドンの罅すきに繋がっている……と、思う。何せ僕自身はこの黒い亀裂を通り抜けた事がないから、正確な事は判らないんだ」

「なるほど。で、呼び出す時は？」

「これも推測だけど、それぞれの魔獣たちがいる所に亀裂が現われるんだと思う。呼び出した魔獣たちはすぐに現われるからね」

「確かに。もし、罅にしか亀裂が現われないとしたら、呼び出した時に必ず魔獣が罅にいるという保証はないものな」

リョウトの異能はかなり特殊な異能だといえる。

その能力を、本人も含めて完全に理解している者はおそらくないだろう。

過去の文献などを探したとしても、きっと前例はないに違いない。それ程までに希有な異能なのだ。

「さあ、そろそろ行くのか。まだ最後の仕事が残っているからね」
立ち上がってそう告げたりヨウトに、ルベッタもまた頷いて立ち上がる。

この時になってもまだ、アリシアだけは湯の中で打ちひしがれていたけど。

01 - 愚鈍牛狩獵（後書き）

『魔獣使い』更新しました。

今回より第2部に入りました。取り敢えずはリョウトたちの現状その1といった感じで。

そして、『辺境令嬢』で張った伏線を『魔獣使い』で回収するという反則も使用。「愚鈍牛」と「二尾蝦」の元ネタはそのまま「グドン」と「ツインテール」。

グドンの主食がツインテールなんてネタ、もう知ってる人も少ないんだろうなあ。

今後もよろしくお願いします。

02 - 愚鈍牛狩獵の理由

その日、リヨウトたち一行は静かな山間の村落を訪れていた。

当面の目的地であった王都に辿り着いたリヨウトたちは、次の目的をどうするか相談し合った結果、しばらくは王都で過ごし、その後はリヨウトの当初の予定通り、王都を拠点としてこの国を旅する事と決まった。

王都に滞在中はリヨウトがその喉を遺憾なく發揮して、滞在費と次の旅に必要な路銀以上の金銭を容易に稼ぎ出した。

近頃の王都では、片紅目かたあかめの吟遊詩人としてリヨウトの名前はちょっとしたものにまでなっている。

もちろん、彼の傍に常に付き従う、二人の美しい奴隷の存在も彼の名を高める助けとなっていた。

そしてしばらく王都で過ごした後、三人は旅に出た。最初の目的地は北西部の山岳地帯。その辺りには有名な温泉町があると知り、興味を引かれたリヨウトがそこを訪れる事に決めた。

もちろん、二人の奴隷たちもそれに二つ返事で承知した。

そしてバロムの翼の力を借りることなく、徒歩での数日の旅の後、彼らは目的地である山岳部の村落の一つに辿り着いた。

そして、そこである問題に巻き込まれたのだ。

リヨウトたちが訪れた村は、どうやら獣人族が主な住人の村のようであった。

獣人族とは、文字通り直立歩行する獣といった外観の種族で、様々な亜種が存在する。

代表的なところではコホルト 犬人族、カラカル 猫人族、イベリコ 豚人族、イヤロップ 兎人族など。

どの亜種も身長は人間の大人の腰ほどで、全ての亜種に共通する特徴として、力は人間よりも弱い。が手先が器用で臆病な性格などがあげられる。

獣人族の殆どは人間の街や村で暮らしているが、中には彼らが中心の集落や、彼らだけの集落を築く事もある。どうやらこの村はそんな村の一つらしい。

人間の町などでは、人間の営む商店や食堂などで下働きをする事が多い。中には自身で商店や宿屋を営む者もいる。

貴族などの上流社会の間では忌避される傾向なものの、一般市民の間では人間と同格の存在として扱われる。

ちなみに、獣人族は全て男女で外観が変わらない。なので人間からすれば一目で獣人族の男女の見分けはまず不可能である。

それは、リヨウトたちが村に入り、幾つも軒を並べる温泉宿のどれに逗留しようか迷いながら村の通りを歩いてきた時だった。

背後から彼らに声をかけてきた人物がいたのだ。

「もし、あなたがたは魔獣狩りハンターですか？」

振り返ったリヨウトたちの視線の先には一人の犬人族。

灰色の長毛の犬人族で外見はシユナウザー種に似ている。そして声から判断して男性のようだ。それも年を経た十分に重みのある声。

「いや、僕たちは旅の者で魔獣狩りじゃない。この村へは温泉目的で来ただけだよ」

「その成りで……魔獣狩りではないと仰るか？」

今、リヨウトたちが身につけている装備は、とてもただの旅人が身に纏うようなものではなかった。

三人とも赤褐色の鱗の目立つ魔獣の素材をふんだんに使った装備
その中でもリョウトの紫水竜アメジストソードの剣と、アリシアの飛竜刀ワイヴァンブレイドは特に目を
引いた。

これらの装備の素材は飛竜のものだ。飛竜といえば魔獣の森の長
であるバロムに代表されるように、かなりレベルの高い魔獣である。
その飛竜の素材を用いた装備をしているのに、魔獣狩りではないと
言ってもなかなか信じては貰えないだろう。

これらの装備の元となった素材は、もちろんバロムのものである。
実は先日、バロムが脱皮をしたのだ。

脱皮した殻は、直接飛竜から剥ぎ取った皮膚や鱗、甲殻などに比
べると強度的に劣る。だが、それでも並みの金属よりは強靱であり、
巨軀を誇るバロムの殻は、リョウトたち三人分の装備に用いてもな
お余る程であった。

更に今まで傷ついたり痛んでいた牙や爪も脱皮の際に抜け落ち、
新たなものが生え揃った。

アリシアの飛竜刀はこの抜け落ちた爪で鍛えられているし、初撃
で愚鈍牛の足を貫き転倒させたルベッタの矢も、飛竜の牙を鏃に用
いてあった。

その後、余った抜け殻は王都の魔獣の素材を扱う店に売ったのだ
が、その際、飛竜の脱皮した抜け殻を偶然旅の途中で見つけたと適
当にごまかした。

まさか、知り合いの飛竜が脱皮したものだとは言えないし、言っ
たとしても知り合いに飛竜がいるなど誰も信じないだろう。

そんなわけであるから、リョウトたちを知らない者から見れば、
彼らが魔獣狩りだと思っても無理のないことなのだった。

「愚鈍牛？」

犬人族の男性 どうやらこの村の村長むらびらしい が言うには、

近くの渓谷に愚鈍牛が住み付いたらしい。

現在、リヨウトたちは村長の案内で、村の中心にある温泉宿で彼から詳しい話を聞いていた。そして、その渓谷にはこの村の温泉の一番の目玉である渓谷沿いの露天風呂があるのだが、愚鈍牛のせいでの露天風呂が使えないのだそうだ。

「それで、あんたは俺たちにその愚鈍牛の退治を依頼したかったわけか」

「はい。てつきりあなた方は魔獣狩りだと……しかも身に付けているものから判断しても、相当腕の立つ魔獣狩りだとばかり……」

ルベッタの言葉に、村長は肩を落としながら答えた。

ついでに、彼の耳もぺたんと力なく伏せられた。

そんな村長の態度に、リヨウトはふうと諦めの混じった息を零す。

「その愚鈍牛って強いのかい？」

そうリヨウトが尋ねたのは、今まで村長と話していたルベッタではなく、静かに控えていたアリシアの方だ。

駆け出しだったとはいえ、魔獣狩りであった彼女なら、愚鈍牛の具体的な強さを知っているのではと思ったのだ。

そしてその考えは的を得ていた。

「ええ、強いわ。もともと、私は直接対決した事はないけどね。聞くところによると、動きは鈍いけど、力はかなり強いそうよ」

「俺は傭兵時代に一度だけ対峙した事があるな」

「へえ？ それでどうだった？」

「今アリシアが言った通り、動きは鈍いから向こうの攻撃を避けるのは容易いし、こちらの攻撃も当てやすい。しかし、愚鈍牛の恐るべきところは攻撃力よりも防御力の方だな」

相変わらず渋い口調でルベツタはそう告げた。

「それで倒せたのかい？」

「結果的にはな。ただし、俺を含めた五人がかりで三日かかった。

愚鈍牛は何度剣で斬ろうが槍で突こうが一向に倒れない。本当に恐るべきタフさだったよ」

肩をすくめるルベツタを横目に見つつ、リョウトは何かを考え込む様子を見せる。

考え込んでいる主に聞こえないように、彼の二人の奴隷はこっそりと会話を交わす。

「まあ、どんなに強い魔獣だろうが、俺たちのご主人様が奥の手を使えば倒せない魔獣は少ないと思うがね」

「確かにそうね」

二人が知るリョウトと縁を結んだ魔獣は飛竜のバロムだけだ。しかし、彼は全部で五体の魔獣と縁を結んだと言っていた筈である。だとすれば、バロムに匹敵する魔獣が他にもいたとしても不思議ではない。

もし、リョウトが縁を結んだ全ての魔獣を一度に呼び寄せれば、きっと万の軍勢相手でも引けを取らないんじゃないかとひっそりと考える奴隷たちであった。

結局、リョウトは村長の依頼を受ける事にした。

村長が提示した報酬は銀貨5000枚。これは愚鈍牛の討伐依頼と考えるならば、破格の安値といえる値段だった。本来なら、愚鈍牛一頭の討伐はこれの倍あたりが相場だろう。

リヨウトが破格の値段で引き受けたのは、自分たちが本職の魔獣狩りではないことと、リヨウトには現在奴隷たちにも告げていない秘かな目的があり、その目的のために本来の半額で受ける事にしたのだ。

もちろん、鄙びたこの村に銀貨10000枚という大金を出すのは難しいという理由もある。その代わり、村の温泉施設は今後無料で自由に利用できるという約束を取り付けたが。

そしてその日は村に泊まり、翌朝早くからリヨウトたちは愚鈍牛狩りに出かけた。その際、村人総出で見送られたりして、なんともむずがゆいような気分の出立だったけど。

村の住人の中には愚鈍牛の具体的な特性などを知っている物知りもいて、村長もどんなに早くてもリヨウトたちが村に帰ってくるのは数日後だろうと思っていた。いや、下手をすると帰って来られない可能性も考えていた。

だが、リヨウトたちは出かけたその日の夕方前には村に戻ってきた。それも愚鈍牛を討伐した証に切り落とした頭部を携えて。

露天風呂でリヨウトの言った最後の仕事とは、この愚鈍牛の頭部を切り離す作業の事だった。

あまりにも早い愚鈍牛の討伐に村長を始め村人全員が驚愕し、次いでリヨウトたちを称える盛大な歓声が沸き起こる。

そんな大歓声の中、出かける時よりも更にむずがゆい思いをしながら凱旋したリヨウトたち。彼らは村人たちが見守る中、村長に愚鈍牛の頭部を入れた麻袋を引き渡した。

小柄な獣人族である村長は、受け取った麻袋を支えきれず思わず尻餅をついた。

「約束通り、愚鈍牛を退治して来たよ」

「驚きましたな。まさかこんな短時間で愚鈍牛を退治されるとは…」

尻餅をついた姿勢のまま、村長は感嘆の籠もった視線でリヨウトを見上げた。

「後、約束通り愚鈍牛の後始末は任せていいよね？」

「もちろんですとも。村人総出で取りかかりましょう」

退治した愚鈍牛の亡骸はそのまま森の中に放置してある。愚鈍牛はとても人間三人で運べるようなものではないからだ。

リヨウトの魔獣　ガドン辺りに協力して貰えば何とでもなるだろうが、彼が使役する魔獣の事はあまり他人に知られない方がいいので、愚鈍牛の亡骸の処置は予め村人たちに頼む事にしたのだ。

それも、愚鈍牛の皮革や肉もそのまま村に寄贈するという条件で。実は愚鈍牛の肉は美味であると評判であり、王都にでも持ち込めばかなり高額で取引されるだろう。もつとも、愚鈍牛の肉の一部は村で薫製にして貰った上で、リヨウトたちが貰い受ける約束になっているが。

そんなわけなので、村長が早速嬉しそうに愚鈍牛の亡骸回収の指示を村人に出し始める。あまり長い時間亡骸を放っておくと、肉などが腐敗するのはもちろんだが、その死肉を目当てに他の魔獣がやって来ないとも限らないのだから。

そんな時、ルベッタが村長にちよつとした事を申し出た。

「……はあ。愚鈍牛の皮膚の一部ですか？」

「ああ。実は愚鈍牛の皮膚というのは丈夫な上に弾力にも富んでいてな。弓や弦の素材に使えるんだよ」

今、彼女が使っている弓は複数の木材を貼り合わせて作った合成「コンボジック」弓である。「トボッ」

飛竜の抜け殻は硬度はあっても弾力には乏しいので、弓の素材には向いていなかった。だから今回、ルベッタは愚鈍牛の皮膚を用い

て合成弓を強化するつもりなのだ。

「ええ、もちろん構いません。今回リョウト殿たちには散々お世話になりましたからな。それぐらいお安いご用ですとも」

村長の快諾を得て、ルベッタは愚鈍牛の皮膚の一部を貰い受ける事になった。

その後数日村に滞在したりリョウトたちは、たつぷりと温泉を堪能して王都へと帰る事にした。

人目のないところではローもこっそり温泉に浸かってご機嫌だった。もちろん、あの腹を上にしてぶかーと浮かぶ入浴方法で。

リョウトも単に湯に浸かるだけでなく、湯で上気した奴隷たちの肌を散々堪能したりした。

そして王都への帰路の途中、やはり上機嫌で彼の後ろを歩くアリシアとルベッタの気配を感じながら、リョウトは己の秘かな目的について思いを馳せた。

彼の秘かな目的とはアリシアとルベッタを奴隷から解放する事であつた。

そのための手段として、彼はまず何らかの形で名声を得る事を求めた。

吟遊詩人としてもいいし、その他でも構わない。とにかく名声を得る。

名声を手に入れた後は、それを元にどこかの貴族などの統治者と親睦を結ぶ。そして、その伝手でアリシアとルベッタを奴隷から解放するのだ。

もしくは、名声を得てリョウト自身が何らかの形で統治者となつてもいい。それでも彼の目的は果たされるだろうから。

だから今回、彼は格安の値段で愚鈍牛の討伐を引き受けた。それ

も退治した愚鈍牛をそのまま村に譲るといふ破格の条件で、だ。

幸い今回の舞台は人が集まる温泉町。リヨウトたちの今回の活躍は、この町を訪れる人々の間にゆっくりとだが広まっていくだろう。もちろん、今回だけで十分な名声を得られるとは思っていない。今後も更に何らかの形で活躍し、人々の口にする必要があるだろう。それが何年先になるのか判らない。ひよつとすると、正規の手続きをした方が早くアリシアたちを解放できるかも知れない。

それでも、リヨウトは名声を求めようと決心する。

アリシアを自由にするために。ルベツタを解放するために。

その結果、彼女たちがリヨウトの元を離れようとも。それでも構わないとリヨウトは思う。

「ん？　どうかしたのか、リヨウト様？　何やら力が入りすぎていないか？」

「本当。何かあったの、リヨウト様？」

彼の決心を敏感に感じたのか、後ろを歩く二人が声をかけた。

そんな二人に振り返り、なんでもないと告げてリヨウトは王都目指して黙々と歩く。

何となく違和感を感じた奴隷たちだが、互いに顔を見合わせるだけ何も言わずに主の後を追う。

何かあればきっと、彼は自分たちに話してくれると信じているから。

そしてこれが、後に吟遊詩人たちによって語られる、『片紅目のリヨウト』と彼に付き従う美しき奴隷たちの物語の最初の第一編なのであった。

02・愚鈍牛狩猟の理由（後書き）

本日は『魔獣使い』を更新しました。

内容としては前話の補足的なもの。どうしてリョウトたちが魔獣狩りのような事をしていたのか、という話と、狩猟後のちょっとした様子など。

そして、リョウトの秘めた目的も明確になりました。

今後も色々のご支援願えれば幸いです。よろしく願います。

03・片紅目のリョウト

最近、王都でよく耳にする名前があった。

その名前の主を人は吟遊詩人と呼ぶ事もあれば、魔獣狩りハンターと呼ぶ事もある。そして時に単なる旅人だと呼ぶ者もいた。

その人物は常に美しい女奴隷を二人連れており、なぜか左目だけが紅かった。

その事から人々は、いつしか彼を片紅目の吟遊詩人、もしくは片紅目の魔獣狩りなどと呼ぶようになった。

王都の目抜き通りを一本、西に離れた通りに『轟く雷鳴』亭という名前の宿屋兼酒場があった。

名前の由来は、数年前に即位したこの国の王が、『雷』の異能を持っている事から名付けたらしい。

王が即位する前は別の名前だったが、この店に足げく通う者たちも既に前の名前を口する事はなかった。

この店の常連たちの殆どは魔獣狩りたちであり、店主は時に彼らへの仕事の依頼の仲介をする事もある。

このような店は王都には数多くあり、腕のいい魔獣狩りたちを多く抱える店ほど、当然条件の良い依頼が舞い込む事になる。

よって店の店主たちは、他の店よりも好条件で宿に泊まらせたり、酒代を安くしたりして腕の良い魔獣狩りを囲い込もうとする。

そしてそれが更なる店の繁盛へと繋がるというわけだった。

だが最近、この『轟く雷鳴』亭に一組の珍しい一団の姿をよく見かける事があった。

今夜も『轟く雷鳴』亭に、男性の声がか心地よく響いていた。最近ではこの店の常連たちの中にも、彼の唄を聞くのを楽しみにやって来る者もいる程である。

今日も彼はそのよく響く声で一人の青年の唄を唄い上げる。

最初は名もなきその青年。だが彼はその秘めたる力をふるい、仲間を得て、幾つもの戦場を駆け抜けて行く。

やがて彼は至高の高みへと辿り着く。

それは玉座。青年は僅かな時間で王へと上り詰める。

青年の名前はユイシーク・アーザミルド・カノルドス1世。この国に君臨した新しく若い王。

彼は今、この国の国王がその高みへと至るまでの戦記を唄い上げていたのだ。

既に誰もが聞き慣れた、目新しさなど皆無の唄。

だが、それでも聴衆たちは必死に耳を傾ける。

彼の唄を一編たりとも聞き逃すまいとするかのように。

やがて彼は王の唄を唄い終わる。

長く尾を引く旋律がゆっくりと消え去る。そして彼の声とリュートの音が完全に消えた時、代わりに巻き上がったのは盛大な拍手と彼を称える口笛や床を踏み鳴らす音、そして聴衆が投げ込まれた銀貨が床に落ちる音だった。

「あんたが片紅目のリョウトかい？」

唄い終わり、テーブルを一つ占領して投げ込まれた銀貨の枚数を数えていたリョウトに、一人の男が声をかけた。

男は身なりから判断して、どうやら魔獣狩りのようだった。魔獣の素材を使った武器を身に纏っているところを見ると、それなりに腕の良い魔獣狩りらしい。

「確かに僕がリヨウトだけど？ 何か用かな？」

「ああ。あんたが飼っている奴隷　金髪の方を、一晚借り受けたい。幾らだ？」

にやにやと好色そうな笑みを隠そうともしない男の言葉に、リヨウトの顔は不機嫌そうに歪められる。

確かに男の言葉通り、奴隷の主人の中には所有している奴隷に春を売らせる者もいる。だからこの男も、リヨウトが彼の奴隷たちに春を売らせていると思いついて入っているのだろう。

一口に奴隷と言っても、その扱いは所有者によって様々だ。

家畜同様に鞭打って無理に働かせる者もいれば、家族のように大切に扱う者もいる。

だが、殆どの所有者は奴隷を『給料を払わなくてもいい使用人』として扱う。

只でさえ高価な奴隷である。強引に働かせて潰してしまつては元も取れない。だから時に厳しく時に甘く、少しでも長く使えるように扱うのが一般的な奴隷に対する態度だろう。

「悪いけど、僕は奴隷たちにそういう仕事はさせていない。だから一晚貸せと言われても無理だよ」

「相場の倍を払うと言つてもか？」

「それでもだ」

それまでにやにやと笑っていた男の顔から笑みがすうと消えた。

剣呑な光を湛えた男の視線を、リヨウトは何事もないかのように受け流す。

その態度に馬鹿にされたとも思つたのだろう。男は腰に下げたいた剣の柄に手をかけながら、一步リヨウトへと歩み寄る。

だが、それ以上男がリヨウトに近づくことはなかった。

いや、近づくことはできなかった、が正しい。
リョウトがその事に気づいた時、男の喉笛に短剣の刃が添えられていた。

「俺たちのご主人様を傷つけようとする輩に、俺たちは一編の慈悲も与えはしない。覚悟はいいな？」

男の影から現れたのはルベッタである。

彼女は弓の扱いだけではなく、気配を消す事にも長けていた。

そして気配を殺したまま、今のように背後からその短剣を一閃させれば、大概の相手は自分が何をされたか気づかないうちに絶命するだろう。

「わ……判った、俺が悪かった！ ゆ、許してくれないか？」

背後から浴びせられる鋭い殺気に、男は情けないほど狼狽え必死にリョウトに許しを乞う。

そしてリョウトはつと視線をルベッタに向ける。それだけで主人の意思を理解したルベッタは、静かに喉元から短剣の刃を退けた。

数歩後ずさった男は、そのまま慌てふためいて『轟く雷鳴』亭を飛び出して行く。

後に残されたのは男に向けられた罵倒と、ルベッタに対する賛美の声だ。

そんな賛美の声を一切無視して、ルベッタは己の主人の元へと歩み寄った。

「助かったよ、ルベッタ」

「なに、大した事はしていないさ。それに俺だけじゃないぞ？」

ついと流されるルベッタの視線。その先には防具こそ身に纏って

いないものの、愛剣である飛竜刀ワイヴァンブレドを手にしたアリシアの姿があった。

「ありがとうアリシア。心配かけたね」

「いいえ、心配はしてないわ。大体、あの程度の男に遅れを取るリヨウト様でもないでしょう?」

微笑むリヨウトの両脇に、アリシアとルベッタも微笑んで腰を下ろす。

リヨウトの右にアリシアが。反対側の左にルベッタが。それが彼女たちの定位置だった。

そんなリヨウトたちに、大剣を携えた顔見知りの魔獣狩りの一人が話しかけた。

「よ、聞いたぜ? たった三人で、しかも一日もかけずに愚鈍牛を狩ったんだって?」

「相変わらず耳が早いね」

「ま、何かと聞き耳は立てるようになってるんでね。それより、どいう手段で一日もかけずに愚鈍牛を狩ったんだ? ちょこつとぐらい教えるよ」

「んー、こればかりは極秘事項なんでね。おいそれとは教えられないな」

片目を閉じて口元に人差し指を当てるリヨウト。どうやら本当に教えて貰えそうにないと判断したその魔獣狩りは、別方向から攻めてみる事にした。

「おいおい、魔獣狩りは新しい狩猟方法を見つけたら公表しなきゃいけないんだぜ? 知らないとは言わせないぞ」

「あいにくだけど、僕は魔獣狩りじゃないからね」

確かに魔獣狩りたちの間では、新しく画期的な狩猟方法を発見したらそれを公表するという暗黙の了解がある。

狩猟方法といえば大げさに聞こえるが、要は特定の魔獣の嫌う匂いだとか成分だとか、急所の場所などといった様々な情報の公開である。

それらの情報を公開する事で狩りの成功と生存率を高めようと、いつの頃からか始まった魔獣狩り同士の連携の一つであった。

「ち、どうしても教えてくれないか。じゃあいつその事、俺たちのチームに入らないか？」

「だから僕は魔獣狩りじゃないと言っているだろう？ チームに入るも入らないもないよ」

苦笑を浮かべるリョウトに、その魔獣狩りは大げさに落胆して見せる。

「くそう。リョウトがチームに入ってくれたら、そのまま芋蔓式にアリシアさんとルベツタたんも一緒に俺たちのチームに入ったのによお」

「人の名前に『たん』とか勝手につけるな。おぞましい」

「本当、気持ち悪いわ」

「ぐう……だつて仕方ないだろおっ！？ 俺たちのチームは野郎ばかりで華がないんだよおっ！！」

「それこそ、僕の知ったことじゃないだろうに」

「自分はいつも美人を二人も連れているからっていい気になりやがって！ お、俺だつてアリシアやルベツタみたいな美人と一緒に狩りに行きたいんだよこんちくしょう！」

本気で泣きが入り始めた彼を宥めつつ、リョウトたち三人は大きな声で笑い合った。

「さて、リヨウト様？ これからの事だが、どうするつもりだ？」

部屋へと戻ってきた三人。ベッドに腰を下ろしたリヨウトの隣に座ったルベッタが問いかけた。

「愚鈍牛を狩った事で思わぬ臨時収入もあった事だし、しばらくは王都でのんびりするの悪くないと思うが？」

「そうね。しばらくはゆっくりしましようか」

当然のようにルベッタとはリヨウトを挟んだ反対側に腰を下ろしたアリシアが微笑む。

そして二人は同時にリヨウトにしなだれかかった。急な事もあり二人の体重を支えきれなかったリヨウトは、彼女たち共々ベッドへと倒れ込んだ。

「さあ、リヨウト様？ しばらくゆっくりするのだから、ちょっとぐらい激しくても構わないぞ？」

「ええ……そ、その……私も……激しくても……い、いいわよ？」

「……了解した。その代わり覚悟はいいね？」

纏れるようにベッドに沈んだ三人。

そんな三人の様子を、いつものようにテーブルの上でうずくまっていたローは、ちらりと一瞥するとそのまま関心がないとばかりに居眠りを決め込んだ。

そして、ベッドに沈んだ三人が再び起き上がったのは、月が天空の頂点を過ぎてからだったという。

だが彼らは知らない。しばらくゆっくりしようという彼らの目論見が、無情にもあつという間に崩れ去るという事を。

「岩魚竜？」
いわぎょりゅう

翌朝、朝食を摂りに酒場兼食堂に現れたりヨウトたちに、『轟く雷鳴』亭の主であるリントーが呼び止め、一件の狩りの依頼を告げた。

「ああ。最近ゼルガーの町を流れるコラー川の下流に住み付いたらしくてな。ゼルガーとオーネスを行き来する船がもう何隻も沈められているらしい」

ゼルガーと南の隣国であるオーネス王国は、コラー川を用いた船便で結ばれている。そしてリントーの話によれば、岩魚竜と呼ばれる魔獣が出現するのはゼルガーの南、カノルドスとオーネスの国境付近らしい。

「リントーの親父さん。くどいようだけど、僕は魔獣狩りじゃないんだけど？」

「けどよ、岩魚竜を狩れそんな奴は皆出払っちゃっててなあ。おまえらぐらいしかないんだよ、岩魚竜を相手にできそうなのは。ここは一つ頼まれちゃくれないか？」

カウンターに両手を着き、この通りと頭を下げるリントー。そんな彼の姿にため息を吐きつつ、リョウトは背後に控える二人の奴隷たちに向き直った。

「岩魚竜って魔獣について、何か知っているかい？」

「そうねえ。その名前の通り、岩のような鱗に覆われた巨大な魚のような魔獣だって聞いた事があるわ」

「俺もアリシアと同じ程度の知識しかないな」

それぞれに考え込む奴隷たちの様子を見て、リョウトは再びリントーへと振り返る。

「俺たちには無理じゃないかな？ 岩魚竜について余りにも知らなさすぎる。獲物の事を知らなくては、どんなに腕の立つ魔獣狩りでも狩る事はできないよ」

リョウトの返答があまり色よいものでない事にリントーは落胆を隠しきれないが、それでも必死に彼は食い下がる。

「なら、こうしようじゃねえか。岩魚竜に詳しい魔獣狩りを一人か二人紹介する。そいつと組んで狩ってくれないか？」

「おいおい、親父さん。話が矛盾していないぞ。岩魚竜を狩れるような奴がいらないから、俺たちに話を回したんだろう？」

ルベッタの的確な突っ込みにリントーは一瞬あっという顔をするものの、必死に動揺を押さえ込む。

「ま、まあ、直接岩魚竜を狩る事はできなくても、岩魚竜に詳しい奴はいるもんだぜ？ だからそういう奴を紹介する。頼む！ この通り！」

再び頭を下げたリントー。必死に頼み込む彼を見て、リョウトは腕を組んで考え込む。

そしてしばらく考え込んだ後、腕を組んだ姿勢のまま頭を下げ続けているリントーへと問いかける。

「何か理由があるのだろうか？ 親父さんがそこまで必死に俺たちに

頼み込むのは」

リョウトのその一言に、実は、と前置きしてからリントーは頭を上げた。

「……ここだけの話、この依頼は王宮からの依頼なんだ」

「王宮？ どうしてそんなところからこの店に依頼が？」

「実はよ、俺はこの国の王様とちよつとした知り合いなんだよ。実際は王様が即位する前……まだ解放軍のリーダーだった頃の話だがな。その王様から直接　　と言つても、さすがに本人じゃなくて使いの役人からだけど頼まれちまつてよ。断りきれなかったんだよ」

「王宮の騎士団や軍は動かせないのかしら？」

アリシアのもつともな疑問に、リントーは絶体に内密にしろよと告げてから説明する。

「今のこの国の軍は数が圧倒的に少ない。いや、実際の数だけならそれなりになるんだが、その中で使える奴らは一握りだけらしい。もちろん、これから使える奴らもどんどん増えていくんだろうが、なんせ新体制になって数年だ。軍備拡張よりも先にしなきゃいけない事が山積みだったみたいでな。それに実際のところ、この国の軍の中核は王様だ。王様の異能に頼るところが大きい。王様一人で千人でも万人でも薙ぎ払えちまうんだからな」

まるで俺たちのご主人様みたいだな、と内心で思うルベッタ。ちらりと隣をみれば、アリシアも動揺にこちらを見ていた。どうやら同じことを考えていたようだ。

そんな事を考えている間も、リントーの話は続いていた。

「その虎の子の精鋭もなんだかんだで色々忙しいらしくてな。最

近東の街道に山賊が出現するとかで、その討伐に向かわなきゃならないそうだ」

「それで親父さんのところに岩魚竜の話が回ってきたのか」

リョウトの言葉に、リントーはそういうことだと頷いた。

リョウトは組んでいた腕を話すと、はあと一つため息を吐く。

「しばらくは王都でゆっくりするつもりだったんだけどな」

リョウトがそう呟いた途端、リントーの顔がぱあつと輝いた。

「おお、やってくれるか！ いや、おまえならそう言ってくれると思っただけだぜ！」

破顔するリントーに、リョウトは仕方ないとばかりに肩を竦めて告げる。

「今回は親父さんの顔を立てておくけど、この貸しはでかいよ？」

03・片紅目のリョウト（後書き）

『魔獣使い』更新しました。

今回は『魔獣使い』の世界で、奴隷がどういう扱いを受けているのかをちよこつと描写。

あとは次回からの岩魚竜狩りに向けてのつつかかり。

自分は魔獣狩りではないと言いつつ、魔獣狩りとしての実績を積み上げつつあるリョウトたち。

岩魚竜狩り編はちよこつと長くなりそうな予感。いや、狩りの場面はそれ程でもないけど、そこに至ままでに色々とありそうで……

今後ともよろしく願います。

04 - アンナ・グールド

岩魚竜いわうりゅうについて詳しい人物。

『轟く雷鳴』亭の主人であるリントーに紹介されたその人物は、リョウトたちが想像していたような人物像とは随分とかけ離れた人だった。

「はい。私がリントーさんの紹介でやってきたアンナ・グールドです。よろしくお願いしますね」

肩甲骨まで伸ばされた真っ直ぐなシルバーブロンドに藤色の瞳。身長はアリシアよりも頭一つ低いあどけない容姿。

見た目にはどう見ても15か16歳ほどにしか見えないが、リントーのよれば彼女はこれでも25歳なのだという。

そして彼女は王立学問所に勤める研究員でもある。それも魔獣の生態の研究が専門だということから、今回の件には確かに打ってつけの人物であるだろう。

王立研究所とは名の通り、王国が各種学問・研究を行うために設けている施設で、貴族の子女の殆どが幼少期にここに通い、文字の読み書きや基本的な算術などを習う。

ちなみに、元貴族であるアリシアもかつては通った経験がある場所であった。

この国の識字率はさほど高くはない。貴族はともかくとして、庶民では裕福な家の子供たちが王立学問所に通うか、私塾を開いている識者の元で読み書き計算を習う。

中級層以下の庶民で、文字の読み書きや計算ができる者はかなり少ないのだ。

リョウトは祖父の友人に読み書きなどを教わっているし、ルベツタも所属していた傭兵団で読み書きのできる傭兵から習っているが、これは少数派だと言えるだろう。

「はい。それでは早速、岩魚竜について解説したいと思いますが、よろしいでしょうか？」

容姿同様幼げな声でそう尋ねるアンナに、リョウトたち三人は揃って頷いた。

それを確認したアンナは、持参した資料を開きながら岩魚竜に関する説明を始める。

「はい。まず岩魚竜は竜と呼ばれてはいますが、分類上は竜や亜竜の仲間ではなく、あくまでも魚類に分類されます。ただし、魚といっても彼らはいわゆる肺魚であり、えらではなく肺呼吸をしています。なので岩魚竜は時折水面に呼吸のために顔を出さなくてはなりません」

リョウトを始め二人の奴隷たちは、魚が水の中でえら呼吸をしているのは知っていたが、肺呼吸する魚がいる事は初耳だった。

だが、リョウトたちは今はその事は関係ないと判断し、アンナの解説に耳を傾ける。

「はい。彼らは実に強靱な各種のヒレを有しており、このヒレを用いて水中を力強く高速で、かつ素早く泳ぎ回ります。特に動物でいうところの四肢にあたる胸ヒレと尻ヒレは強靱で、この四つのヒレを器用に使って陸上でも短時間ながら活動できます。もちろん、水中に比べると動きは格段に遅くなりますけど」

アンナは両手をばたばたと振りながら解説する。

その姿があまりにも彼女の幼げな容姿に似合っていたので、リョウトたちは思わず苦笑する。

そんな苦笑をかみ殺して、ルベッタが片手を上げてアンナに質問する。

「それで、岩魚竜の主な攻撃方法は？」

「はい。水中での主な攻撃方法は、その強固な身体をそのままぶつけてくる体当たりですね。この体当たりをまともにくらうと、大型の船でさえ一発で沈むと言われています。はい」

「と言う事は、陸上になるとまた別の攻撃方法がある？」

リョウトの質問に、アンナはにっこりと微笑む。

「はい。なかなか鋭いですね。えーっと……確かリョウトさん、でしたね？」

事前に自己紹介した時のことを思い出したアンナが、岩魚竜に関する資料から顔を上げてリョウトを見る。

「あなたが言われた通り、陸に上がった岩魚竜はある意味で水中よりも恐ろしい存在となります。岩魚竜は体内に水を溜める袋を持っていて、陸に上がる前にその袋に水を溜め込みます。そしてその水を口から吐き出して攻撃して来るのです、はい」

アンナは口を窄めてふーと何かを吐き出す仕草をする。

「はい。この吐き出された水の勢いは凄まじく、人間程度の大きさのものなら簡単に吹き飛ばしてしまいます。そして吐き出す水には二種類ありまして、一つは真っ直ぐに勢いよく吐き出す直噴射、もう一つは細かく周囲にばらまくように吐き出す散噴射です」

「確かにそれはやっかいだな」

「そうね。水中の岩魚竜と戦うか、それとも陸に誘き出して戦うか……どちらにしても戦いづらい相手ね」

リョウトの背後に控えていたアリシアとルベッタが、アンナの説明を聞いてそう結論づけた。

水中の岩魚竜と戦おうとするなら、こちらも船の上など足場の定まらない条件での戦いは免れない。そうかと言って陸上に誘き出せば、今度は強力な水噴射が待っている。確かにどちらで戦うにしてもやりづらい相手となるだろう。

「ま、どちらの条件で戦うかはリョウト様が決めるだろう。俺たちの役目はどちらにしる変わらんよ」

「ええ。リョウト様の指示に従って全力で戦うのみ、ね」

と、アリシアとルベッタは不敵な笑みを浮かべた。

その日の夜、『轟く雷鳴』亭の酒場は大騒ぎだった。

リョウトたちに無理な討伐を依頼したリントーが、気を利かせて景気づけにと彼らと居合わせた客たちに酒を振る舞ったのだ。

居合わせた者たちは喜んで酒を飲み、これから岩魚竜を狩りに行くリョウトたちの前途を快く祝してくれた。

対してリョウトもその返礼にと景気のいい唄を披露する。もちろん、今日もリョウトの喉は大絶賛である。

だが、そんな盛況な酒場の片隅では、小さな争いが起ころうとしていた。

「……やっぱり彼が最近噂の片赤目の吟遊詩人だったんですね……彼の左目を見た時もしかしてと思ったんですが、魔獣狩りだとばかハンター

り思っていたので人違いかと思いました。私、以前から噂の片赤目の吟遊詩人の唄が聞いてみたかったんです。はああ、噂通り素敵な唄声ですねえ、はい」

リョウトに誘われてこの宴に参加していたアンナは、テーブルの一つに陣取ってワインの入ったグラスを片手にほんのりと頬を朱に染めて唄うリョウトの姿を見入っていた。

いや、見蕩れていると言った方がいいかもしれない。

そのアンナの視線が急にリョウトから離れ、同じテーブルにっていたアリシアとルベッタに向けられる。

ただし、その視線は先程リョウトに向けられていたきらきらとしたものではなく、どこか敵意の籠もったぎらぎらとしたものだった。が。

「聞きそびれていましたが、あなたたちはリョウトさんとはどのような関係なのですか？ 見たところ単なる魔獣狩りの仲間……というだけではなさそうですね？」

「私たちはリョウト様の奴隷よ。それがどうかしたの？」

ワインをちびちびとなめつつ、アリシアは平然と奴隷だということを口にし、ルベッタのもその隣で豪快にエールを喉に流し込みながら頷く。

「ど、奴隷っ！？ あ、あなたたち奴隷だったのっ！？ だ、けど首輪してないじゃないっ！？ それとも身体のどこかに所持印を直接刻まれているのっ！？」

だが、アリシアとルベッタがまさか奴隷だとは思ってもみなかったアンナは、思わず立ち上がってしまう程に驚いていた。

そして、一見ただけでは二人は奴隷の証である首輪をしていな

いように見える。その事もアンナには疑問のようであった。

アンナの指摘に二人は揃って己の首元の玉石を連ねた首飾りを指さした。

「これが私たちの奴隷の首輪よ。ほら、よく見て。ここにリヨウト様の名前が刻んであるでしょ？」

「なかなか洒落た奴隷の首輪だろう？ まあ、こんなものを奴隷の首輪にしているのは俺たちだけだろうがな」

誇らしげに奴隷の証を示す二人。その堂々とした態度に、アンナの驚きは更に大きくなった。

「で、でも、あなたたち奴隷なのに私たちと同じテーブルで同じ物を食べて、あまつさえお酒まで……それが許されると思っているの？」

本来、奴隷に与えられる食事は主人の食べ残しか、奴隷用の安く味もよくない物が普通である。更に主人と同じテーブルと一緒に食事するような事もあり得ない。ましてや酒など普通は与えられないものだ。

アンナが二人の食事を見て驚くのも無理はない。

「許すもなにも、主であるリヨウト様が好きなように飲み食いしていいと言っているのだから、何も問題はないだろう？」

「なんですすってっ!？」

平然と言つてのけるルベッタに、アンナの顔色が酒精による赤とは別の赤に染まる。

おそらく酒の勢いもあるのだろう。アンナの怒りは更に加速する。そして酒の勢いを得ているのは彼女だけではないようだ

「奴隷なら奴隷らしく床にはいつくばって物を食べなさいよ！」

「ふざけないで！ 私たちの主はリヨウト様よ！ それ以外の誰にも命令される謂れはないわ！」

「そうだとも！ 俺たちのご主人様はリヨウト様ただ一人！ それ以外の奴にああだこうだ言われたくないな！」

三人とも既に立ち上がり、一触即発といった状態。だがそんな三人に冷水を浴びせた者がいた。

文字通り、彼女たちの頭から水をぶっかけたのだ。

三人はその暴挙におよんだ人物へと怒りの籠もった視線を向ける。だが、その人物が誰なのか判った途端、三人の怒りの炎は瞬く間に鎮火した。

彼女たちの視線の先にいるのはもちろんリヨウト。彼はいつになく真面目な顔で彼女たちのすぐ近くまで来ていた。

「三人とも頭は冷えたか？」

いつになく低く冷たく響くリヨウトの声。そんな声を初めて聞いたアリシアとルベッタの背中を、冷たい何かが滑り落ちていった。

三人に着いた火が消えたと判断したリヨウトは、彼女たちに背中を向けるとカウンターにいるリントーの元へと足を運んだ。

「店を汚して済まないね、親父さん。これは詫賃だ。残りは場をしらけさせてしまったお詫びに皆に何か飲ませてやってくれ」

リヨウトはカウンターに百枚以上の銀貨を置くと、再び立ったまま硬直している三人の元へと戻る。そして無言のまま三人を彼らが泊まっている部屋へと連れて行った。

部屋に戻ったりリヨウトは二人の奴隷に冷たい視線を注ぐと、先程同様の冷たい声で告げた。

「酒を飲むなどは言わない。だが、酔った勢いで辺りに迷惑をかけるのは認めない。いいな？」

「は、はい、申し訳ありません」

「以後、気をつけます」

しゅんと頂垂れる二人から視線を離し、今度は呆然としているアンナへと向き直った。

「僕の奴隷たちが迷惑をかけたように申し訳ない。そしていきなり水をかけた事も重ねてお詫びします」

アンナへと頭を下げて謝罪するリヨウト。アンナも十分に頭が冷えたように、リヨウトに謝られて逆に困惑している。

だが一瞬だけ、彼女がアリシアとルベッタに勝ち誇ったような視線を向けたのをリヨウトは見逃さなかった。

「だが、アンナさん。先程彼女たちも言った通り、彼女たちは僕の奴隷だ。そして彼女たちをどう扱おうが僕の自由だ。僕は彼女たちに食事などを制限するつもりは一切ない」

きっぱりとそういきるリヨウト。彼にはつきりと自分の奴隷宣言されたアリシアたちは嬉しそうに頬を染める。

そんな嬉しそうなアリシアたちがなぜか面白くなく感じたアンナは、今度はリヨウトへとくっつかかった。

「ですが、リヨウトさんの奴隷の扱いは間違っています！ 確かに

たまにご褒美として美味しい食事やお酒を与えるのもいいでしょう。ですが、それが毎日というのは度を超えています！ 奴隷は奴隷らしく扱わないと、その内に言うことを聞かなくなりますよ！？ それに――」

アンナはアリシアたちが腰に下げた剣や短剣を見ながら続けた。彼女たちは主人であるリョウトの身を守るため、鎧は着ていなくても武器は常に携帯するようにしているのだ。

「奴隷に常に武器を与えておくのも間違っています！ 奴隷に武器なんかを与えておいたら、いつ逆上した奴隷に後ろから刺されるか判らないじゃないですか!？」

戦時に奴隷に武器を与えて戦わせる事はよくある。魔獣狩りが奴隷に従者として使う事も珍しくはない。

だが、それでも常時奴隷に武器を与えておくような事はしない。それはアンナが言った通り、いつ奴隷が反逆するか判らないからだ。

だが、リョウトはその辺もアリシアとルベッタの自由にさせていた。

「それも僕の自由だろう。僕は彼女たちを信用している」

「それにいつも後ろから刺されるのは、どちらかと言うと俺たちの方だしな。なあ、後ろから刺されるのがとっても好きなアリシア？」

「な、なんて事言い出すのよっ!？ わ、私は別に後ろからしてもらうのが好きってわけじゃ……た、確かに好きか嫌いかわねれたら好きだけど……」

真っ赤になって思わず自爆するアリシア。ルベッタはそんなアリシアを見てにやにやと笑い、リョウトも先程までの冷たさはすっかり

り引っ込んで苦笑している。

そしてルベッタの言っている事が何を意味するのか悟ったアンナは、アリシア以上に真っ赤になってあたふたしていた。

「あ、あなたたち……リョウトさんとそんな事を……な、なんてうらやま……じゃなくて！　なんてふしだらな……」

「そうは言うが、俺たちはリョウト様の奴隷だし？　リョウト様のような若い男が二人も女奴隷を飼っているんだ。する事はするに決まっているだろう？」

先程とは逆に今度はルベッタが勝ち誇った顔でアンナを見やる。そして彼女に見せつけるようにリョウトの腕にしなだれかかった。

「そ、そそそ、そういう行為は愛する男女がするものでしょうっ！？」

まだ酒精が抜け切っていないのか、再び着火したつぽいアンナがむきになって反論する。だがそれは、すっかり冷静に戻ったルベッタに、更に手痛い反撃を与える事になる。

「俺はリョウト様を愛しているとも。奴隷としてはもちろんだが、一人の女としても、な」

「わ、私だってリョウト様を愛しているわ！」

アリシアもルベッタに負けじとリョウトの腕を抱え込むようにして抱きつく。

今なら判る。彼と初めて出会った時に抱いた気持ちは何なのか。どうやら自分は彼に一目惚れに近い状態だったらしい。

そしてほんの一時別れた際、彼女は奴隷に落とされた。

もう二度と彼と会うことはできない。そう考えた時、彼女の絶望

は奴隷に落とされた時の絶望よりも大きかったのだ。

だが実際は一日と経たない内にリヨウトが目の前に現れ、奴隷に落ちた自分を買収取ってくれた。

あの時に感じた気持ち。

奴隷に落ちたという悲愴感は、彼のものになれたという幸福感があっさり吹き飛ばしてくれた。

以来、彼女の気持ちは変わらない。いや、変わるどころかどんどん大きくなる。

そして今、その気持ちをはっきりと口にする事で、アリシアは改めて認識した。

自分はリヨウトを愛していると。

そしてリヨウトは、自分に寄り添い、はっきりと気持ちを口にしたアリシアとルベッタを抱き寄せて囁いた。

「ありがとう。僕も君たちを愛している。もちろん奴隷としてではなく女性としてだ。二人一緒、というのは少し変かもしれないけどね」

小さな囁き。少し離れたところにいるアンナにようやく聞き取れるぐらいの小声。

だが、抱き寄せられていた二人の耳には確かに届いた。

リヨウトは照れくさいのか、真っ赤になりながら決して二人の奴隷たちを見ようとはしなかったけど。

嬉しそうに微笑むルベッタと、感きわまってリヨウトの腕に顔を押しつけたままのアリシア。

そんな二人を少し離れたところから見続けていたアンナ。

彼女はこの時、一つの決心をする。

それが岩魚竜へと挑むリヨウトたちを更に苦しめる結果になるのだが、当然彼女はその事に気づく筈もない。

04・アンナ・ギルド（後書き）

『魔獣使い』更新。

いつもここへ着ていただいております。

おかげさまを持ちまして、この『魔獣使い』も着実にアクセス数が伸びております。

お気に入り登録件数も60件近くになり、総合PV30000以上、総合ユニーク6000以上となりました。

今後ともがんばりますので、見捨てずお付き合いください。

よろしく願います。

05・アンナの提案

リョウトたちが泊まっている部屋は今、重苦しい沈黙が立ち籠めていた。

部屋の中では、リョウトたち三人がテーブルについて真剣に悩んでいた。

彼らの悩み。それは数刻前の事だった。

「はい！ 私も一緒に行きますっ！！！」

互いの気持ちを確かめ合い、改めて絆を固めたリョウトとアリシアとルベッタ。

そんな三人をどこかうらやましそうに眺めていたアンナが、突然発したのが先の台詞であった。

「一緒に行くって……まさか、岩魚竜狩りに同行する……って事かい？」

「そうです、はい！」

思わずぼかんとするリョウトたちだったが、すぐに我に返るとアンナを翻意させようと説得する。

「それは止めた方がいい。狩りに同行するのは危険だ。君は傭兵でもなければ魔獣狩りでもないんだ」

「ですが、私には知識があります。きっと私の知識はリョウトさんの力になる筈です」

知識が時として強大な武器になり得る事はリョウトも理解している。

だからと言って、自身の身を守る術もない人間を狩りに同行させるのは、足手まとい以外の何者でもない。

魔獣は決して甘い相手ではないのだ。

だが、結局アンナの決心を覆す事はできなかった。

「同行させてくれなければ、勝手にについて行くだけです。はい」

とまで言われた事もあり、リョウトは一晩考えさせてくれとアンナに提案し、アンナもこれを了承した。

そのアンナは、住まいとしている王立研究所の職員寮へは帰らず、今晩はこの『轟く雷鳴』亭に部屋を取って泊まっている。

アンナがリョウトたちに就寝の挨拶を告げ、部屋から出て行った後、三人は互いに顔を見合わせて大きな溜め息を吐いた。

「……やれやれ。厄介な事になったな……」

そう呟いたのはリョウトだったが、アリシアもルベッタも彼と同じ心境だった。

部屋の中に沈滞する沈黙を切り裂いて、言葉を発したのはアリシアだった。

「本当に彼女、連れて行くの？」

「仕方ないだろうな。どうやら意地になっているようだし」

「意地？」

「そつだ。俺たちに対して意地を張っているのさ」

意味が判らなかつたらしいアリシアに、ルベッタは詳しく説明する。

「どうやらあの女……俺のリヨウト様に気があるみたいだからな。奴隷風情である俺たちがリヨウト様の傍にいる事が気に入らないのさ。そこで自分もリヨウト様の役に立つ事を証明しよう」と

「そういう事だったのね。ところで今、さらっと聞き逃せない事を言わなかったかしら？」

「んー？ 気のせいじゃないのか？」

じーつと剣呑な眼で見詰めてくるアリシアを、ルベッタは涼しい顔で受け流す。

そんな彼女たちのやり取りをよそに、リヨウトはずっと腕組みしたまま考え込んでいた。

「どうかしたの、リヨウト様？」

「いや、もうこの時点で最初の計画を断念しなくちゃならなくなつたな、と思つてね」

「最初の計画？」

「そう。岩魚竜を狩るための計画だ。僕の考えでは、魔獣たちの力を借りて岩魚竜を陸に引き揚げ、狩るつもりだったんだが……」

「ふむ。殆どこの前の愚鈍牛の時と同じ作戦だな」

ルベッタの言葉に、リヨウトは苦笑する。自分でもこの手段ばかりに頼っているなと感じていたのだ。

「だけど、それが使えなくなつた」

どうして使えなくなつたのか、とアリシアとルベッタは疑問に感じたが、すぐにその理由に思い当たつた。

「彼女が同行するから……ね？」

「ああ。僕の異能はあまり他人に知られたくない。アンナの前では使いたくないんだ」

リョウトの言葉に、アリシアとルベッタは何か重いものを飲み込んだような気持ちになった。

リョウトの従えている魔獣。その存在はいつの間にかアリシアとルベッタにも大きなものとなっていたのだ。

リョウトが魔獣を呼べば何とでもなる。そんな楽観的な思いが、いつしか二人の心のどこかに根を張っていた。

だが、今回はその魔獣の力は借りられない。という事は、自分たちだけの力で岩魚竜と対峙しなくてはならない。

当たり前といえば当たり前の事だ。だがそれでも、まるで武器も持たずに強大な魔獣と対峙しなくてはならないような不安感が二人にのしかかる。それ程までに、二人の心のどこかでリョウトの魔獣たちの存在は大きくなっていったのだ。

「明日になったら、もう少し岩魚竜の事を詳しくアンナに聞かないといけないかな」

椅子の背もたれに身体を寄りかからせ、リョウトは天井を見上げながらそう呟いた。

「それにもう一つ問題がある」

椅子の背もたれに寄りかからせていた身体を元に戻し、奴隷たちの顔を順に見回しながら更なる問題点を告げるリョウト。

「ローをどうするか、なんだが……」

奴隷たちの視線がテーブルの上にちょこん、と乗っている小さな黒竜へと集中する。

アンナが部屋に来た時は、リヨウトたちの他に見知らぬ気配を感じたのでベッドの下に隠れたローだったが、彼女がいなくなるそのそのと這い出て来て、最近では定位置になりつつあるテーブルの上に乗っていた。

アンナは王立研究所で魔獣の研究を専攻していると聞いていた。そんなアンナの眼に、幻と言っても過言ではない竜はどのような存在として写るか。想像するのは難しくはあるまい。

「もちろん、我はリヨウトと一緒にいくとも。リヨウトを見守る事こそ、我とガランが交わした最後の約束だからな。だが……今回はかりは一緒にいない方がよいかも知れんな……」

そう呟いたローはどこか寂しそうだつた。

考えてみれば、リヨウトが祖父の小屋に引き取られた時、すでにローはいた。それ以来、リヨウトとローは常に一緒だったのだ。

それにリヨウトとしても、ローと一緒にいたいという気持ちはある。リヨウトにとってローは、アリシアとルベッタとは別の意味で大切な存在なのだから。

「……この際、あの女にリヨウト様の異能やローの事を話してしまつたらどうだ？」

ルベッタのこの提案に、アリシアは露骨に眉を寄せた。

「私は反対ね。これはあくまでも私個人の意見でしかないけど、どうもあのアンナって人は好きになれないわ」

「おまえがあの子を好きになれないのは、リョウト様に色目を使うからだろう?」

「そ、それは……確かにそれは否定しきれないけど……」

真つ赤になりながらちらつと視線を向けてくるアリシアに、リョウトは微笑みながら頷いてやる。

「だけど、ルベッタの言う方法もありかも知れないね。彼女は信用できると思う」

「まあ、基本お人好しのリョウト様ならそう言うと思ったよ。だけど、これだけは覚えておいてくれ。本当に心から信用できる人間は極めて少ないって事をな」

肩を竦めつつもそう忠告してくれるルベッタに、リョウトは先程アリシアに向けたものと同じ微笑みを浮かべる。

「そんな事はないと思うよ? だって僕はもう二人も心から信用できる人間を見つけたからね」

真つ正面から臆面もなくそう言い放つリョウトに、ルベッタにしては珍しく赤面しながら、照れくさそうに視線を逸らしながらぼりぼりと自分の頬を引っ掻いた。

その後も三人 と一体 で相談した結果、リョウトの異能に關してはぎりぎりまでアンナには秘密にする事で落ち着いた。

そしてローに關しては、一緒に旅する以上見つかるのは時間の問題であると判断し、王都から出て人気がなくなった辺りでアンナに打ち明ける事にした。

万が一、アンナが必要以上にローに興味を示した場合、何らかの

形で脅迫まがいの行為に出るのも覚悟の上で。

そして翌朝。三人が階下の酒場兼食堂に降りると、既にアンナは待っていた。

「あ、おはようございます、リヨウトさん。夕べはご迷惑をおかけしました。はい」

テーブルについていたアンナがリヨウトたちに気づき、立ち上がってぺこりと頭を下げた。

だが、その視線はリヨウトのみ向けられており、アリシアとルベツタには一瞥さえしなかった。

二人が奴隷だから挨拶する必要さえないと考えているのか。それとも『敵』と認定したためか。

リヨウトもアンナの態度に多少感じるものはあったが、普通は奴隷にまでわざわざ挨拶しない事は知っていたので、敢えてそこには何も触れなかった。

当然アリシアとルベツタの彼女に対する好感度は下がる一方だったが、それが普通の対応である事は心得ていたのでリヨウト同様顔色も変えなかった。

「はい。それで夕べの私の提案は了承してくれました？」

「まあ、いくつかの条件付きでならね」

「はい？ 条件……ですか？」

こくん、と首を傾げながらアンナは反芻した。

「岩魚竜との戦闘に限らず、何か荒事が生じた際は、絶対に僕の指示に従う事」

「はい、判りました。条件はそれだけですか？」

「いや、他にもあるけど……今はちよつと言えないんだ。その時に

なったら改めて伝えるよ。それで構わないか？」

「内容次第ですけど……でも、リヨウトさんの言うことならどんな事でも了承しますよ！ はい！」

そう言つて満面の笑みを浮かべるアンナを、リヨウトの背後からじーっと睨め付ける視線が二つ。

「あの女……にここにこと無駄に笑顔を振り時きやがって。明かにリヨウト様に好印象を与えるつもりだな……」

「ええ。魂胆が見え見えね」

「おもしろい。これは俺たちに対する宣戦布告と受け取ったぞ……」
「私たちも遠慮する必要はないって事ね……」

何やら物騒な事を呟いている奴隷たちを知つてか知らずか、アンナはリヨウトに向けて笑顔の花を一杯に咲かせていた。

岩魚竜狩りに出発するのは明日の早朝と決まり、本日は旅に必要なものの買い込みなどの準備を行う事にしたリヨウト一行。

アリシアとルベツタは旅の途中で必要となる食料や消耗品の買い出しに。リヨウトはアンナから更なる岩魚竜の情報収集。

リヨウトとアンナが宿に残る事を知った時、アリシアとルベツタが珍しくリヨウトの言いつけに渋る一幕もあつたが、結局は彼の言葉に従つて買い付けに出かけて行つた。

「じゃあ、岩魚竜の体長は大きくても5メートルぐらいって事かい？」

「はい。そうです。過去に6メートルを超えた個体の報告例もありますが、それは例外と考えていいでしょう。平均した大きさは4メートル前後といったところですね」

岩魚竜の具体的な情報を聞きながら、リョウトはどのようにして岩魚竜と戦うかを考える。

船などに乗って水中の岩魚竜と対決するとなると、リョウトとアリシアの武器ではまず役に立たない。そうするとこちらの攻撃手段はルベッタの弓のみとなってしまうが、その弓でさえ水中ではどの程度まで威力を保てるか判らない。

かといって陸に引き揚げるにしても、今度は強力な水噴射が待っている。

だがそれでも、リョウトは岩魚竜と戦うなら陸に揚げるべきだと判断した。

理由は先程も言った通り、相手が水中では自分とアリシアが戦力外になってしまう事だ。

それぐらいなら危険度は高くなるものの、陸に揚げてしまつて三人で協力した方がいいだろう。

だが、そうするにしても問題はまだ残されている。

「……………どうやって岩魚竜を陸に揚げるか……………それが問題だな。4メートルもある巨体では、釣り上げるといっわけにもいかないだろうし……………」

岩魚竜を陸に引き上げる。その前提こそが最大の問題なのだった。

05・アンナの提案（後書き）

『魔獣使い』更新しました。

今回はリヨウトとアリシア・ルベッタの間に、アンナが何とか入り込もうと決心と努力するお話。

後半は岩魚竜に関する追加情報ってところですか。

今回はもう少しアリシア・ルベッタvsアンナの女の戦いを描写して、いよいよ岩魚竜狩りに出発する予定。

うん、予定。予定は決定じゃないから予定って言うんだよね？

次もがんばります。よろしくお願いします。

06 - もう一人の異能持ち

噂は聞いていた。

今、街で評判の吟遊詩人。髪も目も黒いがなぜか左目だけが紅い事から、片紅目の吟遊詩人と呼ばれているという。

最近ではかつての天才吟遊詩人、アクセル・ウィードの再来とまで呼ぶ者もいるらしい。

アクセル・ウィードとは、十年程前までこのカノルドス王国で名声の高かった吟遊詩人で、主に竜倒の三英雄の英雄譚を唄っていた吟遊詩人である。

今ある有名な竜倒の三英雄にまつわる英雄譚は、その殆どが彼の手によって作られた唄だという。

そんな話題の吟遊詩人。名前までは知らなかったけど、一度その唄を聞いてみたいと思っていた。

その矢先。

彼女の勤め先である王立研究所の同僚の女性から、魔獣の生態に詳しい人物を探しているという話を聞いた。

聞けば、とある魔獣狩りハンターが岩魚竜いわぎょりゅうを狩る事になり、その詳しい生態や特徴を知りたいのだと言う。

「良かったらあなた行ってみれば？ それなりの謝礼も出るそうだし。しかも聞いた話だとその魔獣狩り、結構いい男らしいわよ？ どういうわけか左目だけが紅いのですって。なんかミステリアスよね？」

左目だけが紅い。その同僚の言葉に、彼女の心の中の何かが反応した。

彼女はその同僚から詳しい話を聞き、さっそく足を向けてみる事

にした。

この街にある、『轟く雷鳴』亭という宿屋件酒場へと。

そして宿屋の主人を介して対面したその魔獣狩りの男性。

魔獣狩りと聞いて、大柄で野性的な男性を想像していた彼女だが、その男性は優しい面立ちで、始めて会う彼女に丁寧に対応してくれた。

そして聞いた通りに紅い左目。

取り立てて美形というわけではないが、整っていると聞いていいだろう容貌。優しいだがそれでどこか芯の強さを感じさせる立ち振る舞い。

今まで彼女の周囲の男性といえば、研究に没頭するひよろりとしたタイプか、金銭にものをいわせたスマートだが薄っぺらな男ばかり。

今までに出会った事もないタイプであるその男性に、彼女の心臓はなぜか全力全開で鼓動する。

少し気になるといえば、彼の背後に控えている仲間の魔獣狩りらしき二人の女性。

彼女たちが時折見せる、彼に向ける視線に含まれるもの。それが同じ女性である彼女にははつきりと判った。あれは間違いなく情愛であると。

何となく面白くないな、と想いながらも、表面には出さずに予定通り岩魚竜に関する話をする。

持参した資料を元に話す彼女の言葉を、魔獣狩りの男性は真摯に聞いてくれた。

リョウト・グラランと名乗ったその男性に対する彼女 アンナ・グールドの関心はどんどん大きくなっていった。

一通りの説明をした後、店の主人が居合わせた者たちに酒を振る舞った。

聞けば、今回の岩魚竜狩りは、主人が無理にリヨウトたちに頼み込んだのだそうだ。

そしてそんな彼らの激励のため、主人が酒を振る舞ってくれたのだ。

もちろん、アンナもリヨウトに誘われてご相伴に与ることにした。元々酒は好きな方なのだ。

宴の途中、主人に乞われてリヨウトが楽器を持ち出した。途端、周囲の客から期待の籠もった歓声上がる。

どくん、とアンナの心臓も一際大きく鼓動した。

そして楽器を鳴らしながら大気を震わせる彼の唄声。

彼が紡ぎ出す唄声は確かに素晴らしかった。

そして、リユートを弾きながら唄う彼の姿にすっかり見惚れてしまった。

そして彼女は悟る。やはり彼が噂の片紅目の吟遊詩人なのだ。

そして益々気になり出したのは、彼の仲間と思われる二人の女性の事。

彼女たちは彼をどう思っているのだろうか。そして彼は彼女たちをどう思っているのだろうか。

普段の彼女なら例え思っても口に出したりはしない疑問。だがこの時の彼女は酒の勢いもあり、その疑問を口に出してしまった。それも決して穏やかとは言えない雰囲気で。

結果判ったのは、彼女たちはリヨウトの奴隷であるという事。

だが、彼女たちの奴隷らしからぬ堂々とした態度が、アンナの気に触った。

本来、奴隷とは自己主張などせず、必要な時以外は背後で黙って控えている存在なのだ。

事実、彼女の実家にいた奴隷たちはそうだった。

アンナの実家は貴族ではないが、それなりに裕福な家だった。曾

祖父の代から続く商家で、規模もそれなりのものを誇っている。実家では十数人の奴隷を有しており、彼らを様々な仕事を行わせていた。

彼らは現在の主人の娘であるアンナに対し、あくまでも奴隷として接していた。

与えられた仕事のみをこなし、求められなければ口さえ開かず。

それが彼女の奴隷に対する認識だったのだ。

だが、彼女たちは違う。

奴隷なのに自由に自由に生き生きとしており、それどころかリヨウトの奴隷である事に誇りさえ感じているようだった。

主人であるリヨウトの許しもなく口を挟み、それどころか彼をからかう素振りさえ見せる。

そしてリヨウトはそんな奴隷たちを罰する事もなく、実に楽しそうに接していた。

その事が彼女に更なる苛立ちを感じさせ、思わずリヨウトに奴隷に接する態度がおかしいと口出しまでしてしまった。

言いきってしまったえば、奴隷は所有物である。どう扱おうが主人の自由だ。それこそ鞭打って無理矢理働かせようが、リヨウトのように家族として接しようが。

そんな事は判っている筈なのに、苛立ちから口を出してしまった。結果、彼の奴隷たちとは険悪になり、最後には彼から水をかけられる始末。

その後、彼らの部屋へと移動したアンナ。そこで奴隷たちの気持ちとリヨウトの彼女たちに対する気持ちをはつきりと思い知らされた。

彼らの間にある絆。それが羨ましくて仕方なかった。

それがどんな感情からくるものか、アンナもこの時にははつきりと理解していた。

だからだ。彼らの狩りに同行を申し出たのは。

奴隷たちとは違う自分の価値。それをリヨウトに判って欲しくて。

少しでもリヨウトに自分を認めて欲しくて。

例えそれが彼らの足を引つ張る事になると理解していても。

そうせずにはいられなかったのだ。

そしてこれは、アンナなりの奴隷たちに対する女としての宣戦布告でもあった。

そしていよいよ王都を立つ日。

アンナが待ち合わせ場所である王都の中央広場に着いた時、既にリヨウトと二人の奴隷たちの姿があった。

「はい、お待たせしました、リヨウトさん！」

明るく挨拶したアンナに、リヨウトは笑顔で手を振った。背後の奴隷たちもぺこりと頭を下げるものの、どこか慥然としたものが感じられる。

彼らはそれぞれ飛竜の魔獣鎧まじゅうがいの上から丈夫な革製の外套を羽織っている。一般的な魔獣狩りの旅の格好だ。

そしてアンナも上は布製ではあるものの袖の長い厚手で丈夫なもの、下も同様のパンツにがっしりとした革製のブーツ。

そして背には食料や着替え、その他生活用品を納めた背嚢。

これもまた一般的な女性の旅装束といえるものだ。

この時、リヨウトたちの姿を見たアンナはとある違和感を抱いた。そしてすぐにその違和感の正体に気づく。

それは彼らが携えている武器だ。

昨日『轟く雷鳴』亭で出会った時、リヨウトは双剣、アリシアは長剣と楯、そしてルベッタは弓を主な得物としてしていると聞いた。

だが、本日彼らが携えていた武器はそれらとは明かに違う。

ルベッタの弓に変化はない。実際は先日仕留めた愚鈍牛ぐどんぎゅうの素材を用いて強化した弓なのだが、そんな事はアンナには判らない。

本日リヨウトが携えている武器は双剣ではなく、頑丈そうなメイスと方形の楯。そしてアリシアの得物は布に包まれた巨大なシロモノ。形状から判断して大きな戦斧か戦槌と思われる。

リヨウトとアリシアの武器はどちらも、魔獣素材を用いた武器
いわゆる魔獣器まじゅうぎの類ではなく、金属製の重量のあるものだ。

他には三人とも短剣と剣鉞と呼ばれる切っ先の尖った鉞を所持している。これらは武器として使う事も可能だが、どちらかといえば野外生活のための道具だ。

剣鉞は藪や枝を払ったり、野営の時の薪を割ったり、仕留めた得物の牙や爪を採取する事など様々な場面で重宝する道具だ。

短剣の方は穴を掘ったり、食事の際の調理に用いたりとこちらも色々な用途がある。

「あ、あの、リヨウトさん？ その武器は一体……」

「これかい？ 今回の相手は岩魚竜だからね。剣類よりもこちらの打撃武器の方が効果があると判断したから、新調したんだ」

そう言われてアンナも納得する。

岩魚竜の鱗は極めて固い。剣や槍などの刃で相手を切り裂く武器では固い相手には効果は低い。

だが、衝撃を武器とする打撃武器ならば、固い鱗の上からでも十分ダメージを与えられる。

魔獣に関して研究し、実家の商家では武器も扱っていたため、アンナにはリヨウトの意図が理解できた。

実際、これらの武器は今回の狩りのためにとリヨウトがリントーを通じて手配したものだ。

だが、理解できないものもあった。

「はい、えっと……アリシア……だったかしら？ あなた、その巨大なもの……重くないの？」

アンナの視線がアリシアが背負った巨大な『金属の塊』に突き刺さる。

柄の長さだけでアリシアの足元から腰程まであり、更にその先に打撃部分がある。

その重量は下手をすると、当のアンナの体重ほどはあるのではないか。

だが、アリシアはその『金属の塊』を軽々と持ち運んでいるのだ。

「確にな。おまえ、絶体に人間としておかしいだろ？」

「失礼ね！ 人間としておかしいって何よっ！？」

アンナの言葉の尻馬に乗り、明かにからかいを含んだルベッタの眩き。

そんなルベッタに反論しながら、アリシア自身、確かにおかしいとは感じていたのだ。

「前はそんな事なかったのに……最近 愚鈍牛を狩るちよつと前ぐらいからかしら？ 妙にものが軽く感じられるのよね……これだって、全然重く感じないし」

アリシアは背中から取り出した『金属の塊』を、両手でしっかりと保持しながら眩く。

そしてその場で軽く振り回してみる。上段からの振り下ろし。振り下ろされた『金属の塊』は、晴眼の位置でぴたりと静止する。その際、一切ぶれる事もなく。

そして左右へ振り回し、続けて下から上へと斬り上げる。どの動きも重量に負けて身体が泳ぐような事はなく、全てがきっちり制御されていた。

とてつもなく巨大な武器を見事に操るアリシア。次第に周囲に居

合わせた人々からも注目を浴び、あつという間に人垣が形成される。その人垣の中央で、更にアリシアは数度『金属の塊』を振り回す。その都度、周囲の観客から感嘆の声が上がる。

中にはアリシアの行為を大道芸か何かと勘違いした者もいて、数枚の銀貨を投げて寄越す者まで現れる始末。

自分自身の力にアリシアも驚きを隠せない。

確かにこれは、ルベッタの言ではないが異常というものだろう。

以前、リョウトと始めて出会った頃など、当時持っていた剣と楯を十数分も振り回せば腕が重くなっていた。

だが今は、それよりも遥かに重量のあるこの『金属の塊』を振り回しても、まるで苦にならない。

「どう思う？ リョウト様」

『金属の塊』をぶんぶんと振り回すアリシアを見ながら、ルベッタは何やら考え込んでいるリョウトに意見を求めた。

「僕にも正確な事は判らないが……推測ぐらいなら立てられる」

「ほう。その推測とは？」

「それは」

リョウトはそこまで言いかけて、改めて周囲に視線を走らせる。

「今は取りあえず出発しよう。どうやらちょっと目立ち過ぎたようだ」

周囲の人垣は更に大きくなっていった。

今では『金属の塊』を振り回すのを止めたアリシアに、観客から「もつと続ける」という無責任な野次まで飛び交っている。

それを見たルベッタも、ふうと大きく溜め息を零す。

「同感だ。リヨウト様の推測は歩きながら聞かせてくれ」

「これは僕の推測に過ぎないが……アリスア、君は異能持ちだ」

王都を出てしばらく。

西へ向かう街道にはぼつぼつと旅人の姿が見受けられるが、リヨウトたちの周囲には誰もいないに等しい。

そして彼らも歩きながら、先程のアリスアの異様な力に関する推測をリヨウトが語って聞かせた。

「わ、私が異能持ち……？」

リヨウトの予想外の言葉に、彼の数歩後ろを歩いていたアリスアが思わずきょとんとして自分を指さす。

「え？ で、でも、今まで異能なんて全然……」

「これは以前、亡くなったじいさんの友人から聞いた話なんだが……」

俄に信じられないリヨウトの言葉に、アリスアは相変わらず呆然としたまま彼の話を聞いていた。

アリスアの横を歩くルベッタは明かに面白そうな表情を浮かべ、専攻分野が違うとはいえ研究者であるアンナまで、興味深そうにリヨウトの話に耳を傾ける。ちなみに、彼女はちゃっかりとリヨウトの横を歩いていた。

「異能というものは何らかのきっかけがあって目覚めるものらしい。中には生まれつき異能を持ちながらも、そのきっかけがなくて異能

が目覚めないまま死んでいく者もいるそうだよ」

「じゃあ、アリシアは元々異能を持っていたが、最近までそれが目覚めなかったというわけか？」

「あくまでも僕の推測ではだけどね」

リョウトの説明になるほどと頷くルベッタ。

「はい、リョウトさん。それでアリシアの異能とは具体的にはどのようなものなのでしょう？」

研究者としての性か。好奇心に瞳を輝かせたアンナが、律儀に拳手しながら問いかける。

「僕の考えでは……アリシアの異能は『強力』^{キョウリキ}の異能だと思う」

元々少ない異能持ちだが、それでも発現数の多い異能と少ない異能というのは存在する。

『治癒』や『雷』といった異能は少ない部類だが、逆に多い部類に分類されるのが、今リョウトの言った『強力』などの身体強化系の異能だ。

『強力』 『超反射』 『駿足』 などといった異能が身体強化系代表例だろう。

「なるほど。アリシアは最近その『強力』の異能に目覚めたため、あんな怪力を発揮するようになったというわけだな」

「でも、その異能が目覚めたきっかけは何だったのですか？ はい」

アンナの質問はリョウトに向けられてのものだったが、それに答えしたのはルベッタだった。

「そりゃ決まってるだろう。アリシアがリョウト様に教え込まれた女としての悦びがきっかけだったのさ」

と、赤面するアリシアとアンナに向けて、ルベッタは意味もなくいい笑顔で右手の親指を立てて見せた。

06 - もう一人の異能持ち（後書き）

『魔獣使い』更新。

今回はアリシアが異能に目覚めるの巻。

もともと、アリシアには異能持ちであるという設定がありました。ただ、異能の内容までは決まっておらず。しかし、あまり強力な異能もなんだかなあ、というわけで単純に怪力を発揮できる『強力』の異能に落ち着きました。

まあ、地味に強力な異能ですけどね。

そういえばアリシアにはもう一つ隠し設定があります。実は彼女、『辺境令嬢』のヒロインであるミフィシーリアとは再従姉妹に当たります。といても、小さい頃に少し交流があっただけで互いに名前ぐらいしか知りませんが。

この設定を使うかどうかはまだ未定。逆にこのまま死設定になる可能性は大。

今後もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8514v/>

魔獣使い

2011年10月13日11時49分発行